明治三十二年八月五日發兌

女鑑

第百八拾六號

東京國光社



女鑑第百八拾六號

目録

女鑑

論説

史談

家政

學園

漫録

文林

雜報

敎の庭

柳澤里恭の妻幼兒の圖



凉風

今日の獵、人は、獸を得てよろこぶ、朕は、ひとり善言を得たりと、これは　雄略天皇が、野猪の突き出でたるを、舍人に命じて射さしめ玉ひしに、舍人恐れてさけしかば　天皇、怒らせ玉ひて、その舍人を切らんとせさせ玉ひしに、皇后盤之姫、之を諫め玉ひ、獸の故を以て、人を殺す、豈禽獸に異ならんやとの玉はれしを、天皇、大に感ぜさせ玉ひ、即ち、かくの玉ひて、よろこばせ玉へるなり。それにはあらねど、今日の土曜、人は日光山に、大磯に、夏をさけ、暑さを洗はんとす。我はひとり、學びの窓に凉風を得たり。日光山、誠に詰構なり。足曳の山、又山の奥、夏は尋ね行かでや。土曜もなほひとへにすゞしく、袷を着するはかりなり。大磯、亦、汐干、汐充ち暑さを洗ふに甲斐ある心地す。其の他鎌倉、

逗子、塩原、草津、箱根、つくばも、葉山、しげ山、げに、すゞしき山、すゞしき浦は、しげくも、澤にもあり、我も、黄金あらんには、都のちりを避けて、何處にも行くべし、しろがねある身ならんには、よき土地に、暑さを避けんものを、白銀も黄金も、玉もなき身、是非なく綠窓にとぢこもりて、なくせみの聲と共に心に泣くを、貧しき身は、いとまだになく、はては、圖書館に書をしらべざればならずさへなりぬ。あはれ、此のあつさに、人は日光山に、大磯にと夏をさくる結構のものさへあるに、おのれは、それも叶はぬのみか、土曜、なほ休業する事さへ叶はぬ、あはれ、甲斐なき身やとかこちつゝ、圖書館に至りしに、我れのみならず、歷々の人々さへ我よりさきに來りて、傍目もふらず、書をよみをりぬ。かこちし事のはづかしうなりて、我もひねもす、學びの窓にあつさをもうち忘れて、しらぶる程に、日はいつしか落ちて、木立に、日ぐらしの鳴く音すゞしく、いつもよりは月の光りもさやかにさしこみ、歸る袂の風のすゞしさ、天、何となく、我ひねもすの强勉を勞らひ、月の光も何となくほゝ笑む如く、螢の五つ三つ、行くさきをてらすも昔人

の使かと思はれて、いとをかしく、うれしき心地しぬ。あはれ、予とても、父に從ひ、大磯に海水をあび、母に伴はれて、近きほとりの出湯に汗を洗ひ、又瀑布に行きし事もありけり、其の時、其の折りは、げにすゞしくもありしかど、行かぬ今日は、昨日にましてあつく、いぶせく、樂しみの後のくるしみとは、かゝるを云ふならんかなど感ぜしを、今日は父母も、遠く、黄金も不自由なるまゝに、ひねもすを學びの窓にくらしぬ。くらして、はじめて、此のすゞしさを知りたり。それ、世に勉強ばかりたのしき事はあらじ、勉強せし後ばかり心よき事はあらじ、心よき袂にみつる風ばかり涼しきはあらじ、くるしみの後の樂しみとは、かゝるを云ふなるべし。あはれ、涼風をとらんと欲する孃たちよ、まづ、ひねもすを勉強し、その勉強の窓に、勉強の快にとりてみよ、げにすゞしさは、又まさるものなき心地やせん。



論説

日本女子今後の覺悟（三）

三輪田眞佐子

次に注意すべきは、人分の思想にぞある、抑もわが國、往時の如く鎖國の主義を取り、以て、廣く萬邦と交通せざるのみならず、國民の血統には地國の分子を含まざるを以て、上は、畏くも皇統の一系なるは更なり、下は臣民に至りても、四隣同族一國同脈の國體をなせしは、自然の結果なるべし。これに加ふるに、武家時代の始より、士農工商の差別を立てけるを以て、各、その土に安じ、その所を定めて、祖先傳來の家業を營みければ、國民擧りて古郷の山川より相離るゝを忌み、亦家名の長へに榮ゆるを祈りつゝ、祖先の禮拜を行ひ、一門これに由りて結合し、遂に因襲の久しき、純然たる家族制度の國民となりけんかし。蓋し支那朝鮮より、皇國の恩澤を慕ひて、歸化せしものもありけれど、幸に、彼等も家族制度の國に生れしを以て、我に同化すること容易なりしならん。

思ふに、一得一失は自然の數なれば免れ難し。されど、わが國も鎖國のまゝまらんか宇

内の全局を大観すること能はず。亦、各國の文化を參酌すること能はざるべし。且つ士農工商の分を定むるときは、天才の士女が、性得の能力を顯さん機會なくして、進取の氣を妨ぐるならん。これを要するに、昔日の、わが國情は、種々短所もありけんなれど、長所と見るべき點も多かるべし。すなはち家族制度の行はるゝ國風には君は君たり。臣は臣たり。亦親は親たり。子は子たり。將た婦は、夫に從ひ、一家團欒し、施いて隣人相親み、相信ずるなるべし。

あはれ、今や、外人の雑居と共に家族制度、漸々衰へて、家長の權威、おのづから地をはらはんとす。終に歐米の如く、全く個人制度に移るかも知るべからず。勿論人々個々に行を果し事を定むるは獨立の思想を養ひ、進歩の道なりとはいへども、己れがため、國風を害し民俗を破らんか、その得失相償はざるに至るべし。故に專ら家庭の樞機を主る婦人たるものは、世の風潮を制し、この點を改良すべし。彼の點は保守すべしといふが如く、自ら、善きものを撰ばざるべからず。そは今後日本婦人の講すべき急務にこそあらめ。

古歌に(筑波嶺のこのもかのもに陰はあれど君が御蔭にます蔭はなし)とあり。實に畏くも、わが　大君の御惠の露は、周くわれら、臣民を濕し給ふなり。故にわれら臣民たるも

のは、たとひ山はさけ、海はあせなん世なりとも、決して二心を懐くべからず、上下心を一にして、これの帝國を經營すべきものなれど、この點につきては秋毫はかりも、外人の行に傚ふべからず。その他孝道を踐み、節義を重んじ、婦人の本分を盡す如きは、飽くまで、家族制度の慣習に從ひて、世界無雙の特色を作るべし。唯、工藝學理の如きは、自々別の主義を採り、敢て、舊慣を墨守せず。以て日進月歩の世界に、むしろ魁たるべし。讀者、この區別を悟り本末前後を顚倒なせそ。

思ふに人倫の大道に至りては、我を守株するは、最も良し、恐らく、御國の道に勝るものあらじ、されど國民の公共心に至りては、益々發達せしめざるべからず。そは人々幼時より家庭の慣習、及び教訓を以て、漸次に養成すべきものなれば、家庭教育を主る婦人たち慮をこれに注ぎ、外人の侮を受くべからず。

そも〳〵おのれ、此のころ草枕旅にしあれば、都にありしよりも國民の公共心につき、その乏しきを感ずること、少からず。今、その例を擧げんに、滊車の二等室などには、中等以上の人物多かるべきを乘客の行爲を見るに、烟草の餘燼を投ずべき、設備あるに、これに投ぜず、あるは所を撰ばずして、唾を吐き、あるは席に塵を亂し、茶を散じて飜然とし去り。後より來る客の迷惑を顧ざるもの丶如し。たま〳〵、厠に行けど不潔を極む、

他、これに類すること枚擧に暇なし、これ、人々利己主義にのみ驅られて、公共心に乏しき證なり。若し今日、これを改めずば、國民の品格を落すに至るべし。

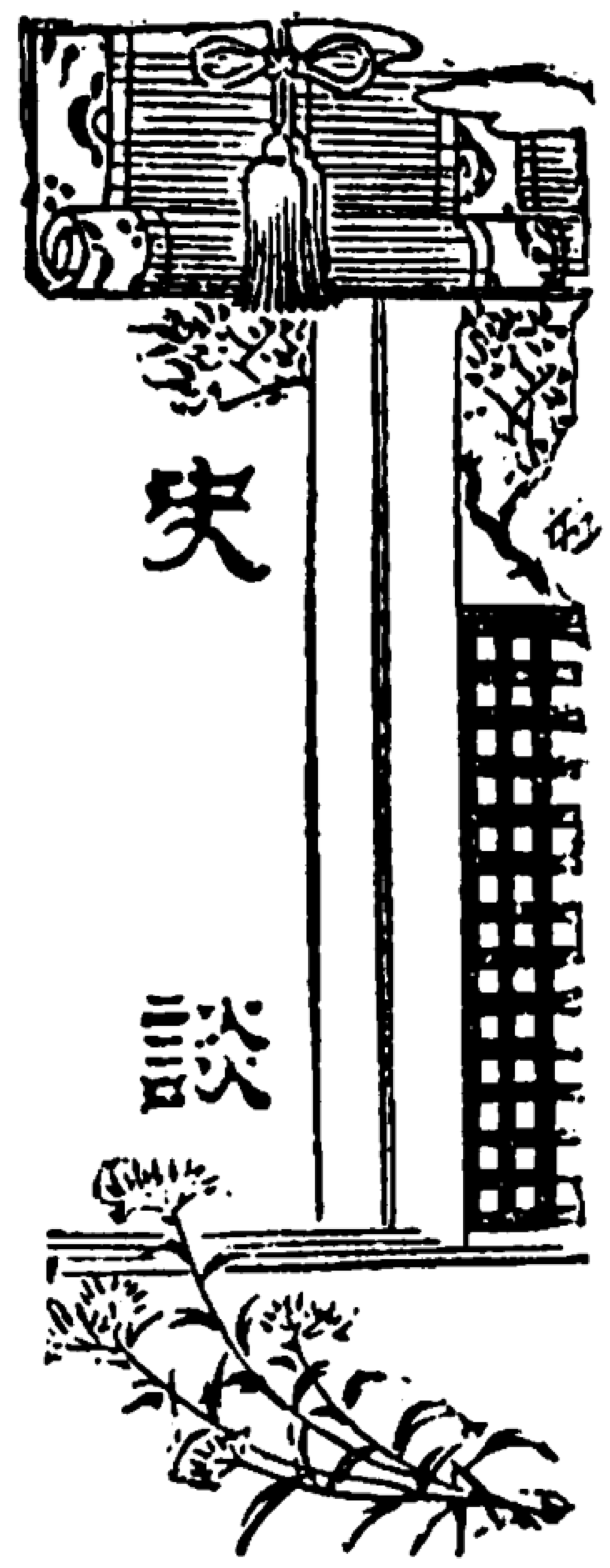
貯蓄を重ずべき論

吉野眞澄

貯蓄の必要なる事は、今更喋々をまたざるなり。然れども、たま〱感じたる事あれば、こゝにいひ出でんとするなり。おほよそ、貯蓄の性あるものは、各、身ゆたかに、且、他にもめぐみうるはし生を全うすと。木枯吹きすさみ、散り敷きし、紅葉の上に、白霜置きておのが宿は尾花のみさらばひ立ちて、いともさびしきころ、きり〱す、蟻のもとに到りて、乞食しけるに蟻曰はく「彼の夏日、食物の路に横はれる季に、何をして、くらせしかと云へば、きり〱す答へて、「吾輩三伏の熱をさけて、青草のかげに淸風をむかへ、或は歌ひ、或は舞ひて、日を送りきといへり。時に、蟻更に語をつぎて、吾等は、砂やけ水もにえたゝんばかりの熱さをもいとはず、日々汲々として業をはげみ、以て今日の備としたり。汝が如き遠慮なきものはあらず。といひしに、きり〱すは、いたく耻ぢきとなん。又、彼の溜池を見よ。雪となく、あられとなく、五月雨までをも、年中、溜め置けばこそ、六月の水かる頃、ひわれし田面をも濕すなれ。更に引きわげて、人類

界を見よ。文明の國民に蓄積多く、一人にして幾億の財あるに非ずや。されど、一人の、此の行の有となきとにて、大に一國の貧富にも關すといふべし。さて一家の蓄積は、内事をつかさどる婦人の力によること大なり。兒童の敎育より、衣食のことに至るまで、總て經濟を主とし、無用虛飾を省きて、蓄積に充てざるべからず。是をかへりみず、あるにうちまかせておごりをはしいまゝにせんには、異日蟋蟀の耻をもまぬかれざるべし。ことに婦人、不幸にして、夫に別れ、何の蓄積もなきより、やむを得ずして、みさをゝしもかふるものも、世にはありとなむ。くちをしき限りならずや。故に、深く根底の蓄を重んじ、雨みぞれと入り來る財あるをりに、池のごとく溜め置きて、水無月の水なきが如き時の備とせざるべからず。思はざるべけんや。

人よろづに付けて儉約なれど、心、自、内にむかふ。心内に向へど、思ふことおろそかならず。思ふこと、疎ならざれど、萬善、こゝに萠す。古人曰く、瘠土之民莫レ不レ向レ義思也と、其の意義深く、且つ遠し、潜心以て玩味すれど、歸趣、窮り無きを覺ゆ。嗚呼瘠土の民なる哉。勤儉の民なる哉。

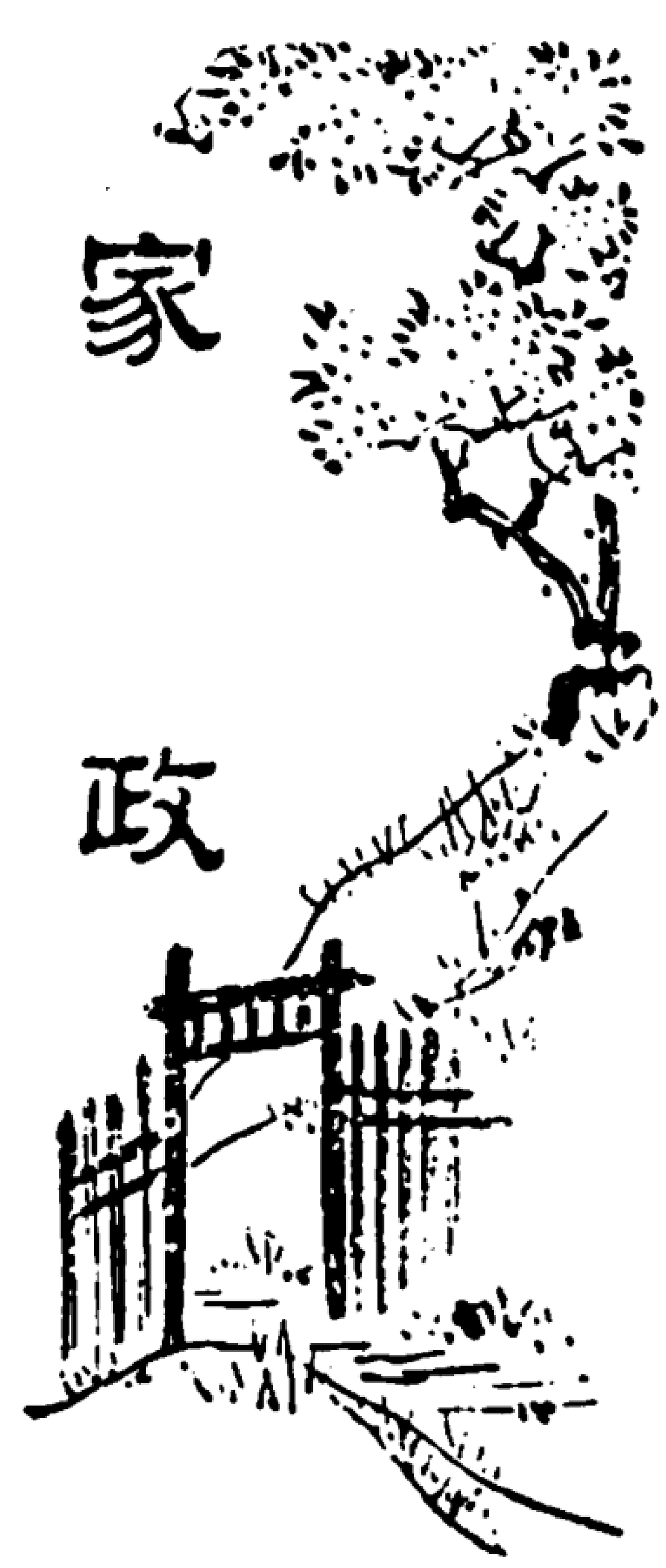


柳澤里恭の妻

鹽井ふく子

日本武士の中、尤も多藝多技、殊によく、事をはげみ、よく人道を治めたる柳澤里恭に配するに足る程の妻女と云へば、其の人となりは、己に維すはかられなん。其が名は、何と呼びけん。何氏より嫁ぎしものなるや知らねど、やう〳〵三歳にして、生みの母におくれ、まゝ母に育てられけるが、その繼母なるものいときびしき生質にて、やう〳〵歩みそめたるばかりなる五ッ六つの年より、はやく水仕の業をとらせ、七歳のとしには、はやく、なにはずに咲くやこの花の筆あとを試ねさせ、物よむ事、たちぬひの事をさへ、早く敎へられ、實の子ならねど、敎訓足らねど、末に至りてそしられんは口惜しとて、羽根つく遊びをも、えさせざりけり。世にはいたづらざかり、遊びざかりと稱する年なみ、流石に春おもしろくつく羽子の音きゝては、共に遊びたく、すみれつばなにあこがるゝ友を見ては、そゞろうらやましくも思ひしかど、もとすなほなる心に、母の仰せをかしこみ、敎のまゝに物をかき、物をよみ、物をぬひ、水仕の業までも甲斐〳〵しくとりて、つゆ仰せにもどらず、いそしみはげみしかど、物かく事も、よむ事も、人にすぐれ、殊に女子の道とて、一入きびしく敎へられたるたちぬひの業は、尤もすぐれ、小袖など、一日に一重ねづゝ縫ひて、餘事までもかゝぬばかりに、早く、また、其の上手なる事、物縫ふ職人の見てはおどろくばかりなり。後里恭の妻となり。心ばへもやさしく、事をもはげみ、殊にたちぬひのわざは、さばかりなりけれど、流石の里恭もいたくめで感じて、ひたぶるに、之を賞しけるに、妻女は、此の事を語り、

かやうに、今となりて、人に感賞せらるゝも、偏に、まゝ母のありがたき御なさけによるのみとて、涙を流して語りけるとなん。誠に、世のまゝ母と稱するものは、多くは意知わろくして、その子をひがませ、横意知つよき人となすが多く、さらずば、冷淡にかまへて、敎へもせず、叱りもせぬが多く、何れも、一生をあやまらせ、誠に信實を以てはぐくむ者少なく、子も又、道理のしもとも、じやけんなるしもとゝひがみとり、母のなす事、する事は皆じやけん、よこしま、意知わるとのみとりて、遂によこしま、かたくなの性となるを、此の妻女の如く、よく敎を守りて、身に光りをそへたる、實に性の善なるものにて、親も親、子も子、世のまゝ子をもちたる母、まゝ母にはぐくまるゝもの、子、この母子の如くせば、互みの身の幸福となるべし。



茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵碌仙齋不美
關　葦雄

一獨客茶禮の事（つゝき）

次に、風炉なれば、炭手前あるべし。是も例の正午會の炭に差違なければ、爰に省略す。次に菓子を出し、中立を促すべし。此の時勝手口締切るべし。客は、御相圖は、御鳴物にてと云べし。引續き、客は湯相火相の程度を、能々注意して中立す

べし、次に、主方は、席の掛物をはづし、跡を、さつと掃淨め、花を生、水指を飾り、茶入を置付、客方へ案内すべし。(但し、自ら、出給ことも、銅羅を打共、隨意たるべし。都て、此の會は、手早く務むべし。時間延伸するときは、客退屈を生ずべし。成丈切短に終るべし。)次に、後入の手續も、正午の會に換る事なし。因て爰に略す。底で、濃茶の時、亭主、必相伴するを法式とす。濃茶を點出しなど、直に、私も御相伴可レ致と云ひて、炉なれど中仕舞を爲、風炉なれば。直に一膝、客方に向ふべし。次に、客は茶を喫して、服の加減の宜布事を主婦人へ挨拶すべし。亭主夫人は、如何に可レ有二御座一哉、定めて食上りにくゝ御座り升だろう」、大に點損じたる旨を云べし。客例の如く、三喫半引たらば、茶椀を主婦の君へ可レ渡。是は、客方座を進み出て、手より手へ、直に可レ渡。又渡したらど、如レ例送り禮を爲すべし。次に、客は主婦君、

茶を喫し給ふ間に、茶銘を問合すべし。きかれたらど、主婦の君は、豫て茶銘詰主は取調闇記し置て、即座に初昔、後昔、龍の影、蓬萊、昔老松とか實地、其時點たる茶の銘を即答すべし。引續き、壺の詰主を問合べし。(但し壺の詰主とは、則山城國宇治郡兎路の鄕に住居して製茶家の上林、竹田、酒田、永井等は其の營業人なり。維新前は幕府德川氏に御用茶師を扶持し、將軍家自身の喫用、紅葉山、兩山の靈舍用供茶を此の茶師へ申付、年々製造し、例の威光尊大の御茶壺を爲レ詰し、門閥人なり。乍二蛇、足一毫の序に付一言を費す)底で、主婦君は、上林なれば上林、竹田なれど竹田と答辭すべし。次に、客は、主の茶の香切たるを聽ば、御茶碗の拜見致し度と所望すべし。主は、是を受て、帛紗を除き、再び客方へ、茶碗を出すべし。次に、其の帛紗、直に仕舞、釜の方に向ひ、水を指べし。偖、又客方は、茶碗を拜見し、直に、主方へ返

却すべし。茶碗の良否を辨ずべし。不賢識ならぞ、主婦君に尋ぬべし。生質、判然認たらぞ、井戸とか、判可とか、魚屋とか、奥高麗とか、樂燒、或は萩、唐津、仁清、朝日、等眼力の及びたる處を發言してよし、主は、其觀定相當したらぞ、左樣にも可レ有ロ之抔と言べし。直に、茶碗を取、中を一目して、大に點損じ升たと云ながら、茶碗を、下に置、一禮儀をなすべし。以下の手續、正午の會に換る事なけれぞ、今は、爰に畧す。三器の拜見も、如レ常、茶入茶抄の觀定も、又むつかしきものなり。不分明ならば、主婦の君に、巨細に糺し聽て、懷石付に記入すべし。底て、濃茶濟たらぞ、其の小間にて點るも、廣間の方にてするも、主婦君の心と、其の塲合によるものなり。　（未完）

（別紙二條は、本文即ち獨客の茶湯の脱漏なり）

一始め、膳を持出し、主も膳を持出、末座に着き相伴するなり。夫よりは、通の者出す、湯濟て、主先つ、我膳を持入、又、出で客の膳を引、菓子出し、中立の挨拶して、勝手口へ入なり。

一茶の節は、主居處、少し膝直して呑なり。主呑仕舞たる時、客より、茶碗所望する也。

但、主は茶を點出し、直に御相伴可致、挨拶するなり。餘はおして知るべし。

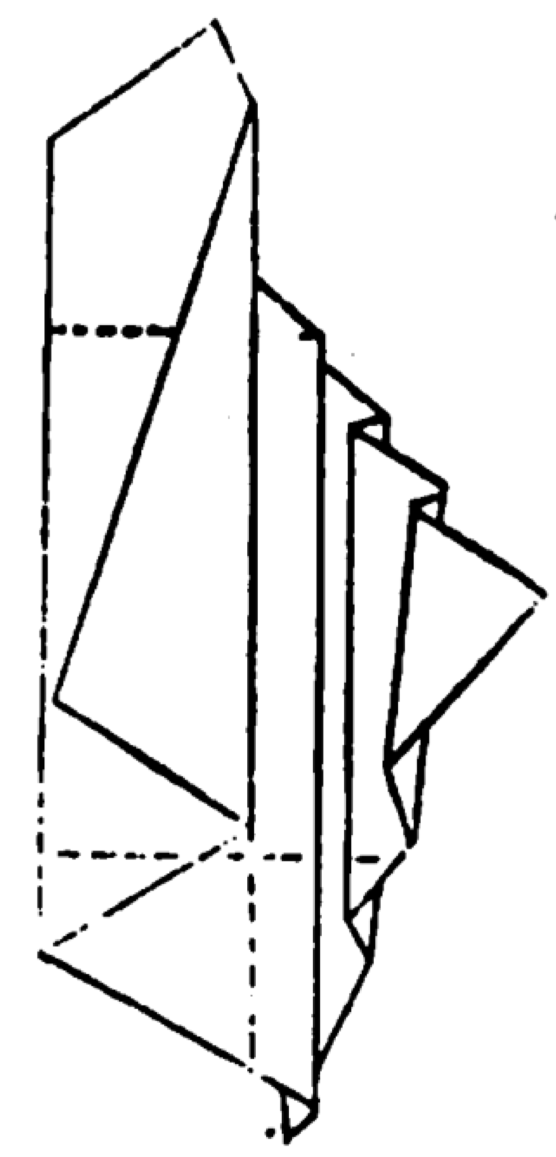
折形

有住くわう子

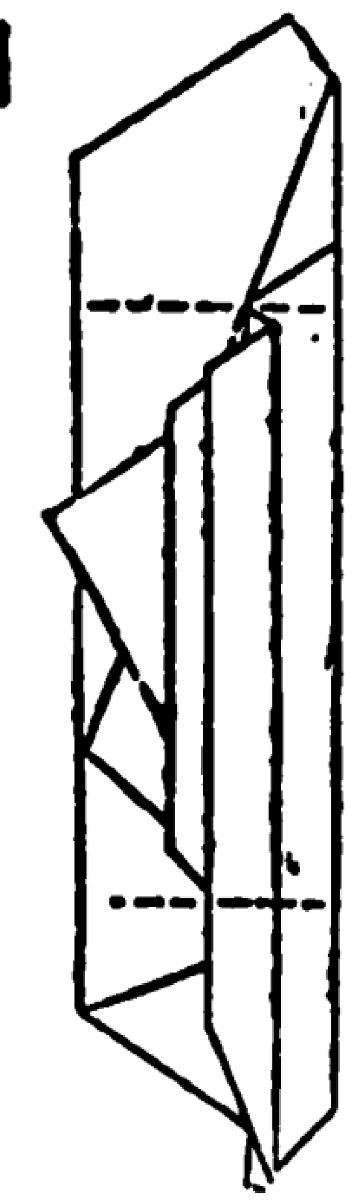
毛垂毛拔包

毛たれとはかみそりのこと、毛拔は平日用ゐるものなり。これら包方は左の如し。水引をかくるなり。

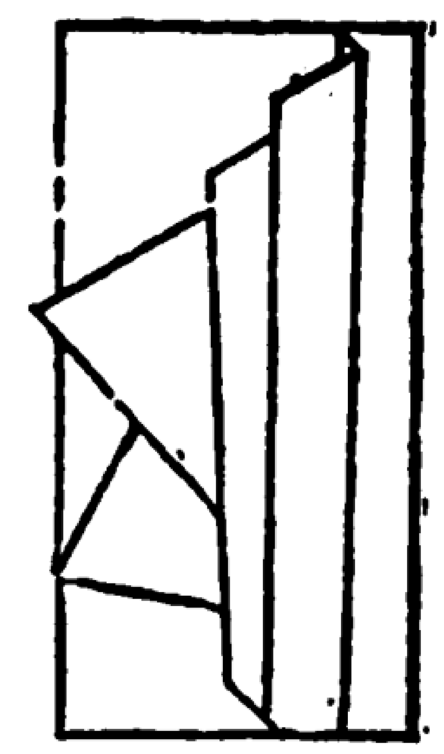
第一圖

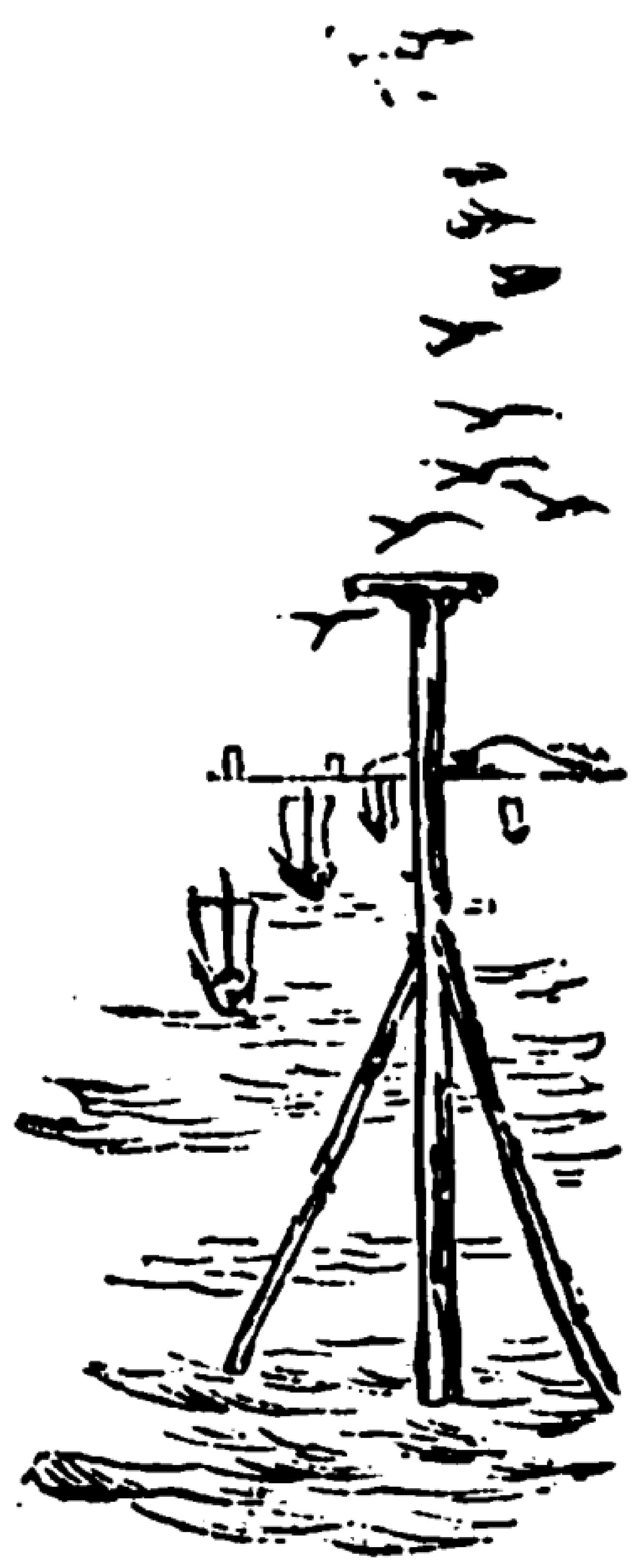


第二圖



第三圖



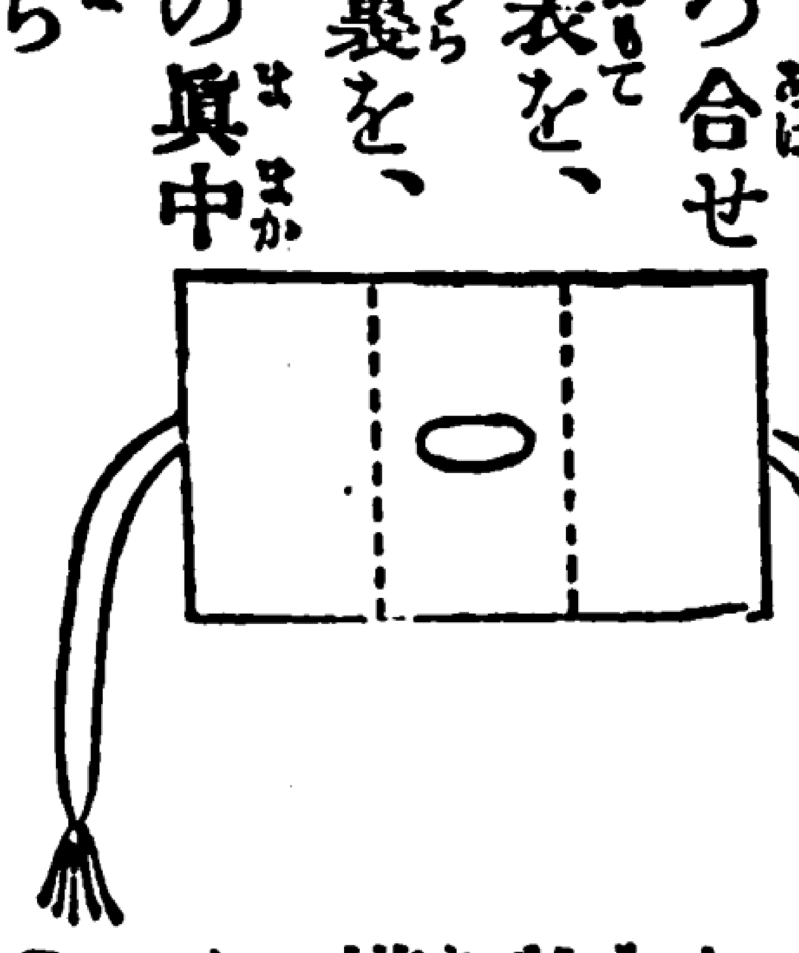


たちぬひ

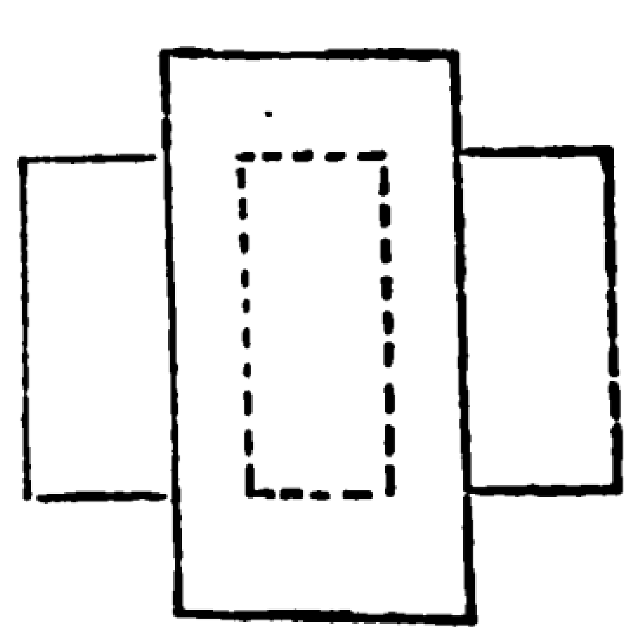
西山たい子

疊紙（つゞき）

さてそれより、外面、即ち、總疊折りをつゝむべき疊紙を、厚紙にて、書物の表紙を、横に、三つ合せたる大さに切り、表を、千代紙にてはり、裏を、色紙にてはり、その眞中に、紐を通し、即ち

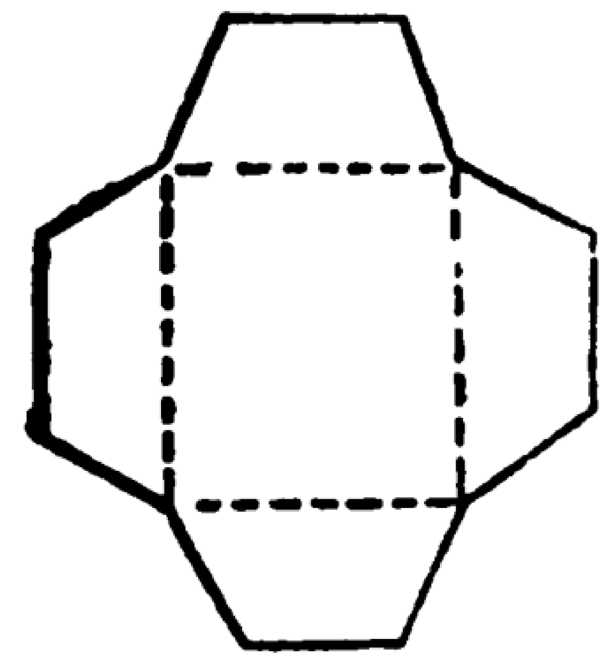


圖の如くなしおき、又、書物表紙形を縦横二倍したるものを、疊紙の眞中に、十文字になるやう、即ち、



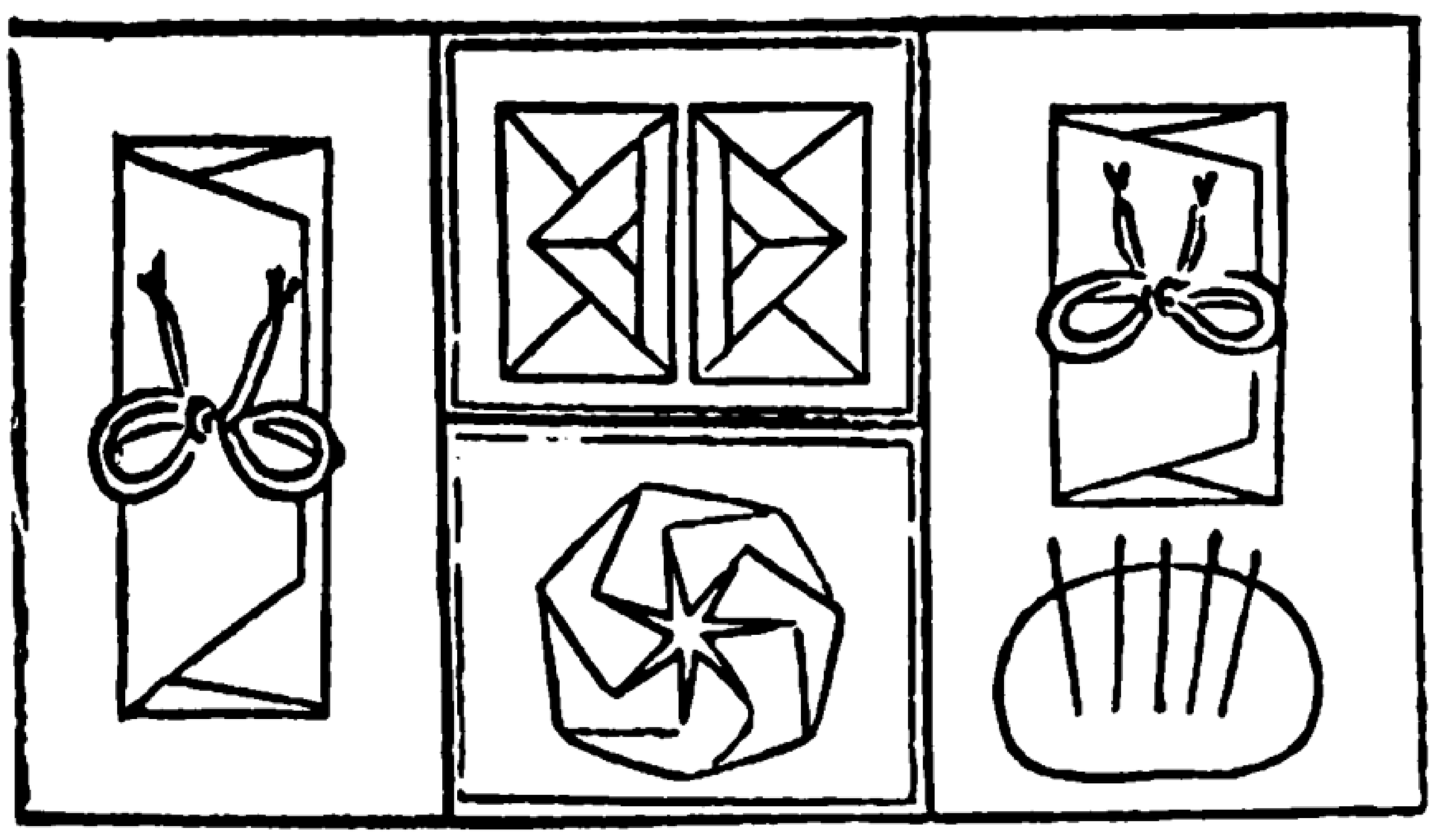
かやうにはりつけ、折目の所を、縦横とも疊みて、その疊みたる上に、前回に折りたる結梗折、箱折、蓮花疊等の底をのりにて

はりつけ、また、厚紙を、

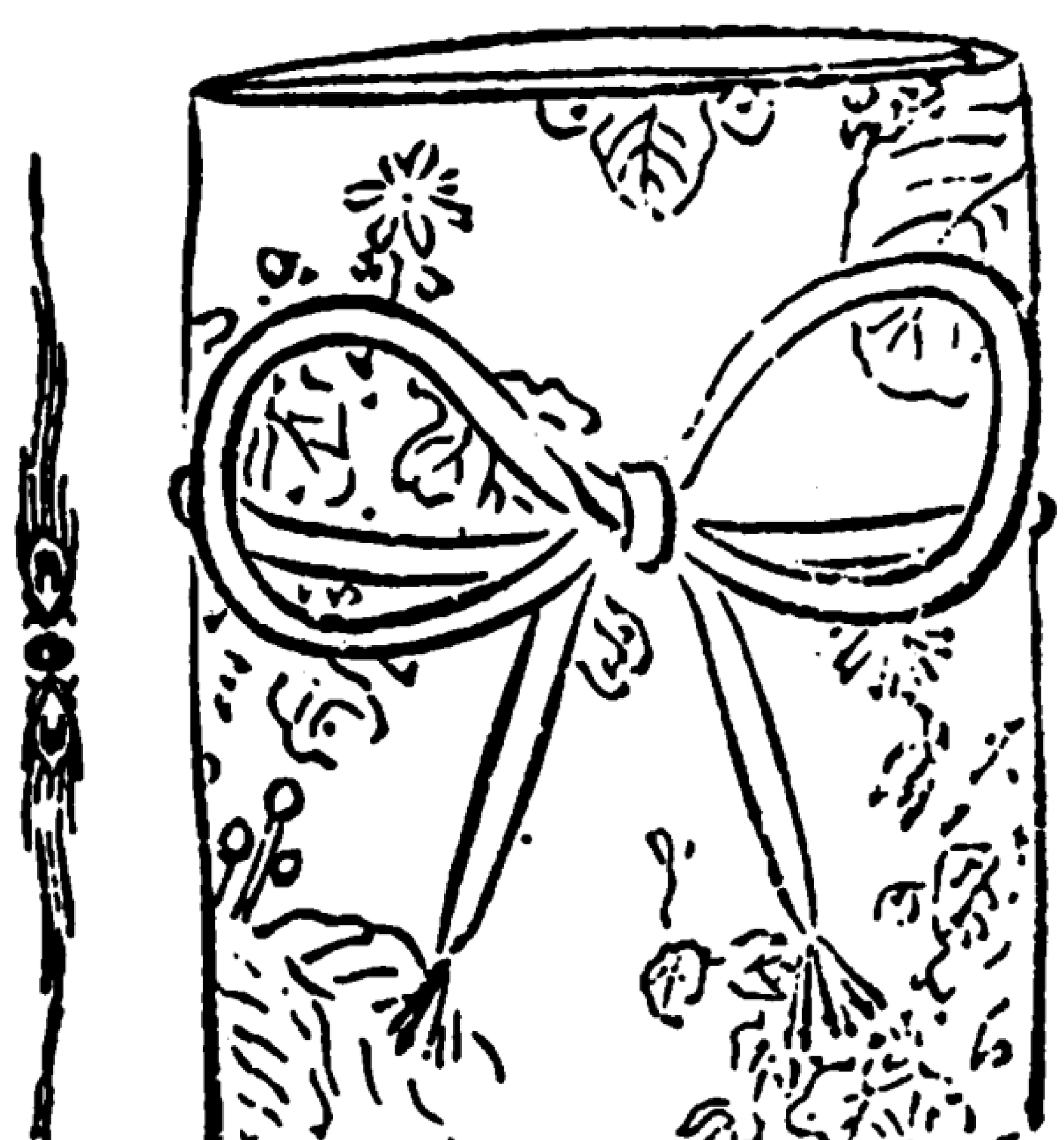


上圖の形にきり、千代紙にてはり、紐を通し、之を疊紙の、両側の裏にはりつけ、針さしをも、また、その片側につくべし。かやうにすれば、その大なる所に、小切類、又、糸、はさみ、折物さし、つま形、袖形等の物を入るゝ所少からず。これ等は細工物なれば、さま〴〵にみづから工風するこそおもしろからん。

（一圖完）



（二圖完）



だいどころ

らつきやう漬

らつきやうの、両端をきり。能く洗ひ、らつきやう一斗に鹽一舛の割合にて、漬込、廿日程經て、其儘用ゐるもよきものなり。又甘漬にするには、酒に、酢と、味淋にて、能程に、鹽梅し、唐からしを、加へ、さつと、沸たて、前の鹽漬の、らつきやうを、壺の中に漬、二周間も、經ば、甘漬は出來るなり。

桃實の砂糖煮

桃實の、皮を剝き、種を去り、桃の、種の中の、白肉をとり、これを水にて、軟らかくなる迄煮置き、別に、桃實に、砂糖を、加へ、（桃實百目、砂糖百目の、割合）前の、白肉を、煮たる汁を、布にて、漉し、この汁にて、桃實の、やはらかくなる迄、煮たる後、實をすくひ、汁のこくなる迄、火の上に置、汁のうへに、うかびしおりを去り、壺の中に、桃、及汁を投れ、密閉し置時は、長く、貯ふるも、味ひ、美にして、變る事なし

葛素麵

葛を、水にて能く、とき、どろ〴〵になる程に、薄め置、ブリッキ鑵の、ふたに、松露の如く、穴をあけ、鍋に湯を沸たゝせ置、ブリッキの器に、前の、ときたる、葛を投るれば、穴より、だら〴〵と流れ出し、鍋に落る時は、美事なる、葛素麵は、出來るなり。是を、おみ杓子にて、あげ、水にて冷し、硝子製の器に、盛り、砂糖をかけ、水を添へて、出すべし



栞花園

七月さくはな（１）

○百日紅、紫薇花、柏痒樹、猿滑、皮なめらかにして、猿登る事を得ず。故に名づく。百日紅と猿すべりとは、一類二種也ともいへり。

○莔麻莿、白麻、市尾、皮をはぎて、布におるに、麻よりよわく、さけ安し。大繩にうち、碇のつなとす。

○麻、櫻麻（花の梅に似たろなり。歌には、秋にもよむなり。）、夏引の糸、あさの事なり。麻莿、俳には、麻莿を夏とす。（異名）漢麻、黄麻、麻仁、（油に制してよし）麻は皮をはぎて糸にする也。

夫木

かりはやすあさの立枝のゑるき哉
夏の末葉になれるけしきは

土御門内大臣

（連）、わかくなるを花の心かさはら麻　宗祇

○苧麻、和名からむし、眞苧、かうぞの葉のごとし。花、青き穂をなす、出羽最上の產よし。奈良晒を織るもの是なり。東國西國、おほく植ゆ。畿内、東南には、わたをうへて麻を作らず。

○綿の花、むかしは穀皮をもつて、衣服とす。是を木綿といふ。是、紙のことなり。今衣服に織りたるに木綿といふは、古名を用ゐたるなり。神人の用ゆる、木綿たすきも古來の言なり。中世多く麻布を用たり。今の艸綿は、桓武の帝の朝に、異國より傳はる。唐土にては、宋の末より植う。本朝よりは二百年ばかり遲し。其の後種を失ひて。中絶したりしを、文祿年中に種を得て、諸國に植ゆ。多田綿、花、黄に實、白く、ねはりつよく、尤可けれとも、少なし。今これをうゑず。蝦手綿。葉に、深ききざみあり。白花にして、桃大く白し。然れども、桃少なし。神樂綿、花白あり。黄なるあり。こゞなりて生ず。神巫の持ッ所の鈴のごとし。是を植ゑて、大利あり。佐利綿は、枝葉赤色を帶ぶ。桃、多し。昔、姑、この種を得たり。聟、乞ひ望めども、種をわたへず。聟、憤り恨みて、其の妻を去りしに依りて、佐利綿といひならはせりとなむ。烟草綿、いその葉青色にして、間に、小葉を生ず。

歌、　新撰六帖　家　長

敷しまの大和にはあらぬから人の
うへてし綿のたねにぞ有ける

○竹皮散、竹の皮脱ぎとると云ひても、季になるべし。

○烏扇、ひあふぎ、本艸に、射干を同物とす。然ども。花形かはれり。莖葉ながく、弓の長きがごときもの射干なり。莖、短く、葉扇のごとくならびたるものひあふぎなり。されども和名にも、一種として、射干をからすあふぎと訓するにより、連俳にも射干とかくなり。

歌、　夫木　西　行

蓬生はさる事あれど庭の面に

からすあふきのなとしげるらん
○玉簪花、白鶴山、大なるものを、俗に亀はうしと云。
○釣鐘草、地參。紫花をひらく、形釣鐘のごとし、又白花淡紫の花なり。
○麒麟草、高さ一尺ばかり、形辨慶艸に似たり、
○馬鞭草、馬折、鐵筅箒、花ふぢ色にして穗のごとし。

秋蒔草花類

今し、あつさのさかりに向いつゝあり。夏ときくだにいとぶせし、さりとて、只内にのみこもりたらんには、仲々にえやみの色〳〵おそひきたらん、されど、夕日の山のはにちらつく頃、かけ樋のわたり、築山のかげなど、土かきよせて、草花などの床仕立てゝ、何時こは、花さきなんなど思ひやりつゝ種まきなどしたらんよ。さあ、いかなるたねをしもまかむ。

秋蒔極早種新翠菊、大花新女美女櫻、全新金鷄草、阿片ゲン、ラシラス、新種千重ケシ、翠菊各種、ひな菊、桔梗なでしこ、美女なでしこ、蜀葵、桔梗、錦葵、射干、くれない草、連理草、罌子粟、サイネリヤ、はるしや菊、柳穿魚、金盞花、錘草、貝細工、たわらむぎ、つくぼねそう、金雀花、曇華、矢車草、カンチタフト、美女櫻、虞美人草、麝香蓮理草、香紫羅爛花、リナリヤ、にはきしやう、三色すみれ、シレネ（一名はいとりなでしこ）紫羅爛花、カンパニラ、マンテマン、八重杜丹咲罌子、アメリカ撫子、ペンツナテーモン

右は農家便覧による、左に、其の數種の作り方などかゝげん。

○錦葵は、花に單瓣復瓣の別あり。色に紅白紫等あり。彼岸に下種し、翌春末、又は三年目二尺餘の高さに生育し、毎葉腋に、花を開く、花に淡紅紫色白色、又は紅色等の別あり。

○金鷄草は、又キンケイギクとも云ふ。ハルシヤ菊と云ふに似たる一年草にして、高さ一二尺に達し、多くは夏月、單瓣にして、外部黄色なり。心に近き部分、

暗褐色をなせる花を開き、開花期永く續き、花の大さ直徑一寸七八分あるを常とす。又、其の他、花に複瓣のものあり。色に外部黄色、心部深橙色、若くは暗紅色なるもの等あり。草裝に、矮性なるものあり。丈け高き種類に比して繁茂し易く、何れも栽培容易にして、春季床場に播種し、少しく、生育したる後園地に移植せむ可なり。

○虞美草(一名ビジンサウ)は、罌子粟の一種にして、草姿花形、共に細小にして、艶麗愛すべき植物なり。葉莖、共に毛茸を生じ、莖の高さ、一尺余伸長し、花に紅白絞等あり。瓣に單瓣重瓣あり。秋彼岸頃、地を膨軟ならしめ、人糞敷込みて、下種し發芽后、其儘、越冬せしめ、翌春生長を始むるに及び、再び稀薄なる人糞尿を施すべし。此の他鬼罌子粟と稱する一種あり。葉深綠色にして、缺刻多く、高さ罌子粟と殆んど仝一にして、花色濃紅なるを常とす。莖及花姿、共に、前種に劣れり。



學園

源氏物語講義(三十)

下田義天類

彼のおくり物御覽せさす。亡き人の住所尋ねいてたりけむしるしのかんざしならましかばと覺すもいとかいなし。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそことしるべく。繪にかける、楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆限りありければ、いと香ひなし。大液の芙蓉未央の柳もけに通ひたりしかたちを唐めいたる裝ひはうるはしうこそありけめ。なつかしうろうたげなりしをおぼし出づるに花鳥の色にも、音にもよそふべき方ぞなき

○彼のおくり物、御覽ぜさす。　前段に北の方が、靭負の命婦に托して來らせたる御息所の形見の贈物を陛下の御覽あそばすなり。御覽ぜさすの、さす、といふ辭は、使役の助動辭なり。貴人は、身貴ければ、自事を執る事少くて、大方従者をしてなさしむるものなり。されば使役の助動詞を用ゐて、やがて貴人の動作を現す。斯かる場合には、使役の助動詞は、轉して崇敬の助動辭として用ゐらる。御覽ぜさすは、即、それにて御覽あそばすといふ意味なり。

○しるしのかんざしならましかばとおぼすもいとかいなし。　讀者は必記憶せらるゝならむ。嘗て掲げたる長恨歌に「唯將二舊物一表二深情一　鈿盒金釵寄將去　釵留二一股一盒一扇　釵擘二黄金一盒分レ鈿　但令三心似二金鈿堅一」といふことのありしを。玄宗皇帝が道士によりて、蓬萊山より得たる楊貴妃の形見は、恰も命婦に依りて、二條里亭より得たる、御息所の形身に、其の場合も、其の境遇も、能く相酷似したる所あり。陛下は、せめての御心慰めにとて、日夕長恨歌の御繪を枕言にしたまひて、やりかたき欝悶を驅らせつゝおはしますをりしも、御息所のありし昔の香に染みかへりたる形身を、さながら御身に間ちかく御覽ぜさせたまひては、如何にしてか、現の御身としも思召し分きさせたまはむ。彼にありては臨功道士が、實際、親しく楊貴妃に接して得たる、契符の金釵なり。是にありては、又と再會も期し難き人の形見の品である。せめては、この贈物が、彼の揚貴妃が、玄宗皇帝に贈りし如き場合の金釵にてありたらむには、少しは御心を慰むるよすがも有りなむと思ひあまりたまひては、そなたさまなる空想を畫かゝせ給ふと雖、其にもあらぬ故に、そのかひなしとなり。ならましかばの次には、少しは心をも慰めましなどいふ句を省きて含めたるなり。蓬萊宮より揚貴妃が玄宗皇帝に奉れりと云ふは假定の説に過ぎざれども、假にても、再會の時の契符とて、贈りし

ものとすれど、猶賴母しき點あれは、其に比して、更に、其のかひなきを嘆かせ給ふ陛下の御衷心の人情としてさもあるべく、げに〳〵哀なり。殊に作者が、假空の寓言をも、巧に使ひこなして、筆を、その上に出でしめし老錬は、言ふも今更なり。

○たつねゆくまほろしもがな云々。この歌は、彼の臨功道士の故事によりて、搆へたるものなり。一首の意は、玄宗皇帝は、臨功道士の幻術によりて、楊貴妃の蓬萊山に在りと言ふことを知られた。朕も再會は期しがたしともせめては人傳になりとも、御息所の靈魂が、どこそこにありと云ふことを知りたし。其の故に、その所在を尋ねて行く道士だにあれかしとなり。まぼろしとはあるが如く、亡きがごとく、見ゆる物の影を稱して、しかいへり。支那にて稱する幻術者といふものはあるが如くなきが如く、變幻量られがたくて人界以外にも飛翔すといふより、吾國にてはまぼろしといふを、それにあて丶唱ふるなり。

○繪にかける楊貴妃のかたちは云々　如何なる名人上手が施したる筆なりといふとも繪畵は、やはり繪畵なり。其の生動によりて生ずる愛嬌、其の笑語によりて起る情合は、繪畵の範圍にありては、如何とも致しがたし。長生殿に三千の寵を傾けたりといふ楊貴妃も、繪にかきたる姿にては、世に優れたる畵伯なりとも筆には限りあるが故に、少しも氣韻なしとなり。

○にほひ　こゝは、光采氣韻をさしていへり。

○太液の芙蓉未央の柳　長恨歌に太液、芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉とあり。太液は、池の名、芙蓉は、蓮華の一名、未央は宮殿の名なり。楊貴妃の容顔を蓮にたとへ、楊貴妃の眉を柳にたとへたるなり。○もげにとは、夫にも勝りたるやうにといふ意味の古語なり。○かよふは肖たるなり。太液の芙蓉未央の柳も及ばさる程、その花や柳の姿に似通ひたりし楊貴妃の天然の美質をなり。

○からめいたるよそひはうるはしうこそありなめ云々さらぬだに、天性の美質を支那風の、あたら〳〵しき装束を以ちて造餝りたるさまは、嘸かし美の極度、艶の最上にて有つたらうとなり。楊貴妃の樣子を、陛下の御心中に想像したる所なり。

○なつかしう寵だけなりしを云云なつかしうは、懷しくにて馴近付きたきさまをいへる也。ろうだけなる勞々じきより轉りて、かわいらしげなる意味に用うる言葉となりたるなり。御息所の風姿容貌の憐に愛すべかりしを追想するになり。此の所、上の語より、此の語へ續けたる間に數語を補ひて心得べき所なり。太液の芙蓉未央の柳もげに似通ひたりじかたちを唐めきたる装束にて、繕ひ餝りたりし、楊貴妃の實物はいかに美くしかりけむ。實に、絶世の美人にてありしなるべし。されど、猶白樂天は、これを芙蓉や柳にたとへて、芙蓉は面の如く、柳は眉の如し、といへり。我此の、日頃戀ひ慕ふ御息所の事を追想するに芙蓉や柳の姿は、愚花鳥の色にも、音にも譬ふべきやうの無かりし容儀なりきと云ふ意なり。つまり楊貴妃の美色を推測して、御息所に比較し、御息所のさまは、彼の楊貴妃の姿にも勝りにけむと追想したる所なり。

繪にかける楊貴妃のかたちは云々より、こゝまでの一句は、その文章、殊に巧妙なり。今陛下は楊貴妃の繪をみそなはして、荐りに御心を動かしつゝおはしますといへども繪畫は、猶繪畫なり。生ける楊貴妃の風姿が生動笑語せるに如かずと云ひて、こゝに、その繪の見るに足らぬを貶し、更に、其の生動笑語せる、楊貴妃の風姿は、猶太液の芙蓉未央の柳にたとへらるるといへども、吾最愛の御息所のあためかすして、奥ゆかしかりし風姿はたえて、鳥の音にも、花の色にも準ふべき方なしといひて、再、絶世の支那美人を抑えて御息所を揚げたる、その筆法の自在にして力ある、さながら生ける御息所をまのあたり見

るが如き感あり。世に、いみじき文人才子の限りある筆もてしるしたる文詞はうるはしとこそは言はめ。古今の獨歩として、よそふべき方もなき筆は、式部のみや擅にすべけむかし、

以上を一括して言へば

陛下ニハ、前段ノ如ク仰セラレテ、偖テ命婦ノ齎シタル彼の二條ノ里亭ヨリノ贈りものヲ御覧せさす、コレヲ見ツナハスニ、御裝束一領に、御髮上ノ調度メクモノナリ、陛下ガ、コノ頃、明暮ニ御覧ゼラルヽ長恨歌ニハ、彼ノ玄宋皇帝カ、悲歎ノ餘リニ、使ニ立テタル臨功道士ト云フモノガ、楊貴妃ニ面會シテ、再會セン折ノ符合ニトテ、鈿ヤ釵ヲ受ケ取リテ持チ歸リタリトアルカ、朕ガ、今霄ノ有樣ニ、誠ニ能ク相似タリ、若モ今霄ノ、此ノ形見ノ品が、彼ノ臨功道士ノ如クニなき人即桐壺ノ更衣のすみかたつねいてたりけむしるしのかんざしならましかば、幾分カ、我が御心ユカシニモ成リナマシモノヲとおもほすも、是ハ永別ノ御形見ナレハ、品コソ似タれ、其の趣ハ全ク別事ナリサレハ何ヲ思シ食スモ‖、いとかひなし(トナリ。)サテ陛下ハ、左ノ如キ御歌ヲヨマセ給ヘリ。彼ノ玄宗皇帝ハ、臨功道士ヲ使トシテ、楊貴妃ノ魂魄ノ所在ヲ知リタリト聞クガ、夫ガ眞實ノコトナラバ、朕ガ國ニモ、其ノヤウニドウゾ亡キ人ノアリカヲ尋ねゆく、まぼろし即幻術者ト云フモノモもがな。ソレガ有ツタナラバ、朕カ、此ノ、日頃戀ヒ慕フ、更衣ニヨシ直接ニ面會スルコトハ叶ハズトモ、責メテ人づてにても、更衣ノたまのありこを、そこと知るべく(ト云フ如き意味ノ御歌ナリキ。カク詠ゼサセ給ヒテ猶、陛下ニハ思シ食シ續ケサセ給フヤウ、繪にかける楊貴妃のかたちはナルホド美ハ美ナレドモ、いみじき繪師ノ技量ヲ顯ハシタルモノとへども、筆ノ力ニかぎりありければ、(生キタ人ヲ見ルヤウニハ有ラデ)いとにほひなし。太液の芙蓉未央の柳も及ビガタげに、ソノ花ヤカニかよひたりしかたちを唐めきたるよそひシタルは嘸

カシうるはしうこそありけめ實ニ絶世ノ美人ニテアリシナルベシ、サレト、猶白樂天ハ、彼ノ長恨歌ニ太液ノ芙蓉未央ノ柳ヲ以テ、其ノ美ヲ形容セリ。サルヲ我カ明君ニ戀ヒ慕フ、彼ノ桐壺ノ更衣ヲ、之ニ比較シテ追想スルニ、是ハ芙蓉ノ花、柳ノ眉ハ、サテ置キソノなつかしうろうたげなりしをおぼしいづるに花鳥の色にも、音にもよそふべきかたぞなき。彼ノ、名高キ楊貴妃ニモ、今一段マサリテアリケントナリ。猶コノ續キ斷レス以下次號ニ讓ル。

（未完）

漢文學講義（二十）

大林弘一郎

參考の爲、都名所圖會の一節をあげん。

詩仙堂は、一乘寺村天王に至る南方にして、石川丈山の山荘より。表に、小有洞の額あり。中門の額は、梅關、路次の額は、凹凸窠、詩仙堂の額、上は嘯月樓、下は蜂要、四壁には、漢、晉、唐、宋の詩人三十六輩の像を畫き、すなはち、其の人の詩を、丈山、みづから書して、畫は、狩野尚信とぞ。故に詩仙堂といふ。

左一　蘇武、(漢)、謝靈運、(晉)、杜審言、(唐)、李白、王維、高適、儲光羲、違應物、韓愈、劉禹錫、李賀、杜枚、寒山、林逋、(宋)、梅堯臣、歐陽修、黄庭堅、陳與義　左十八

右一　陶潛、(晉)、鮑照、陣子昂、(唐)、杜甫、孟浩然、岑參、王昌齡、劉長卿、柳宗元、白居易、盧仝、李商隱、靈徹、邵雍、(宋)、蘇舜欽、蘇軾、陳師道、曾幾、　右十八

丈山の墳か、詩仙堂の巽の方山上にあり。正保二年、舞樂寺の中山に壽壙を築て、頑仙祠と號す。

同書拾遺に、

頑仙祠

一乘寺卿中舞樂寺村辰己山上三町計にあり、是、石川丈山の壽壙なり。高さ八尺餘の自然石にして、色靑し。表に碑銘あり。臺石三重にして、墓前の石壇三間計、石燈爐二基、巡に大木の松三株あり。此の地、すべて赤土の兀山にして、小松少々あり。四隣、みな谷深くして、壽壙は、その巓にあり。

寬文十二年六月、碑石を建つ。序文は、繁によつて、こゝに略す。

其銘曰。

有二器識一。居二林巒一。安二義節一。
泥二蟬冠一。懿哉德。天地寬。

柳谷散人埜子苞父識

先哲叢談に、丈山が、我が邦の三十六歌仙に倣ひて、三十六詩仙を撰定せし時のことを載せて、その識見の一斑を示せり。初、丈山、林羅山と親しきを以て、彼の三十六人を撰ばんことを、羅山に謀り、右左の各對を定め、蘇武と陶潛と對し、謝靈運と、鮑昭と對し、韓愈と柳宗元と對し、劉禹錫は白居易、李賀は盧仝、林逋は邵雍、梅堯臣、蘇舜欽と對して、七對を得たるは、羅山の定めし所にかゝれり。然るに、羅山が曾鞏を歐陽修と對し、王安石を蘇軾と對せんとせし時、丈山、之に、反對し、爲に、書面の往反數回にして、之を論辯し、遂に、羅山が說に從はざりき。これ、安石が心術の正しからざるを、深く惡みしによれるあり。この一事を見ても、丈山が、いかに、志操の堅剛にして方正なりしかを知るに足らん。

又、詩仙堂の事を記したる書は、詩仙堂志とて四卷あり、その遺物などに至るまで、委しく圖して、之を載せたり。

京尹板倉重宗將レ疏レ薦レ之。重之愕曰。一晦一題。安人己。安人何益二乎國家一。重之善二隸書一。晚節詩律滋細。韓人來聘。有二權式者一。見二

其詩曰。東海李杜也。士無文武。莫不慕其風采。獲翰墨者。珍賞如拱璧。學者稱曰丈山先生。後水尾法皇欲徵見之。重之賦和歌以固辭。(詞曰、渡良志那、蟬廻小河乃淺久登毛、老乃那美曾越影毛耻加志)法皇益高其操曰。恬澹如斯。豈可奪乎。自是不復徵。寬文之末。以壽終。

此の文、末段に於いて、益、其の志節の堅かりしことをのべたり。

京尹とは、京都所司代のことにて、この時板倉重宗所司代たりしが、將に、丈山が爲に上書して、之を推選し、仕官せしめんとせしに、丈山、愕いていひけるやう「既に一たび世を遁れて、迹を晦まし、また出でゝ、一たび身を顯はにせむ、行を妄にするものといはざるべからず。行を妄にするものは、之を用ゐる所なし。何ぞ國家の益となることあらん。」と遂に出でざりき。

丈山、また、書を善くし、ことに、隸書を巧にせり。遂に、天覽を辱うするに至れり。又、晩年に及びて、詩の調も、ます〱細しく巧になりて、或る年、朝鮮人の來聘せし時に來れる、權式といへるもの、丈山が詩を見て、「東海に於ける李白、杜甫なり。」とて、賛め稱へたりとぞ。さて。當時の士人、文人と武人とを問はず、皆丈山が風采を慕ひ仰がざるものなく、その書を獲たるものは、之を珍重し、賞玩すること拱璧、即、大なる寶玉を得たるが如く貴びあへり。學者、稱して、丈山先生といひて、之を重んじたりき。是、亦、その德ありしを知るに足れり。

丈山、隱遁の志、益、固くして、嘗て、後水尾法皇の、之を見んとて召し給ひし時も、一首の歌を奉りて、固く、之をいなみ申しゝことあり。その歌は、前に、常山紀談にもあげたるものなり。さて、常山紀談には、重宗に示したる如く記したり。

されど、この篇も、先哲叢談も、同じく、法皇の召されしを辭み申しゝ時の歌としたるは、信なるべし。又、この歌の文字にも、少しく異りたる所あれど、こは、傳寫の誤なるべし。この歌の大意は「既に隱遁して世をさけたる上は、決して、この山を出で、蟬の小河を渡りて都には入らじ、たとひ小河の水は淺くとも、老の身の水に、影をうつすこともはづかしきことなればなり。」と、その志をあらはしたるなり。本文に、老のなみそをとあるはそふの誤なり。

さて、かく、申し上げしかど、法皇も、其の志をあはれに思し召し、その操を高しとし給ひ、「其の心の淡泊にして潔きこと、此の如きものをいかて、その志を奪ふべき。」とて、ふたゝびは召し給はざりき。かくて、寬文の末年、即、十二年に、壽を以て、みうせたりき。丈山、武人の家に生れ、文學を修め、よく、其の志節をみがき、その身を潔くせしは、その師友のよかりしが故なれど、而かも、その天性、まことに人にすぐれたるものあればなり。

布美安波勢（十）

白松園主人

十月

のこれる菊をゝしむ

左　尙文

朝霜、いたうおきわたして、たゞ白たへなるに、おくれ咲きたるまがきのきくの、くれなゐなるが二ッ三ッのこりて、われはがほにさしいでゝ、打にほひたり。つねより○色たえて、いとあてにめでたし。此花しをれて○またこん春ならで、花なきそのとなるらんと、いといとをしまれて。

右　勝德

も丶草の花とも、のこる色なく冬がれわたりて、いとさう〲しき庭の面に、白ぎくの花のみ、ひとり落葉をいたゞきて、うつろいのこりたるは、中々に秋見しよりもあはれなれども、それだに、此ごろは、朝霜にうづもれはて丶、見るかひもなくなりにたるは、いといとをしきものになん。

評判　ひだりの文、詞づかひにつたなきふしまじりたり。右の文はめでたし、かちなる事さらなり。

左勝　重豊

此ころ世にきこゆる菊の、いろ〱をうゑまじへて、所せき女のすさみにとても　はやせるに、その花ひらのくさ〲なる、その色あひのさま〲あるに、世にあるめでたき物の名どもを、よそへたて丶、をかしきふしにいひおふせたるも、とり〲に、さもとおもはれて興ありつ丶、いとものめざましき花ぞろひなるを、やう〱きのふとなりては、うつろひかたになりもてゆくその中に、ひの袴とかいかひなまめかしたるは、こきくれなゐなるが、むらさきだちてうつろひたるは、なか〱になつかしうて、いまはをとこのさしぬき○とやいはまほしうなん。そもなほうつろひはてんとせぞ、いまはしきなにこそ。

右　保世

山のもみぢはちらずぞあらんと、わたり近き谷川のながれをたどひ、やゝふかくわけ入るに、千くさの花は霜がれて、うちふしたるに、きくの咲きのこりてにはふはいとなつかしく、花のもとにやすらひて、下行水をむすびては、よはひながゝれとおもひ、とくさきたるがはかなう、くづをれふしたるを見ては、露の間にさへ、ちとせ經にけんものを、われは、いくとしをか過せしとおもふにも、仙人のめでしもうべなりけり。此の花のかげぞ立うくなん。

評判　左右の文ともに、これかれとあやまりのありて、きずなき文にはあらざれど、ひだりは、今

やうのさまをかきえて、めづらしくれもしろくみぎりは事ふりてみゆれどまけぬべし。

左　清　風

九日のわたれはひたる○、いつしか霜とれきかはりて、うつろひたる菊の、ひとりまがきに立けるは、中々に見どころあり。此のち花のなければと、からもやまともおなじこゝろはへになむ。

右勝　祝　之

みだりがはしう、霜がれたる庭の草どもは、みるもいとむづかしけれど、いさゝかもの〻かげにうつろひのこれるきくの、かたへはかゝまりて、さむげにかじけたるさまの、あはれにすてがたうて、かく落かさなれる本の葉をも、朝ゆふをり立打払ひなど。

評判　左のふみはこともなし、右の文はめでたし、ろなうかちにこそ。

秀歌集（四十七）

塩井正男

○

けふも又松の風ふく岡へゆかむ
　昨日涼みし友にあふやと

○これも、西行法師の歌にて、山家集の雑歌の部にあり。木陰の納涼といふ事をよめるなり。○けふも又、今日もまた、昨日涼みたる所へ行かむといふ意なり。○もは同じ事の重さなる意をあらはす助詞なり。○松の風ふく岡。松風涼しき岡をいへるなり。○行かむ。涼みに行かむといふ事なり。○昨日涼みし友。昨日おなじ松の岡に涼み居て、共に語りし人をいへるなり。つねの友にはあらず。昨日おなじ所に共に涼み居て、共に語りたる事の、ゆかしく思ふ事ありて、かくいへるなり。○あふやと。あふかとてといふ意なり。やは疑問の詞なり。

○一首の意は、明かなるべし。昨日涼みに出でたる

に、松風涼しき岡に共に涼み、共に語りたる人ありたるが、ゆかしく思はるゝ事ありて、今日もまた、そのゆかしき人の來て居るかも知れねど、おなじ松のあたりへ涼みに行かうといふ事なり。何にといふ事はなけれども、歌もまたゆかしくおぼへて、今もたづねゆかまほしきけしきなりや。

○

昔見し松は老木になりにけり
　　わが年へたるほども知られて

○これも、おなじ法師が、山家集の雜歌の部にあり。西行が、西國へ修行したる折、小島と申す所に八幡のいははれ給ひたりけるに、籠りたりけり。年へて、また、其の社を見けるに、松などの古木になりけるを見てよめるなり。○昔見し。昔、我見たる松といふことなり。○なりにけり。なつたワイと感嘆せるなり。けりは感動の詞なり。○わが年へたる。我、多くの年を過ぎたる意なり。○わが年へたる程も知られて。松の老木になりたるさまにて、わが多くの年を過ぎて老いたる事の知らるゝ意なり。

○これも、一首の意は明かなるべし。すべて、此の法師が自からすなほに、なだらかによみいでて、何んとなう情のこもりておほゆる手振りを、此の歌にても見るべく、めでたし。

○

なか〳〵に忍ぶけしきやしるからむ
　　かゝる思ひに習ひなき身は

○これも、おなじ法師のなり。全集の全部にあり。○なか〳〵に。えてといふ意なり。○忍ぶけしき。我が思ひ焦る心を人に知られじと隱す様子をいふなり。こゝの忍ぶは堪ふ意にも思ふ意にもあらずして、隱す意なり。けしきやのやは疑ひの詞なり。○しるからむ　しるくあらむ、やがて、著くあらむといふ詞にて、おのれは、我思ひ焦るゝけしきを、人に知られじとおしかくしてあれど、反て、その隱して居

る様子は、他人に著く見ゆるだらうといふ意なり。○かゝる思ひに習ひなき身は。まだ今まで戀ひなどしたる事はなく、斯の如き思ひにはなれぬ、我身なればといふ事なり。四、五、一、二、三句と、句をかへして見るべし。

○一首の意は、かやうの思ひにはなれぬ我身なれど、我は他人に知られんも恥かしけれど、我思ひ焦れたる心は、他人に知られじと、頻りにかくすやうにはして居れど、かくすには似ず、反て著く、他人に見ゆるであらうといふ事にて、初戀を忍ぶけしきをよめるなり。よくまことのけしきをうがち得たりといふべし。

○

歎きあまり筆のすさびに盡せども
　　思ふむかりはかゝれざりけり

○これも、仝じ法師のにて、仝じ所にあり。○歎きあまり。歎きとは、長息にて、すべて、ゑみじ/\と身にしみてればゆる時に出づるためいきをいふ。故に、また、悲む意にも用ゆ。歎き、こゝにては、ゑみじみと、思ひ忍びたるけしきなり。歎きあまりとは、歎き/\てこらへずなりたる程の心をいふなり。○筆のすさび、筆の進みといふことなり。歎きてのみはこらへずなりて、筆とりて、思ふ心をかきいでむとせるなり。○盡せども。思ひ忍ぶ情を筆の進む限りかきつくせどもといふことなり。○思ふむかり。我思ふ程といふことなり。○かゝれざりけり。我思の情は限りもなく深ければ、筆の限りつくしても、書きあらはしかねたる意なり。

○一首の意は、歎きあまり、今はこらへずなりて、せめて思ふ情を書きやらむと、筆を取りて、筆の進むかぎり、思ふ情を書き盡せども、我情の限りもなき、深き程は、筆に書きつくされナイワイといふことにて、わで思ひ忍ぶ情の深きをうたへるなり。

○

我が歎く心のうちのくるしきを
　何にたとへて君にしられむ

○これも、前の歌のつゞきにあり。○何にたとへて。何にたとへていはゞやといふやうに、詞をたして見るべし。○君に知られむ、我思ひ焦れて、歎く心の苦しき事を、君に知らるゝ事ならむかといふことなり。君とは我が思ひ焦るゝ人をさしたるなり。

○一首の意は明かなるべし。わが思ひ歎く心の中の苦しき事を、何にたとへて云つたならば、あはれ、それほどに歎きてか、さぞかし苦き事ならむと、君に知らるゝ事ならむと。さても、たとへていひやうもなきほどの、我情の苦しさよ。君にしられたいのであるのにといふ意なり。

○

とにかくに厭はまほしき世なれども
　君が住むにも引かれぬるかな

○これも、仝じ法師のにて、おなじ所にあり。○とにかくに。あれにこれにといふやうなる詞にて、ここにては、あの事につけ、この事につけて、すべて、世の中を厭ひ去りたくなるよしをいはむとせるなり。○厭はまほしき。厭ふとは嫌ふ意なり。厭はまほしきとは、厭はむこと欲しきにて、即ち厭ひたき意なり。世を厭ひたしとは、この俗の世の中を嫌ひてすてたしといふことなり。○君が住むにも。とにかくに厭ひすてたき、此の世の中なれども、君が此の世に住みて居らるゝ故にマアーといふことなり。○ひかれぬるかな。我心の引かるゝワイといふことなり。即ち、我ゆかしき君の住みたまふによりて、すてたき世の中にも、なほ心引かれて、すてかぬるといふことなり。

○一首の意は、いやな事のみの、この俗の世の中は、あれにつけこれにつけ、すべてすてたくはあれども、たゞゆかしき君のおはす故に、心ひかれて、すてがたくするワイといふ事にて、明かなるべし。別にさ

したる歌にはあらねど、情のふかきをめで丶あげつ。



漫録

讀人名卷一　女中卷（一）

釋法忍

諸の御女中奥方へ申入まゐらせ候、すへて女は貴賤にかぎらず、貞孝温順の道を守り愼給ふべし。女の道、いつれも、此の四ツをもと丶して行ひをたて申てとに候へは、常々、専ら、これを用ひ給ふべきこと肝要にておはしまし候。まつ、貞とはこ丶ろざしをた丶しくして、身持をつ丶しみ、夫を敬ひ、眞實をもつて、ねんころにつかへ、夫のためには、身命をおしまず、その身を夫にうちまかせ、たゞ一筋に夫を大切にれもひ、一生他のおとこをかへりみず、たとへ夫おろかなりとも、少しもあなどらず、心を尽して、是をもりたてゝんじにつき、夫の心のつかざることは、なにとなく氣をつけ、夫の心より出たるやうに取なし、随分おろかなるをおぎなひ助るを道とし、又心あらくいたづらなる夫たりとも、かならず、なにとぞ、夫の心入を直さんとの丶心を尽し、おこないあしきことあらば、親たち、子共などの身のうへを引合、わがみの心のつらきをなげきはひて、夫の氣のた丶ぬやうにきげんを見合いけんをくはへ、とにもかくにも、夫の氣に背かぬやうに、大事に懸ておもふを、貞と申しまゐらせ候、又孝と申は、第一、父母の心にそむかずあさゆふ、父母のさゆふをはなれず、たちゐおきふし食事等にいたるまで、こま〳〵心をつけねんころに、とりはからい、何事によらず、父母の心にかなふやうに、よく〳〵つかつきて、又人の妻となりては、しうとしうとめをまことの父母とおもひ、心へだてなくつかへしたしみ、ねせおこ

し、其の外諸事に付て、人手にかけず自ら、これをいとなみ、假にも心にそむくことなく、たとへむりなることをのたまふとも、はらたてずしうとの心のなだむやうに取はからひ、少も、心にさからはず、しうとの心に入らぬは、わがつとめのとゞかぬゆへと、みつからをせめて、しうとをうらみず、とく〳〵父母舅姑のきげんのよきやうにいたすを、孝とは申なり〳〵、又温とは心をおだやかにやはらぎかどたゝず、物ことおんとうにいたすやう、心をもつて、かたちをあらはすことに候へど、心おんくはなれど、をのづからかたちたをやかに、なすわざもやさしう物ことしとしかにてうつうしく、しぜんとあひそうありて、諸人にしたしみふかくなる也、心いたましきよりひがみもいでき、なすわざも、おろそかにものいひあら〳〵しく、かたちいやしくなり、人の心にさかひむつましからず、されどおや子夫婦のあいだはしたしみなく、是より、むりやうのあしきことのみおこりさふらふなり。是、みな心よりおこるわざはひなれは、心をおだやかにもてとのおしへにておはすまし也。扨順とは、父母および舅姑夫へしたがひ、敬ひつかふるを申なり〳〵。惣じて女は、人とあらそはず、内端にして、人にしたがふを道といたしなり〳〵。されば司馬温公も女子は、生れて三日床の下にふさしむとの玉ひけるよし、是天地陰陽の道理にして、男は陽を受て、天にかたどり、女は陰にして、地にかたどる故、わが身を低うして、へりくたり、人にしたがふ事を示し給ふ御事にて候也、然れど、女は心しつやかに人にあらそふことなく、青柳の春風にしたがふ風情にありたき事にて、おはしまし、たゞし、かくいへどとて、あしきにもしたがひ給へとのことにておはしまさず、たゞあら〳〵しきことなふ、心たをやかにおはしませと申御事にして、國により、所によりて風俗物どいとなみはかはれとも、唐土天竺のはてまでも、かはらぬものは、誠の道にておはしまし候へ、たゞ、とにもかくにも心操を、直にまこと

の道をまもり給はんこと、かしこく、とうとき御事におもひまゐらせし。されど、あまたの國々へ立入人々の心を吸わけ、よしあしを見聞まゐらせしに、色々、品多き御事にてわはしまして、その内より、貴賤ともに御心得にも成けんことをあつめのべあかしまゐらせしまゝ、たとへ、御耳、いたき事々共、此の文をよく〳〵御覧遊して、こん日に御もちひ下されるやうに、かへす〳〵もたのみ上まゐらせし。せんする所は只御こゝろざしのまことをみがき、御身の上めでたく榮えさせ給はんことをのみ、こひねがひまゐらせし。

〇すべて女は、高きもいやしきもいとけなき時より、手跡は言におよはず、織ぬふわざをしること常の要といたしまゐらせし。その故は、日本のあるじとあがまれさせ給ふ天照太神は、女神にてわたらせ給ひ、神代のむかし天子の御位にましませどもすゑの世のいましめとしてすへて奢をはぶきみづから機をおり給ひしとなり。されど、女はようしようよりうみつむぎの道をおこたらず、つとめはげみ給ふべし。たとへ上つかた様とても、此の道をわきまへさせ給はねど、太神の御心にかなはず女の道にたがひ侍ふなり。これによりて、上々様方の御よめ入にもしいしきぬはかりを先にたて給ふは、此のいはれにて、かならず、女のいとなむしわざなることを知らしめんため、やさて、また、三月三日にひなをまつること、これ、また、女子にふう婦の道をおしへ、夫の大せつなることを知らさんため也、惣して、ぜんわん、なへかま、へつつひ、その外、世帯道具をこしらへあつめて、いかうたい、すはかね、みづしくろたなまで、さうおう〳〵にこしらへかざるは、上つ方様にせたひの道具をしらせまひらせましせしあさよくも御ぞんじあるやうにとの御事にておはしまし候へば、専ら心かけ給ふべき御事こそ、めでたき御祝ひにておはしまし候又和歌は、たけき武士の心を和げ、きじんをもかんせしむる德あれは、心有人にたより隨分よみなら

ひ玉ふべし。歌よむ人は自ら、心ざまもやさしくなり、まこともふかくなるものに候へは、古今集、萬葉集、拾遺後撰、その外、代々の和歌集、よく〳〵見給ひ言つ葉はいにしへをもちひ、心は今の風情をのべ給ふ事、歌人のをしへにかなひ申すべき御事にておはしまし候、さりながら、その内も、制の詞とて申さぬ事も多侍ふよし申御事に候へど、くはしく御聞候へて、いかにも歌の数をよみうかべ給ふべきことめでたき御事におはしまし候。しかし、伊勢物語などは、またうらわかき御娘子たちのよませられしはしんしやくありたき御事にておはしまし候。これは、むかしをとこのいたつらことかきつらねたるそうしなれど色情をさそひ出し、心ばへいたづらになるべき御事にておはしまし候。か様のしなは見様にて、いたふ害になることに候へど御心得あるべきことにておはじまし候。その外香のみちなどもたしなみ、折かたしつけ方都て、女の道をまなび給ふことかんようにおはしまし候。それもみつからのたしなみにおぼへ、かつておもてへあらはしたまふべからず。琴は音あるもの〻つかさとして、人の心をたゞしくし、よこしまをいましむるとふるきふみにも見へ侍り、ゑもんかいつくろひ、立ふるまひしとやかに、居ずまひ、正しくよろず身持をたしなむをいふなり。此の四つのおこなひは、女のおほひ成徳義なれば、之を四徳と申侍ふ也。されど一つとしてかけては女の道にそむき侍り候ぞ、かならず、おろそかにおもひ玉はで、身分相應〳〵にまなびおこなひ給ふ様に御心がけおはしまし候へ〳〵ども。

（未完）

敎梯抄（十二）

新葉集雜中

妙光寺内大臣家に百首歌よみ侍りける時窓前栽竹といふことをよみてつかはしける

前大納言 實爲

すなほなるそのひとふしも習ふやと
植ゑてや見まし窓のくれたけ

同 同

百首歌よませ給ひける中に

後村上院御製

つかふべき人やのこるとやまふかみ
松のとざしもなほそたづねむ

拾遺風體抄雜

題しらず 僧正公朝

むかしをも今をもかけててらすこそ
曇らぬ御代のかゞみなりけれ

續拾遺集雜上

弘長元年百首歌奉りし時曉を

前中納言定家

鳥の音そあかつきごとになれにける
きみにつかふる道いそぐとて

臨永集雜上

題しらず 大納言親房

とりのねに猶そおどろくつかふとて
こゝろのたゆむ間はなけれど

延文百首

延文百首歌の中に 右大臣道嗣

時しあれば仕ふるひともいそげとや
ゆふつげ鳥もおどろかすらむ

家集 曉更雞 法印堯孝

ときをしる八聲のとりもをさまれる
御代はいまとや神につぐらむ

拾玉集 曉更鶴 前大僧正慈鎭

籠のうちにおのか毛ころも霜さへて
こをおもふ鶴のあかつきの聲

夫木集雜

百首御歌の中に木兎

土御門院御製
あしひきの山ふかくすむみゝつくは
うき世の事をきかじとや思ふ

同　同
同じく鵯
籠の内にまだすみなれぬひえどりは
こゝろならでも世を過すかな

同　同
同じく雀
思へたゞすゞめのひなをかひれきて
そだつるほどはかなしき物を

同　同
六帖題山陵鳥　光俊朝臣
やまからのまはす胡桃のとにかくに
もてあつかふは心なりけり

家集　十題百首歌の中に　後京極攝政
世のなかに虎おほかみはなにならず
ひとの口こそなほまさりけれ

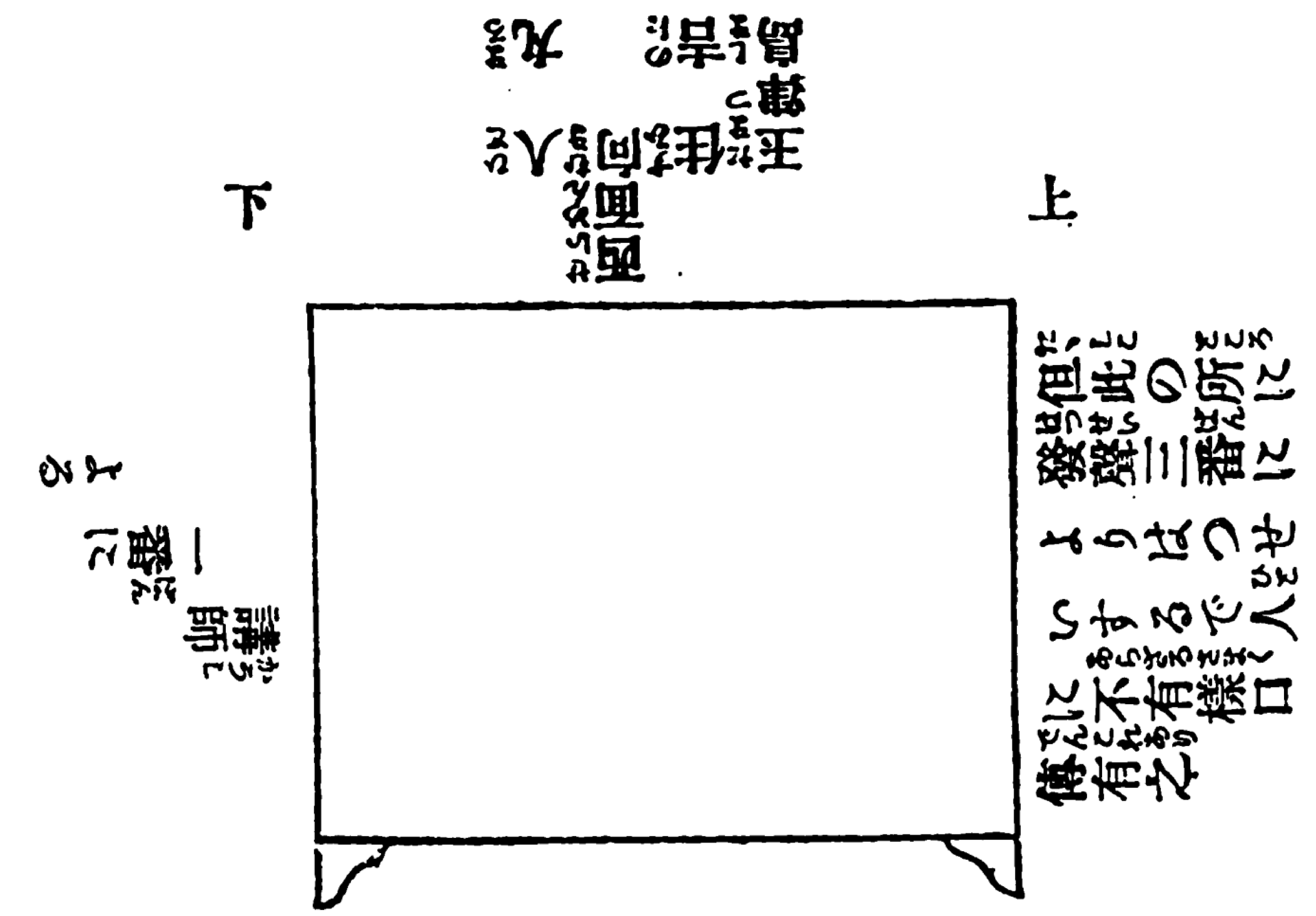
權中納言定家
おもふにはおくれむものかあら熊の
ふすてふ山のしげしなりとも

夫木集雜　七百首歌の中に　權僧正公朝
耳あらふひとも無ければやまかはに
みつかふ牛をひきもかへさず

（以下次號）



飛鳥井家和歌の式法（二）



發聲音あしき時は、こゝをとの人はつ聲する事、常に有之

講師講之

講題の時かしこまるなり

講師二番による

此の講師は重役とて、貴人は發聲を遊ばし候、但一段の貴人の事なり。

一懐紙を、文臺に一ツ置時、扇を座に置なり。

一懐紙巻たる字頭の方、少、裏へ折返やうにするなり。

一懐紙を左の手を先にして、両方の手に持分るなり。文臺よりもこなたにて、膝にて、二足三足歩て、左の手をつきて置なり、のきやう、貴人の方へ扇をむけずして後へしさりて歸座す。

一懐紙、文臺に置時は、文字頭おし板の方になすべからず。

一大方の貴人ならで、貴人ましまさぬかたの文臺の脇通り、足より外に置べし。文臺の下に置事有るべからざるなり。

一各懐紙集りて、後かさねやうは、貴人の御懐紙、一番に文字の方を下へなして置なり。其の後、次第〳〵に下讀をくはへ置べし、皆々かさねて後、文字の方を裏へ、懐紙、少すみちがへ折て、文字頭を末座の方になして、文臺に置べきなり。

一着座の次第の事、一番に講師着座文臺の右一也。二

番に講師文臺の前に着座するなり。扇を、本座に置て、座に着なり。三番に、發聲着座、此の役は三人ながら客座するなり。畏る〻事なし。

一講師、重たる懷紙を、右の方に、少膝の下にはしを押入るやうに置て、詠じて、下臈より、一まい、文臺に頭を末座へなして置べきなり。

一いつれの人も、我歌をむ、披講せぬ者なり、夏日同詠三首和歌とよみて、二番に、題を讀て、三番に作者の官位名乘をよむなり。四番に歌をよむなり。次は季日同詠をもよまず、作者ばかりよみはて〻やかて、座を立、本座に歸るなり。五首七首同前なり。一詠吟はて〻、懷紙文字を内へなして、二ッに折りて字頭を末座へ向出し、板におくなり。

一當座の短冊の中を、水引一筋にて結ひて、押板に有るを、講師取て、文臺の上にてとき、水引を、押板のかたはらに置なり、講師歌をよみわけは、講師左の手にて、短冊を、文字の方を下へなして、引重て置なり短ざく五十枚共ならば、水引二筋にてとづべし。

一講師、又、短冊を取て、一番に題を、二番に名乘を三番に歌をよみてわぐるなり。別題ならむ、度々によむべし。通題ならむ、初一度讀で後は不讀、發聲も懷紙はてさまにれなじ、果樣の歌一首講師本座へ歸りつかぬ間は、發聲はせぬものなり。

一短冊詠吟はて〻講師、短ざくを取て、懷紙の上に置やう文字頭これも、下座に向るなり。とつる事は、たれにても似合鋪人とすべきなり。とち樣口傳有之。

一懷紙、同短冊の裏書貴人の役なり。口傳

（未完）

歌俳百人撰（三）

京六條本國寺　日達上人

第十二

我庵は都にわらし吾妻にも

わりやなしやと千鳥なくなり

此の詠歌は、日達上人碩學の功積りて、法花の行者なれど譬諭品の火宅を出る心にて、此世は假の宿。金銀珠玉をちりばめたりとも、誠の住所にはなし。名問の媒よりする事、人と生れては、唯何事も、心を留る事なかれ、出家の歌は出家の禁め、女の歌は女へのおしへ、是を第一とすると黄門公にもの給ひしなり。出家は三界の舍心を求めず、ちんだ瓶ひとつを殘さぬ物といへり。此日達上人は本國寺に在住すといへども、心ていを止めざる有さま、都にもあらず、吾妻にもありやなしやと、誠に面白讀懸しを、大宮人も褒美し給ひしとかや、此上人は、近代、第一の學匠にて、其の宗門の法燈をかゝげ、諫迷論をあらはし、また家殊錄といふ書を作り、宗門の輩は、是を一覽して、學才を感すべし。

第十三

年中の人の心をけふぞ哉　　沾德

是は、正月元日の吟也。一年三百六十日の人の心はいろ〳〵に變じ、或は悅び、又はかなしみ或は腹立、又は笑ふ。面白き事もあれば、うきつらきめも有。時と品とによりて、永き春の日も、短く覺へ、短き冬の日も長く覺ゆ、其の中にも正月元日は、老たるも若きも、年立歸る初春のこゝろに、門松立てわたして、君が代をいはひ、また、ほのぐらきに、若水汲みて、年男の神棚は、燈明さゝげるうた、早麻上下の音でわ〳〵と、年始め壽申し入れ、屠蘇喰摘取出して、父母妻子の無事を悅なんと、此の日は、少のはら立事あれども、我人一年の初目の始日のはじめなれば、てんでに心を和らぎ、いそ〳〵する日なれど、何卒年中の人の心を、此の元日のやうに持なば、何事も目出たからんとゆふ事なり。氣なしの發句の情なれ共、今日に哉といへるにてしせんと知られたり。此の哉ははなれものゝ情なれとも能すわり、光り考へ見るべし。

第十四

（京祇園の）　歌治

およひなき雲の上なる戀さを
天が下とてぬる丶袖哉

京祇園の水茶屋の賤しき女たりといへども、其の志至てやさし歌俳に達し、梶といふ名を知らざる人も無く、雲の上まで、御聽に達して、度々秀吟有。一とせあられの題にて

雪ならで木梢に留てあすも見む
よるにあられの音のみぞして

是も名高き歌なり。繪も上手に畫り。古人の小町が事も、さま〲にいひなせども、實は、賤きもの丶娘なり。西巖先生の書にも見へたり。其の外慥なる實記にも、小町が事、出生は出羽の國なれども、郡司良實がむすめにてはなし、とあり。歌には、妙を得たるゆへ、召出されて高位に交り、是和歌の徳をへたり。有難辱き事にあらずや、堅く强からぬは、女の歌也と貫之も書れたり。此の梶が「及ひなき」歌は　仙洞樣崩御の時、御いたみを察したる歌なり。下として、かくやんごとなき事、上つ方の御追福は、中〲、以て申上難きゆへ恐て、誰も申し人なきとかや、然るに梶が、傷の歌は、ひとり、よく叶ひしと申すべし。此の節京わらんべの申せしには、小野の小町が祇園の梶と生れしと言ひしも、尤なり。此の女、一代の歌を集めて、かぢの葉といへり。

第十五　　足立來川

此自由唐人いかにきぞはじめ

此の人は、無倫の子息にして、俳諧の宗匠なり。漢土迄も、日本は、萬にてばしかく、はやう埒のあくを見よと、我朝を譽し句也。器物織物に、一目見ると、日本人はやるものにあらず。鐵はしをりものにいたるまで、又天鵞絨の類作り出したるにておもひやるべし。唐人の衣服は、夏は冬のに、ごはせかけ環を付、爰をしめかしこを結ひ着たり、ぬひたちするに、殊の外手間取り、帶一筋にて、埒明日本を見よとなり。

第十六　　赤井圖書

よの中の限りはさらになけれとも
君の齢し桃の花さく

此の歌は享保十五戊年吉宗公の仰付にて、四ッ谷中野へ、數多の桃を植させ給ふ、今桃園といふ。此の花の盛の節、桃を上覧有べしと、御成ありけるに、はな最中にて、桃花夭々森々として、絶景也。折から、上意に、惣御供中へ、桃の題を詩歌、連俳、何にてもさし上候旨被仰出たり。然れ共、誰一人も、何と申上ぐる人もなし。其の時御徒頭赤井圖書、此歌を差上たり。是を上覧あり。甚、感じ入らせ給ふ。世の中のといふ五文字へ、中野といひかけ、人の限りなき願ひ無量の義も、上の句につらね望みはかぎりなけれども、我願は、何卒君の御齢を百年もたもち給へかしと、君を祈りし忠誠の心、誠に君の御壽千代萬代とつひゑやうをいわず、百にもといふ意あれど、桃によそへて壽ぎ、過不及なき、實躰といふべし。なるてふ桃のとよみし古歌も、又は君にひかれて、萬代やへんといひし古歌は、君をかざり過、祝ひ過たる歌なり。迚も千年萬歳生られる●物でもなし。夫故、百年までもと君を祝たるなり。此の圖書、臣として、君を祈る忠臣の詠歌、偽飾なき所、至て御譽に預りし圖書が、心てい、いつ迄も、天地空しく、捨給はんや。されど、翌年禁裏の御附人に仰出れされ、越前守に受領せられたり。上がたにても、雲上八等の耳を驚かせし詠歌とも、多く讀たりし。

第十七　前ノ中村故一

おのが身の露はしらずや松露とり

是は、堺町仕切場十助といへり。古歌にいへる

世の中は草木の葉末風しげく
つゆの此身の置所なし

といふをふまへて、誠に人の命は電光石火のごとくなり。今も知らず、草木に置る露のごとく、人の葬式の供する人、其の死したる人の噂のみして笑ひたわむれて行とも、いと淺間しき事なり。我も、あすにも死るぞ

送られんに、夫は少しも付す屠所の羊のあゆみ、我身の外もあるよふに、鳥邊野やふなをか山の烟も、よそに見るこそはかなけれ。古歌に

鳥邊野の烟はけふも立ぞかし
　見て居る人はいつを限りぞ

とよみしごとく、圓位法師のけふにしもや有なんと書れしも尤なり。己が、身の露をもしらず、松露を拾ふて、世をわたるのあじきなし。

第十八

盲人不怨齋

久堅の雲に限はなくも哉
　てりくもりなき朧夜の月

論語に曰、天をも恨ず、人をもとかめずと、此の聖語は、天、命じて、不幸に逢つる人の上をのたまひしなり。たとへば、伯牛が病、顔淵が不幸短命、佛道にては過去の宿業によるといへる塲なれども、是現在せる悪業なくて、不幸にあへる人は、皆天命なれば、人として天を恨み、人をとかむる事の有べきや。此の不怨齋は、雲州松江の家中儒者にて、誠に博學多才なり。中年の頃、何とかしたりけん、始は、少し眼病にて有しか、つゐに兩眼ともに盲たり。されども、更に屈せず。學文におこたらず、目の盲たる事、何ぞ不幸とせん、是天命なり、天をもとがめず、不恨を爰なりとて、其の不おんの文字を、其の儘に不怨齋と名付たり。譬へ、兩眼は盲たり共、心の眼は明なり。予、一年人に望まれ、百人一首を講談せしとき、蟬丸の「これやこの」の歌に至りて申せし事あり。蟬丸は、延喜の帝、第四の宮にはあらず、勿論東海道に、四の宮河原と云ふ所あれども、後に名付たる也。其の上、せみまるは盲人に書けども盲人にはあらず、其の證據は「しるもしらぬも」の前書にゆきゝの人を見てと有、何盲人にて見る事あらん。是盲人にあらぬ印なりと、余、此の事をあらあら述べしは誤也。蟬丸は、盲に違なし、往來の人を見るといふはうつ〳〵と觀して、心に見るなり。是を心眼と云ふ。見るは、觀世音普陀洛山の居まして、

娑婆世界の両音を觀して、聞給ふなり。さるによつて見るといふ所考へ給ふべし。両眼を閉靜に心を清くして聞時は、目の明たる人より明なり。志ん眼のなす所、肉眼、天眼、両がん、法眼、又は佛眼、心眼の事、法華太儀にみへたり。ことごとくいふに不及、關ヶ原の軍に、大谷刑部が盲ながら、跫音を聞て、勢の多少を知り、勝負を斗りしは、心眼のなす所、又豊前に閑齋といふ者あり。盲人にて、馬に妙を得たり。初て馬場にて、一ぺんにをどらせて試み、二へん目より、そらんじて、馬の口の廻し方など、少しも誤らず。不思議なるは居ながら路を通る馬のあしおとを聞て、其の馬の毛色を當て、疵癖、走馬、若馬を當るに、少しも不違、その馬をさぐるよりは慥なり。四十歳にて盲たれ共、かくのごとし、すべて音曲事は目明より盲の方、考深く一毛もたがはず、是心眼なす所にして、蟬丸も盲ゆへ、往來の足音を聞て、京へ行人もあれど、大津へ通る人もあり、行も歸るも去るもしらぬもとあるは、生れては死し、死しては生れ、逢てはわかれ、別れては廻りあふ輪廻流轉の歌なり。此の不怨齋は盲の目明といふべし。大學にも「心こゝにあらざれば見れども見へず」とあり。眼あきらかなりとも、心次第にて、盲にはおとれり。明めくらと俗にいふも尤也。此の歌久方の雲にはうらみ少しも無、照曇にもいとはす、朧夜のごとしとはれもしろく、此の人近き、頃古人とはなりぬ。

辨似抄

赤松景福

是は辭にまれ。語にまれ。相似て紛はしきやうなるものを並べ擧て、そを一目に辨へ易らしめむとするなり。大方かやうの事どもは、諸書に記されてあれども、これかれ散けて、對へ見ること難ければ。今か

うものする故なり。さてこれが解釋の如きは。先輩のいはれたるに依、又は、已が考をもて記せるものも多かり。

より　より

萬葉集　あしべより滿來る鹽の彌ましに思へる君が忘れかねつる

是のよりはにの意にて、葦邊に潮の滿來ることなり。

古今集　あしべより雲居をさして行雁のいや遠ざかる我身かなしも

是よりは常のよりにて、葦邊からなり。

にて　にて

土佐日記　都にて山の端に見し月なれど波より出て波にこそ入れ

源氏帚木　世のすき物にて

是のにてはにしての意、歌文ともに多し。又にしてといへるも多かり。

萬葉集　春日野の藤はちりにて何をかも御狩の人の折てかざゝむ

是のにては、いにての略語(去而)にて。爰は散去而なり。常にいふ散にし、過にしのにも、此にと同じかるべし。即ち奈行變格第二段なり。其の活圖は。

な　に　ぬ　ぬる　ぬれ

ねど　ねど

古今集　相見ねど戀こそまされ水無瀨川何に深めて思ひそめけむ

是は常のねどにて、相見ざれどといはむが如し。

古今集　天の川深淺しら波たどりつゝ渡りはてねど明ぞしにける

是のねどは常の意にあらで、ぬにの意なり。爰は渡りもはてぬに、早夜は明ぞしにけるといふにて、渡りの上に、未といふ語を加へて見るべし。萬葉集古今集ともに、此の例あり。(但古今になりては、已に少し)さて後世は、初の例を主とすべし。後の例の塲合にはぬにといふ方穩かにてよし。いづれも不然辭

にて。其の活圖は　ず　ず　ず　ぬ　ね　此ねにぞ
の屬たる也。
ざりける　ざりける
古今集　紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞ別
れざりける
此のざりけるは「ずありける」の約にて、別れずあり
けるなり。此類つねに多かり。
土佐日記　照月の流るゝ見れば天の川出るみなとは
海にざりける
是のざりけるは常の意にあらで「ぞありける」の約
なり。（上のずありも、此のぞありもざりとなる）係
辭のぞを含める故に、下をけると結べるなり。かや
うの歌に上に、又ぞを置き、或は下をけりなどする
はひが言とす。
ず　ず
古今集　月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋てぞ
知るべかりける

是のずは常の不然辭にて。不の字の意なり。其の活圖
は　ず　ず　ず　ぬ　ね
竹取物語　かの本の國より迎へに人々まうでこむ
ず
此のずは常の意にあらで「とする」の意にて、爰は
參出來むとするなり。此の例歌にはなきやうなれど
も、中古以降の文には多かり。ずといへど不とは反
對の意と知べし。其の活圖は　ず　ずる　ずれ　如
此三轉のみにて、不字の意の五轉（圖上にあり）なる
とは。同じからざるものなり。
ずは　ずは
古今集　今日こずは明日は雪とぞふりなまし消ずは
ありとも花と見ましや
此の第四句のずはは、はを清て讀べし。かろく添た
る辭にて、消てありともといふ程の意なり。初句の
ずはのはは濁るべし。委く次にいふべし。
古今集　あひ見ずは戀しき事もなからまし音にぞ人

はきくべかりける
初の例の今日こずばと、此のあひ見ずばなどのば文字は濁るべきは、いかにといふに、この句の意は、もし我來ずあらばといひ、もし我見ずあらばといふにて、皆、その本の意は、未來に係るものなれば、必ず、濁るべき理なり。しかるに本居翁の遠鏡には、殊更に清音によむ符つけられたるは違へり。又、古今集に「うぐひすの谷より出る聲なくば春くることを誰かしらまし。此三句のはも同じ。即ち遠鏡の譯には「ナンバ」とあり。又こひしくばとぶらひきませとあるも同じ。又てばとてはとにも、此誤りあり。准へて辨ふべきことなり。此等の外は遠鏡の諸樣における、いと正しくありけり。序にしるす。漢籍の傍訓に「ズンバ」とあるは、即ち、此ずばを音便にいひならべるなり。

（未完）

和歌の浦波

石川彦太郎

花に鳴く鶯、水にすむ蛙、あるは草葉がくれの、さゝやかなる蟲に至るまで生きとしいける者、何れか歌を詠まざらん。まいて萬物の靈とも呼ばるゝ人の事わざ繁き、此の世にありて、喜怒哀樂の情を、見るもの、聞くものにつけて云ひ出でん言の葉無くてやは、さてこそ、石のかみ古き世には、九重の雲の上より天ざかる鄙の國べに至るまで、尊きも、賤しきも、男も、女も、老たるも、若きも、おしなべて、おのがし〻思ひのふし〴〵を歌ひ出でたりけれ、されど世のうつりかわりと共に、言靈の幸ふ國も名のみかとうち驚かるゝばかりにて、人の心も無下に賤しうなりもて行けば、優にやさしく、艶やかなりし言の葉も、何時しか色あせて、風雅のわざも、軈て地を拂はんずるけはひ、悲しとも、亦口惜からずや

さるに、猶、今の世にしも和歌てふものは、所謂、歌人のもてあそぶべきもの、やんごとなき際の、月をながめ、花を愛づるおりのすさび、われ〳〵の顧るべきものかはと、ひたすら思ひあやまりて、露、心にとめざるのみか、なか〳〵に人の口すさぶものあらむ、其をいやしめ嫌ふやうの處女子ども無きにしもあらざめれど、から樣の人々に見せまほしうて、珍しからねど書い付けつ。見ん人、その心してよ『古今著聞集』に

基俊城外しけることありけり。道に堂のあるにむくの木ありその木に六歳ばかりなる小童上りてむくを取りて食ひけるに此處をば何と云ふぞと尋ねけれどやしろ堂と申すと答へけるを聞きて基俊何となく口すさみに童にむかひて

　この堂は神か佛かおぼつかな

といひたりければこの童うちきゝてとりもあへず

　法師みこにぞ問ふへかりける

といひけり基俊あさましく不思議に覺えてこの童はたゝ者にはあらずとぞ云ひける

とあり。又『玉勝間』に

後嵯峨法皇の御熊野詣ありける時伊勢國の夫の中に本宮の音無川といふ所に梅花のさかりなるを見て

　音なしに咲きそめにける梅の花
　　匂はざりせばいかでしらまし

夫が歌にはいみじき秀歌なるべし、此の事、御下向の時道にて自然にきこしめして北面の下らふに仰せて召されけり馬にてあちこち打ちめぐりて本宮にて歌よみたる夫は何れぞと問ふに是こそ件の夫にて候へと、傍なるもの申ければ仰せなりまゐるべしと云へる返事に

　花ならばをりてぞ人のとふべきに
　　なりさかりたる身こそつらけれ

さて返事にも及ばでおめ〳〵と馬よりおりて具して參りぬこの子細きこしめして御感の餘りに賞

はのぞみにまかすべしと仰せ下されけれど母にて候ふものを養ふ程の御恩こそ望むところに候へと申しけれど百姓なりけるをかの所帯公事一向御免ありて子孫まで違亂あるまじきよしの御下し文をぞ賜はりける

と見えたり。さきの六歳の兒童の下の句つけたるも不思議に、また、この夫の賞を得たるも、いと思はずならずや。昔は鋤鍬を手にして、あしたには、星をいたゞきて出で、夕には、月を踏みて歸る田夫野人も、みやびの道をたどれること、此の如しなど、月卿雲客の占有物とのみ思はんや、又法師うた人の翫弄物のみならむや

『太平記』に

第九宮はいまだ御幼稚におはしませどとて中御門中納言宣明卿に預けられ都の內にぞ御座有ける此の宮ことしは八歳にならせ給ひけるが(中略)さては宣明我を具足して參らじと思へる故にかやうに申すものなり白川の關とよみたりしは全く洛陽渭水の白川には非ず、此せるは奧州の名所なり近頃津守國夏が、之を本歌にてよみたりし歌に『東路の關まで行かぬ白川も日數へぬれど秋風ぞ吹く』又最勝寺のかゝりの櫻枯れたりしを栽ゑ替るとて藤原雅經朝臣『なれ〳〵て見しは名殘の春ぞともなど白川の花の下陰』是皆名は同じくして所はかはれる證歌なりよしや今は心にこめて言ひ出さじと宣明を恨仰せられ其後よりはかきたえ戀しとだに仰せられず萬の物憂き御けしきにて中門に立たせ給へる折ふし遠寺の晩鐘幽に聞えければ

つく〴〵と思ひくらして入相の
鐘をきくにも君ぞこひしき

情うちに動きて詞そとにあらはる御うたのをさ〳〵しさ哀にきこえしかど其比京中の僧俗男女是をたゝう紙に書きつけて是こそ八歳の宮の御歌にとて歌はぬ人は無かりけり

『土佐日記』に
ある人の子の童なるひそかに云ふまろ此の歌の返しせんといふ驚きていとをかしきこと哉よみてんやはよみつべくははや云へかしといふまからずとてたちぬる人を待ちてよまんとて求めけるを夜更けぬとにや軈ていにけり抑いかゞよみたるといふかしがりてとふこの童さすがに恥ぢて云はず强ひて問へば云へるうた

ゆく人もとまるも袖のなみだ川
みきはのみこそぬれまさりけれ

となんよめる斯くは云ふものか美しければにやあらむいと思はずなりわらはことにては何かせん女翁にをしつべし惡しくもあれ如何にもあれ便あらばやらんとておかれぬめり

とあり。又おのれ、嘗て安藝に遊び、嚴島に詣でし時の紀行文中に記しおきたるを見るに
西行法師行脚して諸國をめぐりける比此の島べにて貝拾ふ海士の處女子に道を尋ね給ひしがとみにいらへも無かりければ

空蟬のもぬけのからにことゝへは
山路をさへも敎へざりけり

とよみたりしに處女子うちほゝゑみてもぬけのからかとこそよむべけれ既にもぬけのからにと定め給ひし上は答へ申さんもせんなしと云へど西行詞なくて此處より空しう立ち歸り給ひけるとなむ
何、かゝるためしは、昔の日記、物語、双子などに、いと多かれど、さのみはとて省きつ

花がたま

井上賴文

釣遊の記

福軒生

熱暑炎々として、家居に堪へず。即一竿を肩にし、數卷の書を魚籠に盛り。去つて綠蔭深處に、河伯の岩窟を

訪はむと欲す。

五十鈴川源を神路山に發す、流域僅に三里に過ぎざれども、奇景勝境頗る多し。就中竈淵鰒石の境を絶勝とす、此の邊、又、稱して、西行戻りと云ふ傳へ聞く。昔、西行法師、天下巡錫の時、神路山の奇勝を探らんとして、此の地に至り、山水の美を嘆じて曰はく。神路山の絶景恐らく、此に盡きたらむと。終に錫を廻せりと云ふ。此の地、余が家を距る、甚遠からず。飄然として、門を出づれども、未三十分ならずして達す。

竈淵の絶壁の下に在り。碧潭澄徹して、游魚頗大なり。對崖より、之を下瞰すれども、絶壁の下、水底、深く一帶の岩石、竈形を成して並列せるを見る。其の數、總べて三個あり。其の形狀の奇巧なる、殆人工にあらざるかと疑はしむ。聞く秋水底砂を移せども、尚、無數の竈形岩、其の下に累積せるを見ると。

鰒石は、直に竈淵の上流に在り。共に、一望連續の勝地なり。然れども、其の奇勝は、即同じからず。鰒石は鰒形の、一大岩石にして、岩上百人を坐せしむべし。此の一大岩石は、前面に、他の奇崛なる無數の譏衛的岩石を控へたるを殿後の雄鎭にして、龍蟠虎踞、もちて斷流の衝に當れり。而して、地勢、漸、東下せるを以ちて、流水、此の處に至り、速力を急めて直下し、奔注し、忽突兀たる巉岩に觸れて、飛沫雲霧を生じ、雲霧日光に射られて、虹霓を現し既にして、又激水に奔はれて、白龍を躍らし、轉々して、白龍、再、飛沫と化し。飛沫、再、虹霓を現し、終に、大に合縦連衡して、鰒石に突喊し、水烟蓬勃として五彩の雲霧金蛇を奔らし、雪花狼籍として珠玉四方に噴散す。然れども、竟に、拔くこと能はず。千軍萬馬、空しく聲を收め、白旗一道搖々として、流れて竈淵の深潭に落つ。

余は、まづ、鰒石の對崖に渡らんと欲し、手巾もて魚籠を蓋ひ、裳を掲けて、岩石を傳ひ行く。岩滑らかに足危く、水烟、人を掠めて、容易に歩むべからず。余は

恰盲夫が、杖なくして、歩行を試むるが如く、衣巾の濕ふにも關せず。徐々として、試驗的に歩を復しつゝ、漸にして、彼岸に達することを得たり。此の岸邊は、長扁なる一大岩石にして、悉く、青磁色を露はし、處々奇狀を呈せり、圓盤して、圈に似たるもの、臼に似たるもの、瓢に似たるものあり。方穿して、桝に似たるもの箕に似たるもの、椀に似たるものあり。蓋これ激流、之を磨し、怒浪、之を齧むに因るなり。

余は、幽靜なる釣魚の好地位を索めんと欲し。暫らく、岸邊を佇望するに鰒石の下、竈淵の上に方りて、一巖石の水に望みて、屹立せるを見る。然れども、此の間岩石斷々として、岸に沿ふ能はざる也。即迤邐たる山坂を攀ぢ猿猴の如く樹より、樹に身を寄せつゝ、山雲を蹈破して岩頭に登れり。恰好し老松一枝、天より垂下して、岩頭を蓋ふ。余は、此の岩頭に踞して、籠中の燧木を探り、烟を喫し乍ら、徐に、手足を撫摩するに、荊棘指脛を傷けて、血氣班々たり。然も、敢て、意に介せず。悠然として靜に竿を垂れぬ。清風爽々として、腋下に生じ。流水、溶々として渦紋を浮べ、松聲、時に天風に彈じ。暑氣、頓に去りて、心風水と與に涼しく、人をして、超然として人世を忘れしむ。況んや微傷の有無をや。

日、漸、傾きて魚籠、やゝ滿ちたり。久しく釣すれども、釣も、亦、倦みぬ。乃、書卷を開きて、之を讀む。偶童子二人あり。對岸に沿ひて下り來れり。諦視すれば余が伯兄叔兄の両兒童なり。齊しく、余を認めて、呼んで曰はく。噫叔父君よ。獲る處多少幾何。吾等、已に、籠に滿ちたり。乞ふ、共に歸らんかと。余、曰はく、熱暑未去らざるべし。余は晩風に乘じて、月に歩せんと思ふなり。汝等疾く去れと。二童相告げて曰はく。泅水如何。曰はく。諾。忽ち、衣を脱して、一躍水中に投じ來れり。余、之を如何ともする能はず。誡めて曰はく。徐かに泅ぎ來れ。下流に落つる勿れと。瞠目して、之を視るに、彼等は、殆、日課の如く、水練に

従事するが故に、其の熟達せること、余が訓告を無用ならしむるの勢なりき。余は、彼等が海國的男兒の素養あるを喜びつゝ、之を、岩上に延きて、余が魚籠を示しぬ。彼等曰はく。叔父君よ。讀む所何の書ぞと。彼等、両人は、今春高等小學を卒業せしものなり。童子高等小學を卒れば、既に書を解せむことを試む。又奇なりと謂ふべし。余曰はく。善い哉、問ふこと、居れ今、汝等に語らむ。此の書は、此の山川の歴史的文學なり。汝等記するや否、畏くも皇祖第十一代垂仁天皇の御宇。天照太神を、大和の國より、此の五十鈴川の上に遷し祀りしより、年を經ること二千有餘年なり。然も、五十鈴川の流は皇統の連綿たるが如く、嘗て絶えしことなく、神路山の姿は國体の堅固なるが如く、嘗て動きしことなし。かの蒼翠たる樹木は、萬代不易の色を表するなり。この清淨なる流水は聖明至治の象を寓するなり。畏けれども、代々の皇帝は、皇祖天神を拜し玉ふにつけ、朝には、清き五十鈴川の流に心を澄み玉ひ、夕には高き神路山の姿に思を寄せ玉ふ。太上天皇の御製には。

我が末の絶えずすまなむいすゞ
　川底に深めて清き心を　（續後撰集）

ながめむや神路の山に雲きえて
　夕の空にいでむ月影　（新古今集）

と歌ひ玉ひ。順徳院の御門は。

神風や契もくちじ五十鈴川
　頼をかけし度會のしめ　（御集）

神路山松も千年の陰しけみ
　深き頼を猶かくる哉　（仝上）

と詠じ玉ふ。

千年とも何かまつべき五十鈴川
　濁らぬ世にはいつも澄み鳬　（月清集）

とは、法師兼好が筆の雫にして

神路山月さやかなる誓ありて
　天の下をば照すなりけり　（新古今集）

とは、法師西行が墨の香なり。
其の他、山陽、外史賴襄は五十鈴川に行吟して。
平地生二雲氣一。參天盤木陰。萬年神在處。兆庶子來心。此水流二今古一。何人測二淺深一。姦雄欺二裔冑一。不レ遁二太陽臨一。
と歌ひ。大學頭林信光は、神路山の月に嘯きて。
山粧烟黛面。地鋪風霜練。月如二神德一明。行人仰レ首見。
と賦せり。是、皆國家安寧の雅頌にして。上は、九五の至尊より、下は文人法師の蹕に至る迄、各、其の志を記せるなり。汝等千古の靈地に游び、萬代の神泉に浴す。此の五十鈴川の流は、啻に汝等が身躰を洗ふのみに止むべからず。須らく、汝が心魂を洗ふべし。此の神路山の清風は、啻に汝等が衣襟を吹かしむるのみに止むべからず。須らく汝が氣骨を爽にすべし。神州元氣の鍾まる處は、此の山、此の河に在り。此の山秀でゝ富士の嶽となり、巍々として、千秋に聳え、此の河注ぎて大瀛の水と爲り、洋々として八州を環れり。汝等、他日國家の爲に盡さんと欲せば、克く、此の心を体せよ、伯童、汝は、動かざること山の如くあれ。叔童、汝は滯らざること水の如くあれよ。余は汝等に、此の敎訓を垂るゝの好機會を得たるを欣ぶなりと云へば、二童唯々として肯けり。

松風、頻に響き、山鳥、遠近に啼く。回顧すれば、日は、既に山巓に在り。對岸一徑樵夫の列を爲して歸り行くを見る。余は、即二童に誘れて、歸途に就かんとすれども、再かの鬱茂せる樹間を經過し、また手足を傷けんことを恐れて躊躇す。二童曰はく。乞ふ、共に泅ぎ渡れ。我等君の爲に衣服と書卷とを護送せんと云ふ。余曰はく。汝何の術かある。曰はく易々たるのみと。直に、水中に投じ、足もて立ちながら泅ぎつゝ、双手を擧ぐれば、一童、之に書卷を授く。彼は、之を頭上に戴き、双手にて、之を擁護しつゝ、顏面半は、水に沒し乍ら、時々口を上げて、呼吸を通じ、終に、よく彼

岸に達せり。其の滑稽なること、水伯もし、知ることあらば、將に笑渦一斛を湛へしならん。續て、今、一童も水に投じぬ。余は、衣服を緊束して、之に授けぬ。彼は之を隻手に捧げつゝ、片手もて、泳ぎ去れり。余は、即魚籠を括約して、之を首に懸け、身を躍らして、水中に投ぜり。魚籠、水に壓遮せられて、殆、余が游泳を掣せんとす。余は止むなく、顧みて、之を片手に捧げ童子の如く面を、水中に伏せ乍ら、隻手水を搏ちて、漸彼岸に達せり。

三人、衣を整へて、歸途に就く。礫石の水聲奔雷の、漸く遠かるが如く聞え、篭淵の水流碧、益碧を帶べり。前峯の山腹には、牛車を率きて過ぐるあり、後嶺の天邊には、月色、既に微光を放てり。晩風、爽々として人を襲ひ、清快云ふべからず。余、徐に吟じて曰はく。

排レ衣千仭岡。洗レ足萬里流。大丈夫不レ可レ無ニ此氣概一。
風度ニ水面一時。月到天心處。大丈夫不レ可レ無ニ此吟懷一。

と、二童歌ひて曰はく。

花橘もにほふなり。軒の菖蒲もかほるなり。夕くれさまの五月雨に。山ほとゝきす名のるなり。

余、復唱ひて、曰く。

莫春者。春服既成。冠者五六人。童子六七人。浴乎沂。風ニ乎舞雩一。詠而歸。

と。途上眼に螢火へ迎を、耳に河鹿の聲を送り、漸にして、家に歸れば、月、既に南樓を照せり。即一浴の後、樓に登りて、月下、此の記を作る

* * * * *

納涼　　下田義天類

此處をせと墨田川原の　堤には車　ひきつれ、
河瀬には　小船こきたみ、夕つゝのか行き　かくゆき、
岸にせに風　まつ中に、糸竹のしらへ　涼しく
人げ遠き　水かみさして、やる舟やたれ、

競點歌（第二十五回）

諏訪忠元

阿部光忠君評

新年竹

水野釥子

立かへる年の初日の窓ちかく
　みとり色そふ千代の竹むら

四ノ句色そふを、ふかむるト改タシ

山田謙益

あけて今朝きなく雀も千代とよふ
　軒はの竹にさす初日かな

大田原一清

立かへる年の初めの窓の竹
　おもふふしなく千代と契らん

四ノ句うきふし志らぬナドニヤ

大田原千秋子

年たては嬉しきふしの數そひて
　影あらたなる窓の呉竹

大田原清治

茂りそふみ園の竹に千代こめて
　ともに祝はん年の初そら

茂りあふみ園の竹の千代かけていさやいはゝん年の初めをナド改タシ

飯田稲子

ふる葉をゝはらひ清めて新らしき
　年をむかふる園の呉竹

門つかき立つらねたる竹の葉に
　かはらぬ御代の色そみえける

川島宗端

新玉の年立けさはのとかにて
　園生の竹の友つれもなし

天

川島さか之子

吹風の千代のしらへと聞ゆなり

年立けさのまとのむら竹　　牛山寛

門まつのときはのいろに立そへし
　竹の千歳の新玉のとし
結句ツマリ、閑苦クヤ、サレバ、下ノ句ヲ竹のみどりもかはらざりけり、ナドシ玉ハヾ、優ニ聞ユベクヤ

幾千代と重ねて長き呉竹の　　豊田三叔
　またひとしほのみどりますらむ
下ノ句、みどりいやます年立にけりニテハ如何ヤ

。うきふしはみな白雪に埋もれて　　串橋隆美
　年立かへる千代のくれ竹

。新玉の年立門のくれ竹に　　牛山晴微
　千代の色あるけさの初そら

かど松にそへて立たる呉竹の　　雨角政徳
　ちとせを祝ふあら玉のとし
結句ツマリタリヤ、依テ下句ヲ千代をことふくけにもある哉ナド改玉ヒテハ如何

新らしき年のはじめの初日影　　諏訪直子
　竹に移ふけさそのとけき
四句假字違へりうつらふト書給ふヘシ。但シコヽハてそふりト改メ玉フ方可然ヤ

新玉の年立かへるふしことに　　遊坐貞方
　ちよをこめたる窓のくれ竹

。あら玉の年をむかへてわか門の　　松井玉身
　竹も嬉しきふしやそふらむ
二句自他違へりむかへてトスヘシ

○わか友と植つる竹も年立し　本間光義
地　けさはみとりのそふ心ちする

○新らしき年の初風吹まゝに　諏訪忠元
人　なひきとめたる窓のくれ竹

禽獸の言行

田端の隱居

愚なる人ばかりの中に、少しくかしこく、才あり、學を知り、しきしまの道をわきまへつとて、大歌人、大文學者の如く、高くとまり、いたくほこるあり。之を鳥なき里の蝙蝠と云ふ。又莊子が齊物論の中に、朝三と云ふ事あり、何をか朝三と云ふ、曰く狙公に芧を賦するに、曰く朝三つにして、くれに四つにせんと、衆狙、皆怒る、しからば朝四つにして、暮に三つにせんと、狙公みなよろこぶと。狙公は猿の事なり、芧は山栗の事なり。其の與ふる數は同じきを、その、早く、多く與へらるゝをよろこぶ。人にもかやうのものあり。さる行ひを稱して朝三と云ひ、その人を呼びて狙公と云ふ。おろかなる事どもなり。うたがひ深き者を夜の狗とす。誰を見ても、あやしきものとしてはゆるなり。

驢馬と云ふ馬は、形ちいさく、力もにぶくして、小兒を乘するに適するものなるが、此の毛物は、性質、いたく頑固のものにて、もし己の意に適はざる事あれば、鞭も、轡も、之を動かすこと能はず。其の決心のさまむしろ寸々に裂かるゝも、不當の指揮に從はじと云ふに似たり。人にも、又頑固強情のもの多し。而して家畜の頑固なる心を起すは、大抵主人の殘酷なるによる、馬は、尤も善良なるものなれども、幼きとき、不當の取扱を受くれば、多くは、頑固、不良に變ずるものぞと云ふ。人もまた、性質にもあれど、幼きとき、

また母の底意知わろきしもとなどをうけて、横意知をつよからしむる等あり。心すべき事にこそ。

はゝその露

はゝそ

世の博學の士と云はるゝもの、博く學を見聞したるものなり。有識の人と云ふも、また、ひろくむかし今の事を見つ、聞きつ、識りつしたるものなり。人は何事もひろく見、ひろく聞き、ひろく考みずば、かしこき人となる事はかたかるべし。性質かしこき人と云へども、博く見聞せずば、いたづらに小才子にとゞまらんのみ、まして、尋常の人をや、殊に女子は、男子より識量のせまき事、古へよりの依傳となりをれり。されば、徃々、理、不理を介しあやまり、あやまりても、それにて女子は足れりとす。これ大なるあやまりなり。女子、理をわきまへずば、人の妻となりて、夫を助くる能はず。母となりて、子を教育する能はず。一は以て十につもり、十人より百人、百人より千人、四百萬の同胞たる國家の女子に、さやうのもの多くては、世の害となる事少なからず。女子よ、有益の女子たらんと思ふ女子は、尤も道を知り、理を介し、博く世を考みずばあるべからず。而して、女子は、はやく人に嫁するものなり。嫁しては、徃々書の道を捨てずばならぬ事あり。故に、はやく書をよみ、百事をさとりわかずばあるべからず。今や、文明の世の中、かゝる事云はんも、おくれたる事ながら、なには元のよしあしとを云はず、雪のあしたのおもしろき事、かすを食ひ、水をのみたらん如き味なき事をもとりませて、嬢だちに聞えんと思ひぬ。中には、父上にとく聞かれたる事、母君の語られし事、書にて見そなはせし事々の多からんも知らねど、しづのをだまき、たゞくりかへし聞きてよと、はゝそぶりてものすも、我ながらおこなりや。

板倉周防の守宗重と云へば、世に公平有徳の士たる事



は、誰れも知ろしめす所ならん。此の人、未だ若く、幕府にて、お小姓をつとめをりしときの事なり。あゝる年は將軍の御供して、京都へ上ぼらんとの事、あらかじめ聞えしかば御供の仕度、とくよりそろへんものとて、父伊賀守が京都に居ける、その家老の許へ、旅のものさま〴〵とりそろへんよしを、はやく云ひやりぬ。流石は、若き心に、その物どもをとりそろへて送られん事をゆびをりて數へつゝ、今日は明日はと首をのべて待たるゝに、何としてとゞこふりけん、春もむつきのはじめに云ひやりしに、花も散り、鳥も去れど一色も來らず。此のおとないてそとて、夜半の戸ぼそあくれど、また水鶏の叩くにてありけり。はては、ひむり行き、雁も來りはてぬれど、軒端におつるものもなし。今は腹立れて、如何にか

しつる。來春の御供の仕度、今春より云ひやりしに、今に一色もまかり下らず候事、あまりに不屆の事に候、はやく品々をとりそろへて下すべきよし、きびしく催促しけるに、神無月の末になりて、やう〳〵荷物一箇下りたり。周防守の家老どもは、いたくよろこびて、とるより、早く、御前に持ち出で、只今京都より、やう〳〵御荷物一箇下りたるよし披露せしに、宗重、之を見て、一箇とは甚だ小分の事なり。いかやうの物ぞ、六尺四方ばかりもあるべき四角なるものぞと、何はとも、之れへもちまゐれとあるに、近侍兩人して、傍ら近う持ち出しを見られ、何とも合點の行かぬもの、開らき見よと申付くれば、近侍二人して明けけるに、中には、大きなる竹の小笠の一がいばかりなるが、丁寧に包みありたるなり。家老近侍、之を見て、たゞ、あきれて物も云はぬを、宗重はひとり合點したる如く、ほゝ笑み、下げよと申されたり、折りふし、谷三助と云ふ儒者居合せけるが、之を見て、いぶかしく思ひ、そも、此の御笠は、何の御用に立ち候ものにて候やと尋ねけるに、周防の守しづかに申さるゝやう、明年の御上洛の御供の支度ものをば、此の春より、京都なる、父が役人どもの中に申遣はしたに、今以て一色も下さず候へば、早早さし下すべきよし叱りやり候ひしに、之は、父伊賀の守が、さし圖致してつかはし候、ものと相見え申候とあるに、三助いよ〳〵心得がたく、御上洛の御支度にかようのもの、何の御用、三助には合點まゐらず候と申せば、何の笠を着て上を見ぬやうにせよといふ事に候らんとて、うち笑はれけるとなり。親も親、子も子なりけりと、三助いたく感じて、人に語りしが書に殘りをるまゝをなん。

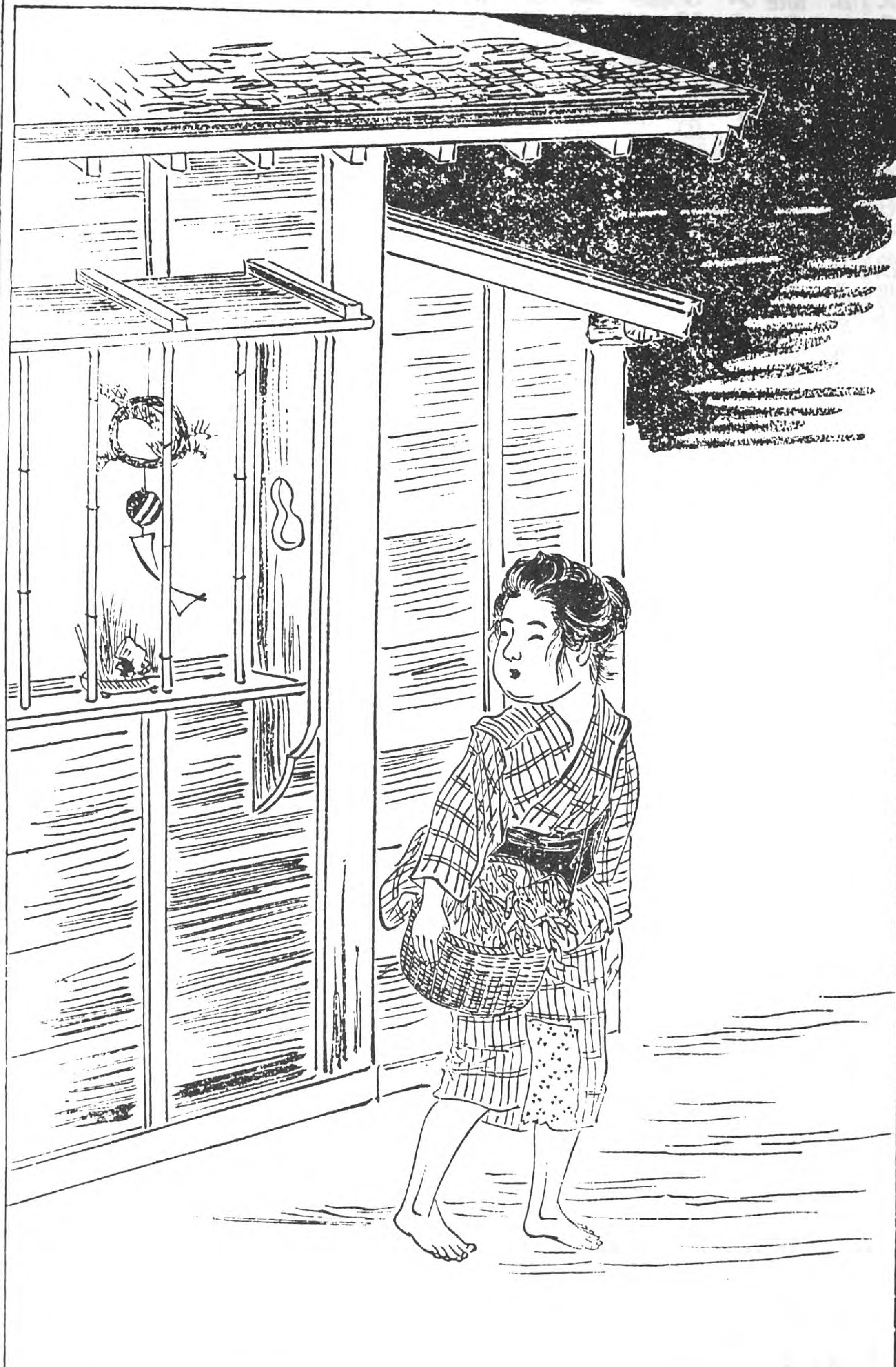
張合（九）

白魚女史

側隱の愛は消えやすきものか、浪男、文代をあはれと

も、いとをしとも、たえて思はずなりぬ。相思はぬ人が思ふ人か、思ひそめし、其の人を思ふ心は、いよ〳〵しげく、たゞすも甲斐なきむかしと知りつゝ、其の人の前をたゞよへど、人は奥深く居て、己は又何となふ心とがめて、たゝずみもえせず。かやうの事は大丈夫のなす事ならず。あはれ、人は思ひ〳〵にもあれ、思はざりしに、おのれ、今は是非なしとそゞろあるきすれど、心はとかくよりかへり、よりかへりては本の心にむすばれ、むすぼゝれて、又外へ出るも者うくなり。文友會よ、宴遊會よ、團欒會、茶話會よと出席をうながさるゝも、遂に出でし事なく、たのしかりし夜もうき世とのみなり。流石にのぞみし青雲も、今はのぞまん張合も、力もぬけて、たゞひとり書ならぬ思ひになやむを、男らしくあらずと、父怒り、母さとし、自からも心叱咤すれど、心の駒は狂ひつ、迷ひつ。

洋行がへりの人は何處へも顔を出すを、君は、此の頃は如何して、さやうに引きこもりがちにや、何か、大著作でもやらんとの心かね、それならばめでたい事だが、でー、今日は文會の創設、君に是非たのみたい事業があるのだ、今日のみは、强ひて駕をまげ給へ。君、白川君。ヲーと云ひ給へ。そして四時より林君の家に、きつとぞ、何、もうお茶もビールも入らぬ。今日はゆつくりしてをられぬ。まだ君のやうに勿体ぶるものが、二三人あれど、まはつて來ねばならぬ。とかく少し大人になると、勿体ぶつていかんよ、小使がほねがおれてさとたはふれながら、二三人の親友、白川に承諾せさせつゝ立ち去りぬ。林と云ふこそ浪男が、なみ〳〵ならず思ひし人の家なり。何となうおもはゆくもあれど、またなづかしくもあり。とにかくに承諾せし事、四時におくれず、立ち出でゝ、至れば、人も大方あつまりおれり、此の家は好事家、家も壯大なれば、壁もふすまも好みをきはめたり。殊に今日、めづらしくかけたる雪月花三對の幅、意匠も、筆ぶりもめでたきに、浪男、思はず眼を注げば、林愛仙の落欵あり。林愛仙、愛



仙と心に稱ふる、傍らの人も眼とまりてや、之は、御令妹の作にやと云ふを、しかなり。之は京都の展覽會にて等賞をさへとられたるもの、林君、今度、御令妹に是非願ひたきものなりと答へにつゞけて、己が願ひを云ふ人あり。滿座一同に眼を注ぎて感賞の聲は、一同の口より百出したり。浪男が思ひ至る所は如何に、さらぬだによみする人、浪男は、なみ／＼ならぬ感歎、いつぞや、之れのみは師にほめられたるものとて、父の許に送りこしたる文代が、初音などとは、天と地、月とすつぽんの差の如く、たう底そゞにもつかぬものと思はれ、ます／＼毛羽を生じしが、いつか、其の會も終へ、歸らんとせし折り、ゆくりなくも、其の人に逢ひたり。むかしの思ひを聞きたゞさまほしと思ひし浪男、逢ふては中／＼に言葉も出でず。一禮をほどこせしのみ、顔も姿も、たゞほかげに、おぼろに見しのみ、人もただいんぎんに禮をせしばかり、うちとけぬ色はむかしにまされど、今日も浪男、其の人のいへばへにいはぬ色を、己が思ひと一つ思ひに何となくくみたり、おぼろげにうつりし影の次第／＼にあきらかになりきて、高く結びたる丸わげに、いたく品を上ぼらせたるげ、あはれ、大丈夫、思ふて甲斐なき思ひはせじもや思ひ去らん、思ひ捨てんと眼をとづれど、なづかしき影うつり、耳はふさげど、ゆかしき聲の聞えて、わりなき思ひに、又や思ひしづみぬ、一年も二年も。

もういらぬ。さやうの子は用らぬ。勝手に思へ、勝手にしづめ、女故に思ひしづんで土塊となるが、大丈夫たるもの、本望ならん、女なら松良小夜姫と歌はれやうが、男は何ぞ、たゞけ石か、のろ石か、實に口惜しい、さやうの子を持つた、己れも口惜しい、はやく腹でもかつ割いてしまへ、さやうの者に限つて、腹も美事には切れまいと慈愛あまつての叱咤、そちも、女故に命を終り、腹を切りやぶるやうのものでもあるまいなぞ母のいましめ、父母に對してもはづかしと、浪男、みづから心をやり、わざとたはふれ興ずれど、何とな

く狂せる如くなり。あはれ、文代は如何に、愛されよ、思はれよと云はれける人には思はれず。くやしき恥かしき身、いつまで人にありと思はれんよりは、一層忘られんこそ、せめてもの女の意知、もろこしに共に行けとはよき機、之も父が、草葉のかげに導き給ふ事か、嘸や口惜しき子におぼしめしてならん、慈愛ふかき叔父叔母に告げずして行くは、すまねど、いとまを乞ふては、やらぬ、行くな、など面倒なるべし。とてもかくても報ひ難き御恩、かへすは七生の後、ゆるさせ給へと心にわびつゝ、はや明日出立と云ふ日になりて、文字も簡單に、

海山のもろこしに亘りて、異なる花を見んとの師の心、妾も共に仰せのまゝに、只今出で立ち申候。事急になり候へば御いとまごひも申上げず候。歸りの程は二年ののちなり候や、四年五年に亘り候や定まり申さず。疎漏のもの、其の間御安否御伺ひも定めしかげ候はんとあらかじめ存じ候。何とぞ御身をいとはせ給ひて、松のよはいを保せ給ひ、名のり出んさ月には、おん怒りをとゞめさせ給ひて、御目もじを願ひ上げまゐらせかしこ

としたゝめれきつゝ、出立の行き路にさし出し、叔父叔母をおどろかせ、侍婢をしからせしのみ、誠におとづれもせず。三年を赴ゆるまでも。

（未完）



林新樹　　東久世通禧

のこりなく夏のけしきに成にけり
片山はやしみつゑさしつゝ

石川丈山　　前田利嗣

渡らしのそのことのはに知れけり
せみの小かはのきよき心は

夏月　　黒田長知

宵々にすゝしきつきのもりくれは
われたる宿そなつはよろしき

避暑　長岡護美

隅田かはつきにすゝみてこく舟は
ひとはの秋にさきたちにけり

倭姫命　宮地巖夫

神かせのいすゝのみやを常みやと
この姫みこそいつきそめたる

燭影映水　北郷久政

影うつるきしの火かけに角田かは
なかすの葦のみゑわたるかは

螢　植松有經

夏かはのみきはの眞菅かりつらん
かけわらはにもとふほたる哉

千代野尼　大口鯛二

桶のうちにやとらすなりし月影は
きみかこゝろの水にすみけん

徳川光圀卿　遠山英一

ふみの上にたてしいさをは小筑波の
山よりたかくあふかれにけり

澗底螢　岩崎勝從

をちこちに影もみたれてたに川の
水すちしるくとふほたる哉

夏の日よめる　足立正枝

大路ゆく人もたえたる日さかりに
氷賣る子の聲のあつけさ

蝸牛　赤松景福

垣根はふかたつぶりすら家はあり
家なき人は是を見よかし

螢　宇井正夫

まねく袖の風にみだれて飛ぶほたる
おもはぬかたになびくなりけり

繼母　伊東祐賢

へたてなく育て行なは產の子の

こゝろに優るものとこそしれ

賴家公のはかにて　大畑弘國

岩ま行く水のかへらぬなげきをぞ
そへてや人の袖ぬらすらむ

老行述懷　木庭芳香

なからふるかひはありけりありそ海に
よる年波は身にかつげども

海邊子規　三輪義方

いそやまの志げみを出てほとゝぎす
こゑはれやかに海づらになく

紫陽花　柴田靜榮

よの人のこゝろのいろやそめつらん
をり／＼かはるちさゐのはな

夏山家　石川彦太郎

うきよをもよそなるなつの山さとを
あつさはかりと思ひけるかな

國旗　近衛貞子

天さかるひなのわらやも日の御旗
かゝげて歌ふよろつ代のこゑ

烟草　蜂須賀隨子

かけてほす賤か軒はのけふりくさ
雲井にまてもたちやのほらん

夏夜雨　西四辻茂子

かせわたる葉ひろ柏にをとたてゝ
雨のふる夜そすゝしかりける

芍藥　小池道子

深みくさ見ぬ先ならはもてはやす
ひと多からんしやくやくの花

道臣命　北島以登

君かため道ひらかんとやまも岩も
つらぬきたるはをことなり鳧

雨後新樹　大谷章子

雨はるゝそのふの木々の若みどり
また一しほのいろそひにけり

船納涼　佐藤艶子

手にとりし氷もしたにおくはけり
　なつを忘れしふねのうちかな

朝梅雨　坂田泰子

起いてゝ朝戸あくれは今日もまた
　のきはしめりて梅雨のふる

夏露　田中竹子

置つゆにぬるゝもしらす月をみて
　しはふか上にすゝみふかしぬ

水鷄　宮地琴與子

いつはりの音つれなりと知なから
　水鷄なく夜はねられさりけり

夏月　東玉子

夏の夜のたゝずむ袖に風過て
　光も清しはしのうへの月

長歌

詠淸軍歌并反歌　赤松景福

遠けれどわは行見ねど　其國に行見し人の　具らにも
語りいへらく　漢國の軍のさまは　さしたつる旗はと
いへは　虎の旗龍の旗あり　取はける大刀はといへは
支那のたち高麗のたちあり　楯なめて際まもらひ　船
なめてうみがせき居る　こゝだくのつはものもあり
こきだくのかりても有れど　ひたぶるに昔の人の　跡
にのみよそり泥みて　今の世の道し知らねど　謀りご
つ事は違ひて　戰へど得たゝかはず　守らへど常破ら
れぬ　仇におひて戰ふ道の　かくの如つたなきのみか
其軍高き　いやしきこと〳〵に命惜みて　君の爲國の
爲をは　つゆも思はず

反歌

一月に三度かたむといにしへに
　歌ひし事は年にもあらず

執る弓の象の弭も何せむに
　國のもとすゑしらぬくにひと



雜報

●華族女學校行啓　皇后陛下には去月十八日午前九時御出門、華族女學校生徒卒業證書授與式に行啓あらせられ御座の間に於て、職員一同に拜謁を賜ひ、畢りて細川校長の御先導にて、製作品陳列室に入せ玉ひ、生徒の製作せる繪畫、裁縫品など、一々御覧遊ばされ、十時式場に臨御あらせらる、玉座は式場の正面にしつらへ奉り、其兩側には、美麗なる花氷をかざり付け周圍には紫色に御紋章ある幔幕を張り廻し、且つ旭櫻兩旗を交叉し、式場の四圍には紅白、段々の幕を引廻せり。生徒全員　陛下御製の金剛石、水は器の唱歌を奏し、終りて校長は、全科卒業生に卒業證書及び中小學各級生徒總代に證書を授與す。此間式部職樂隊は絶えず奏樂せり。夫より校長の式辭、卒業生總代井上梅子の謝辭あり。引續き豊住とし、淺野幸子のピアノ連彈本多和子鶴田ふじ、守永久野箏の合奏、生徒全員の秋の宮居の唱歌あり。畢りて　皇后陛下、御座の間に入御あらせられ、暫時御休憩の後、十一時還啓あらせらる小松宮殿下、山階宮、華頂宮、兩殿下、御息所、伏見宮女王殿下にも臨校あそばされぬ、卒業生姓名左の如し

石坂章子、本多和子、豊住とし、香川靜子、醍醐信子、高階幹子、高島酉子、鶴田ふじ子、井上梅子、幡田麻績、寺内さは、阿部歌子木内こう、清岡新子、白峰さよ、守永ひさ、須藤はな

右全科卒業生

寺崎正代子、淺野幸子

右別科卒業生

●東宮殿下日光行啓　殿下の御避暑遊ばされんとの事は、かねて本誌に報じたる所なるが、過る二十八日午前六時十分、御出門、同七時、上野發、別仕立滊車にて、日光田母澤御用邸へ行啓、當分、同所に御滯留あらせらるべき旨、仰出されたり。日光御着は十時五十分にして、供奉員は左の如し。

東宮武官長男爵黒田久孝、東宮太夫侯爵中山孝麿、東宮侍講本居豊

頌、東宮侍醫三島毅、東宮侍從長子爵高辻修長、東宮亮足立正聲、侍醫西郷吉義、東宮武官齋藤邦賢、同田内三吉、東宮侍醫三田守眞、侍醫片山芳林、東宮武官川畑平吉、侍醫伊勢錠五郎、東宮侍從男爵多久乾一郎、東宮御用掛男爵名和長憲、侍醫池邊棟三郎、東宮侍從子爵大迫貞武、東宮武官伯爵清水谷實英、同侍從鍋島精次郎、同職出仕北小路清、同溝江田孝吉、同甘露寺受長、同綾部光熙、子爵土屋正直、同男爵黒田長和、

其の後、御同邸別室に於て溝部知事、有川警部長、山本輪王寺、門跡、中山東照宮宮司、園田二荒山宮司白倉上都賀郡長等に御晝餐を賜ひ、特に溝部知事を御前に召させられ、日光町教育衞生土木費として金圓を下賜せらる。嗚呼いともかしこき思召ならずやは。

●忠婢賞狀を受く　牛込區神樂町一丁目十一番地蕎麥屋翁庵事會田さくなるもの、ことし四十二歳になりしが、本年二月以來乳部の腫物を煩ひ、そを療治するに當り、其の患部へ埋め合はす肉の事につき苦慮一方ならざりし折柄、同家の下婢なる香川縣中郡江奈井村仲町香川順吉長女香川とく子が、斯くと聞きて思ふやう、主人の病しいえなんには、己がみは何かいとはんと、終に去月二日、其の股肉さきて、忠義を盡せりと、其の所爲に就いては、かゝる世の人節義を顧みざる時に當りてはいとも有りかたきことゝて、皆人聞き傳へて、偏に感嘆の外なかりしが、今回大日本積德會にては、總會の決議を以つて、外神田なる福田亭の同例會へ、右とく子を呼び出し、左記の賞狀に金圓を添へ、さし贈りたりといふ。

賞狀

東京牛込區神樂町十番地會田きく方寄留

香川さく

於戯、香川さく子孃は、天資至誠從順にして、會田氏に履任する事、茲に半年餘、常に孜々さして、其任命を全ふす、會々雇主乳房の惡腫に罹り、醫に就き診を求むるに、曰く、速かに切除せざれば命さ、共に終らんのみ然れども手術を施すの時創面を被覆するに他人の皮肉方寸餘を要す。之なければ手術に就くも、其詮なしさ、茲に於て雇主日夜苦痛に堪ゆ難きを、怨へ嘗く治療に要する人肉を最近の親族及び、其他の男女に哀求するも、誰れ一人の、之れを應諾するものなし、雇主悵然さして望を失ひ、憂愁措く處を知らす。是時に當て、貴孃主を愛するの心、此態を默視するに忍びす。奮て、自身の肉を割かれんことを請ふ。明治三十一年六月二日順天堂病院に至り。手術臺に登り楽然さして麻醉藥を吸引し、術者をして内股の皮肉を割かしめ、之れを雇主の創面に縫

着せしむ、爾後四十餘日にして主從、共に創部、殆ど癒に、飲食、平に復す於戯貴孃か、會田氏に居る中、新炊の賤事を執り、裁縫、僅かに半歳餘りにして、此義勇の擧をなせしは、實に德行の龜鑑にして、本會の素志に適ふ、故に明治卅二年七月二日積德會總會に於て、全會一致貴孃が、空前の義烈を感歎し、薄か金圓を贈呈し、其美行を表賞すること爾り

明治三十二年七月十五日　大日本積德會

嗚々、至忠なるかな、余この賞狀をよみてなかむにしてそゞろに、汗わゆる心し、豈また感ぜぬもの、よにあらんや、同女は、今年廿七歲なりとなむ、

●七十七翁初めて書を學ぶ　本所區北二葉町十番地の植木職淸水金太郎は、常に壯健にして、今年、既に七十七歲の高齡に達したれど、親族は勿論、知己、又は遠近の人々、金太郎にあやかりたしと扇面、或は奉書、大鷹等の白紙を攜へ、又は傳手を求めて、喜字の揮毫を依賴し來るもの、門に踏至するも、同人は、生れ付職人にて、一字をも學びし事なければ、いの字すら滿足には書き得ねど、殘念ながら衆人の望みに應ずる能はざるより、先日來、俄かに手習を始めたるに勉强の甲斐あり、過日、喜の字祝の砌りとりの子餅に喜の一字を、紅を以て見事に書し、知己親族等に配りたりとぞ。されど心さへあらんには、たとへ、年、少しは老たりとて文よみ、ものかくことのできぬことやはある、されど、己が子等には、幼ときに勵まして、老へてのち不足なきやう、心すべきことにこそ。

●日鐵女子切符發賣掛　官私設鐵道の別なく、乘車切符發賣に際し、乘客の感情を害すること、往々あるは、監督者の注意足らざるに由るも、亦、一には、男子をして、斯る單一無造作の業務に從はしむるより、自然粗暴不親切を見るに至りしならんとの考へより、日鐵運輸課長は、上野驛に限り、試みの爲め切符發賣掛に、女子を用えんとて、目下、其研究中なるが、右は電話交換と同じく女子の職業として、適當なるのみならず、會社にても男子を使ふよりは利益あり。獨逸にては、既に數年前より、女子を使用して、好成績を得つゝありと。日鐵の結果に依り、外官私設共女子を用

ふるに至らんか。

●津田梅子の名譽　同女史が過る頃、英京倫敦に遊びたりしに、彼地の、貴婦人より優待さるゝ事頻にて、一日同女子大學に於て、我國女子が、宗教上文學上社會上等に於る、地位變遷に就て、一場の演説をなしたりしが、喝采いふばかりなく同地に在りての待遇、彌彌篤かりし事を某米國貴婦人が聽き及びて羨む事、大方ならずさしもに、英國の貴婦人が、禮を厚うして、梅子を迎るとは、梅子も、亦凡人にはあらざるべしと思しめされ、畏きわたりにも達し及びて、不日　后皇陛下より拜謁を賜はると漏れ聞ゆ。

●感心の車夫　下谷區金杉上根岸町廿五番地人力車夫吉田善太郎先月十日同區西黒門町にて、十歳許の男の兒が彷徨て居る樣子を見て、不審に思ひ、何所の者かと問ひしに、此子は宮城縣岩城村の漁夫の子で兩親は、暴風の夜、漁に出でし儘行方不明となり、自分は幼年ながら、兩親を索ねんと國を立去り、千葉縣まで來たり、同地の特志者より養育院入を願ふとの書面を貰ひ、東京へ來たりしと話したり、善太郎は、丁度母の命日に當り、憐れな子に逢ふたのだからと、自分の車に乘せ宅へ連歸り、飯を喫べさせし上、金十錢を遣り、其の小兒を連れて下谷署へ右の趣きを申出でたりとなん。

●妹　鑑　余ひとりの哀れなる友あり、紀伊の國南牟婁郡の人なり。今年二十二歳にて、六たりのはらからあり。曾て伊勢にさまよひし頃、師の許にて、ひとしく長き月日を送りたり。其の間に父の病とて國にかへれり。次て姉をもやまひにかゝり、いつれもかろからぬにてしもしはれこたるやうも見えずとなん、云ひおこしぬ。あはれ、心うの事と思ひゐたりしが、其の後、病人はかはらねどせんすべのあるとて來たりぬ。今年一月つれ〳〵なるまゝに、此の友の家を訪ひき。其のをり、母なる人ものかたりしけるは、父は（友人の）若き時より餘り、なさけふかきに過ぎて、遂に他

人の爲に、家財を失へり。ことに、さい一年より、神經の病にかゝり、今もかくばかりと云ふ間に、奥の方にてわやしき聲はりわげて、わらねうたなど、わやめけり、何はも云へけるは、引き續きて、長女さへ亦同じ病にかゝれりのこるは今年十五になる女子と三人の小き子のみにはべるかくて、學資はよしある人々に惠まれにたれど、家をさゝへむ事難けれど、いとはひなかりしも、去年呼びもどしたりされど、なたとは學びに、赴かせん事もかたしと明めゐしが、是なる妹(十五の妹)兄君さへ、よき人となりたまはんには内のくるしさ、さびしさはなとていとはむ、いで玉へかし學の海に、勵みたまへよ敎の庭に、學ぶそ國の御爲なる、みがくぞ家の寶なると、いさめはけましければこそ、是も(友人)氣を更めていでね、妾も留めかねつことてその兄妹を見やりつゝ泪ぐみぬ。何はもいへけるは、其の後は近きわたりの農家漁家の所女とうちまじりて、しなどりより、田殖ゑ、まくさかりの手傳、または頭に荷を戴きなどしてそこはかの、代を得、雨ふり風すさぶ折りは内にて機織、たちぬひなどして、兄の小使に送り。のこりは纔かをもて、弟妹を日頃學校にかよはせり。また兄の出歸りには、自ら荷をさゝけて、木の本とて、一里はかりの所に送り迎へすと、こま〳〵にかたりぬ。

さて夜もふけぬれば床を乞ひたり、此處は音に聞くだにれそろしき熊野うらわにて、家は、里を少しはなれたる土産の森の常木しげれるなかにわり。多の更けゆくまゝに、岸うち浪の音たか〳〵に、蜑のさはひて舟よする聲さたかに、雨さへふりそゝぎ、さらぬだに心ならぬに壁の外近くすさまじく狐なきさけび、ふたふためく足音さへもさたかにて、其の愁しさたとしへなかりき。やがて、ふすまうちかちきて、身をもまろめて思ふやう、一夜を明し程だにかくむかり、いかに住みなれたりとてかく、れのこも魂さえなんばかりなるに、物くるをしき病人、さてはをさな子とを養ひても兄にものまなびさせんとするした心こそ、いとけなげな

れ。世には何ふそくなくおはしたてられ學のまとにさへ日をくらすながらおこたりもす、はては道ならぬ事までもたくむ女もあるめり。おりあらむ、世に示して此らの人の戒ともせまほしく思ひしが、今こゝに餘白を得てかきつらねつ、よまん姫だち心して見られよかし。

●めぐろにあそぶ　遁世、決して願ふべからず、人事、決して厭ふべからず、世事、日々繁雜を極め、人事、既に多端なり。是れを去るは不忠なり。是れを厭はゝ不義なり。然れども、山陂に、一庵を結び、溪上に、小舍を構ひ、所謂浩然の氣なるものを養ひ、他日大になすあるは、有志に切望する所なり。然れども、此はなべての人には難きふしも有るべし。されど大都の如き人の雜沓する地は、時に山寺を訪ひ、或は、瀧の流を尋ぬる事どもは高尙の精神を養ふに付きては、いとも、必用なる樂ならむ。余過る十六日、同じともから、六たり五たりとめぐろにあそぶ。今日はしも、別けての熱さにて、井戸の清水も沸きたちぬべく思はれたり。されば瀧邊は靜からんと、いふせき滊車に、汗おしのごひつゝうちのれり。飛び行く車の走るより心のこまの何は速く、いそく心をうちとめて、品川沖をながむれど、臺場見こしに眞帆片帆、追風に孕ませられて、行きかう樣は、げに心ちよげなれど、窓にあらそくる風は、頭の髮をさかだてゝ、髯なんある人は、用意せねば、とりも去られなむと、人の事なから心もとなかりき、さわ、日頃の熱さ、何處行きけむと袖のわたり、かいまくり見れど、汗なかれしはだは、いつか粟ふき出でゝ、口もわなゝくばかりなり。さて品川停車場をすぎたり。是よりは靑葉さしこもりて、車のゆくまゝに山は己を廻る心して、さりし熱さの、またせめ來れり。またもや瀧邊に心はせゆきつ、胸せきあけ、心ちわしかりし頃、くらきところに來れりと見れど、はからずも、滊車は、トンネル過ぎて止まりたり。あまりのうれしさに、走り出れば、いそきまぎれて、

何よりの帽をわすれたり。つれに云はゞ笑ぐさにせられんも口惜しと、さわがず、獨り、むれくる人を押し分て、今居し所にとびつけど、あはや、くるまはゆるぎそめ、あはてふためき、あれよ〳〵と呼へど內なる人取りおとしぬ。得たり。切付渡し所やいづれ。と見れど、かさ、脊をうつばかり、高きにあり。喘ぎ喘ぎ、天登り去る心ちに登りけれど、友ひとり、立ちもどり、何道草とりけむなどやうの面ざせして、よびにきぬ、それよりうちつれ立ちて、漸し行けど、綠こもれる中より、赤色の雲貫くばかり、拔き出でたるものあり。先輩かなたを指して、かしこは、火藥製造所なりとて、其のものし方の、かしこきことゞも說きおかしなどしつゝ、いよ〳〵不動が瀧の前に來たりぬ。此に比翼塚云々とかける高札あり。友の少きが、是は如何なる由緒ぞと、尋ぬれば、ひよくは、雛の轉語なりなど友のおぼろがしなるいとをかし。さて瀧にいれと進むれど、衣かいやり三人ばかり、おまたの中に入りぬ。瀧は、一丈ばかりの細流れ二つありて、おそろしげなる龍の口より湧きいでぬ、さて數多の裸なる人の內に、驗者だちたるもの、白に梵字かきたる衣きたるに、締めこみし、犢鼻根を、むり〳〵にはぎとらるゝあり、なにしけむとまゆひそめてうちまもりゐれど、驗者は、たふとげに、其を推いたゞき、ときめきと梵字をさくり、是れ見に面にとり出では彼の男、後ざまに打ちむき、笑ひたゝめる、さて、その犢鼻根を瀧壺にて、さと洗ぎて、帶となし、やがて、瀧のもとにうたれゐたる人のがり行きて、不動經にやわらむいみじうせみこゑに祈りたつるは、かくても何ばかりの功德やありなむと、いみじうかたはらいたきまでをかしかりけり。さて、此の瀧邊も、また、石疊、かさね〳〵に、人、多くきて、瀧の水はつめたけれど、よからねば、更に靜なる所をとめて出でぬ。友のひとり、去年の夏知りそめし寺ありぬとて、側の店屋に立ちよりぬ。おのれらそゞろゆきしぬ。少し遲けれど、己、流のはたにまつて、今やと後を見

ゐれど、先生、ゑまい顏にて、寶いれけん、袋と見るまで、福の神の姿に、菓子包、二つか丶ゐ來りぬ、己一つ分けたり。さて、とも〳〵行くに、其のさまいともおかしかりけり。やがて、行人坂てふもとなる寺に來りたり、此の寺は、大圓寺とて、大黑のありと、聞けど、今の事ども思ひつ丶けて、一入をかしかりけり。朝かほのさくころ、其のゆかりによりて知り始めたりとか、されど「人はいざ心も知らず」とにはわらで、人のみは確かなれども、花は去年にはおとりたりとなん。和僧、珍しげに、己らまで、引きよびいれて、いろ〳〵佛くさき話もいてぬ。とくより、漏れ落ちたりし夕立、今は、いみじくなりぬ。庭の彼方にかひろぎ立るかへでの木の雫庭をうちのくどかり、桐の葉の上の青小蛙、聲かま〳〵しく鳴き出でぬ、雛のもとより蟾蛙はへ出でぬ。髮そりし女も出でぬ。何か云ふにと見れど、此處は夕日が岡となむ申し、晴れたる秋の日は富士もさたかに見ゆるなり。先づ是れに何かと紙さしいだしぬ。つれの一人り筆とりて

　岡の名の夕日は庭にさしながら
　　一むらすぐる夕立のあめ

と、かきつられねどいと興がりたり、是より寺の事など詳しうたつねれば、傳敎太師の開山とか云ひて、古き卷物などとり出で丶、是は何新王の云々、是は菅公云く、其のふくさは家康の衣のはしの云々とて示したり。それかあらぬか、知らねども、珍らしげに見濟したり。又、友經文の端書をとりひろげて、此の『功德を以て一切衆生を濟度す』てふ節おもしろしなどいはれたり。さて、雨も小ぶりになりぬ。茶もあいぬ。持行きし袋の内も空しくなりぬ。すゝきのそばつあるをかきわけて、裏手に行き見れど、尼、五百羅漢にあないしるとて、けか來たりぬ。友がきもきたりぬ。さて、其のらかんを見れど、丈ヶ尺餘の、石作りなりける。其のさま、色々にて、出齒あり、眇あり、頸かたけたるありていともをかしきかぎりなり。中には心地よげに破れ

たるも、數多あり。尼、袖の半くをはらひつゝ、濫り聲に繕をせまほしなどわなゝぐ、己れ思ふやう、さやなことせんよりは、彼の坂の階橋にもせむ、多くの人の功徳ともなりなむ、是や雜漢の、本色ならめと思へとさすかに漏しかねて、腹ふくらしつ。さて本堂に入り見れば、彌陀はつた、釋迦もか、數多おはしぬ、例ならむ、臀にても手向けんものを、今日は夕立をも凌ぎし事なれど、彼の始皇の無慈悲すら雨やどりせし松を五太夫に封ずと云ふ事もあれど、さのみはえいましめざりき。さはいへ、岡の名の夕日もくれはてたらん。雨いとはげしくなるに、友の一人に車に乘るべき時や來ぬといはれては長く靜かにやすらひ度しと思へど、遁世の心など起さむ、わしかりなむと、かさなどかりて、心もとなく立ち出て車をまちぬ。さて車のなかに、獨り思へは千々に面白きなかにはや新橋停車場につきたり。さて、此處にはのゝしる節のみ書きたれど、其の間にはえも云はれぬ興ありたり。やよ遊ぶべし閑靜の青山。行くべからず、非人雜交の地。

●産婆規則

第一條　産婆試驗に合格し、年齢滿二十歳以上の女子にして、産婆名簿に登録を受けたる者に非ざれば産婆の業を營むことを得ず

第二條　産婆試驗は、地方長官、之を擧行す

第三條　一箇年以上産婆の學術を修業したる者に非ざれば、産婆試驗を受くることを得ず

第四條　産婆名簿は、地方長官、之を管理す

産婆名簿に登録を受けんとする者は、産婆試驗合格證書を添へ、地方長官に願出ずべし

産婆名簿の登録事項に異動を生じたるときは、二十日以内に産婆名簿の訂正を願出づべし

産婆名簿の登録事項は内務大臣、之を定む

第五條　産婆其住所を移したる長官管轄地方廳を異にするときは直に前の管轄地方廳に産婆名簿取消の登録を願出で、後の管轄地方廳に産婆名簿の登録を願出づへし

前項の登録換をなさゞる者は、産婆の業務をなすことを得ず

第六條　産婆廢業したるときは、二十日以内に地方長官に産婆名簿取消の登録を願出べし。

産婆失踪、又は死亡したるときは戸籍法による屆出義務者より、二十日以内に地方長官に産婆名簿取消の登録を願出べし

第七條　産婆は姙婦産婦褥婦、又は胎兒、生兒に異常ありと認むるときは醫師の診療を請はしむべし。自、其處置をなすことを得ず。

但臨時救急の手當は、此限に在らす

第八條　產婆は姙婦產婦褥婦、又は胎兒、生兒に對し、外科手術を行ひ、產科器械を用ゐ藥品を投與し、又は、之か指示をなすことを得す。但し消毒を行ひ、臍帶を切り、灌腸を施すの類は、此の限に在らす

第九條　產婆は產婆名簿に登錄を受けざる者に、姙婦產婦褥婦、又は胎兒生兒の取扱を專任することを得す

第十條　產婆にして墮胎の罪、其他業務に關する罪、又は禁錮以上の刑に處せらるべき罪を犯したるときは、地方長官は產婆の業を禁止し、又は一年以內、之を停止することを得　產婆名簿登錄前に犯したる罪に付ても同し

第十一條　試驗に關する規程に違背したる者あるときは、其試驗を無効とすることを得、若已に登錄を受けたるときは、其登錄を取消すことを得

第十二條　地方長官は、產婆の業を禁止し、又は停止したる後　本人の行狀により、其禁止、又は停止を解除することを得

第十三條　產婆試驗を受けんとする者、又は產婆名簿に登錄を願出つる者にして、試驗、又は登錄の以前墮胎の罪、其他業務に關する罪、禁錮以上の刑に處せらるへき罪を犯したる者、又は試驗に關する規程に違背したる者なるときは試驗、又は登錄を許可せさることを得

第十四條　產婆にして三箇年間、其業を營まざるとき、又は瘋癲、白痴、不具、癈疾となり、其業を營むに堪へすと認むるときは、地方長官は產婆名簿の登錄を取消すことを得

第十五條　產婆名簿の登錄、登錄の取消主要なる登錄事項の訂正、並、產婆業の禁止、又は停止、及、其、解除は地方長官、之を告示すへし

第十六條　左に揭くる者は、五十圓以下の罰金に處す

一　產婆名簿に登錄を受けすして、產婆の業務をなしたる者

二　產婆名簿の登錄を取消されたる後、產婆の業務をなしたる者

三　產婆の業を禁止、又は停止せられたる後、產婆の業務をなしたる者

四　第三條に關し虛僞の證明、又は陳述をなしたる者

五　第七條、乃至、第九條に違背したる者

第十七條　第四條、第三項、第五條、第二項、第六條に違背したる者は科料に處す

附則

第十八條　本令施行以前、內務省、又は地方廳より產婆の免狀、又は鑑札を受け、現に、其業を營む者は、本令施行後、六ヶ月以內に地方長官に願出て產婆名簿に登錄を受くることを得

第十九條　地方長官は產婆に乏しき地に限り當分の內出願者の履歷に依り、業務の地域、及五ヶ年以內の期限を定め、產婆の業を免許することを得

前項の免許を受けたる者は、產婆に準し本令を適用す、但產婆名簿に登錄する限に在らす、

第二十條　本令は、明治三十二年十月一日より、之を施行す

●高等師範校の講習生　各師範、中學、女子高等の

諸學校教員中より、夏期講習生として上京せし人々は、文部省の命に依り、高等師範學校附屬小學校に參集したるに、澤柳局長列席して、講習會開會の辭を述べ、夫より、各自講習場に出で、講習に從へり。開期は三週間なりと聞く。

●女子高等師範卒業證書授與式　去月、十一日は、女子高等師範學校に於て、家事專修科第一回卒業證書授與式にて、さかんなる典をあげられ、社員も招待により、其の席に連なるを得たり。此に、其の次第、及び、卒業生の名、又生徒の謝辭をあげて、讀者に示さんとす。

家事專修科卒業證書授與式次第

午前八時　家事專修科生、本校生徒　職員　來賓、入場

一唱歌　皇后陛下御歌「みがゝずば」總員起立
おもへばはてなき

二卒業證書授與

三校長告辭

四文部次官祝辭

五家事專修科卒業生總代謝辭

六唱歌　『はてしなき』

右了て來賓、職員、生徒、退場

家事專修科第一回卒業生氏名（イロハ）順

東京府士族	石垣はる
宮城縣士族	石田むらひ
東京府平民	本多蝶子
東京府士族	德富ふぢ
岩手縣士族	沼宮内たみ
鳥取縣士族	岡村たか
新潟縣士族	岡村なみ
秋田縣士族	川井ひさ
高知縣士族	横山清
香川縣士族	吉本うた
東京府士族	田原やへ
和歌山縣士族	曾野菊江
石川縣士族	宇野むつ
福岡縣士族	井上なさめ
愛媛縣士族	大平みち
長野縣士族	草間さだ
鹿兒島縣士族	松下のり
德島縣平民	馬詰たけ
德島縣士族	木下やす
山形縣士族	人見ふみ
東京府平民	瀬下てつ
靜岡縣平民	鈴木きく

謝辭

明けく治る御代の惠みを得て、よろづの道の日に、月に進み行く中にも、女子教育の道の隆盛におもむきたる、いともよろこばしきことにこそ。あはれ、たゞ文字と、理論にのみはしり、必要なる女子の務にうとく、はた、之を、人に教へ授くるわざつたなからば口惜しき限りなるべし。さればにや、本校にて先年、家事專修科生を募集せられぬ。吾等その募りに應じて、この學びの庭に入りしより、早くも、二とせの春秋をおくりむかへ、こゝに卒業證書授與の式につらなることを得て、文部次官閣下、並に校長閣下の、懇なる仰をさへたまりぬ。吾等が榮、何かこれにしかむ。これ、偏に校長閣下をはじめ奉り、諸先生の厚き御いつくしみによるにあらずして何ぞや。あはれ、何にしてか、此の高恩に報いたてまつらむ。いでや、裁ちぬい、割烹をはしめ、家事によれることは、すべて熟練を要することなるを、われらは年頃さつかれる、かたじけなき御教を本として、自今已後、一層、精を勵して、一方には理論の研究怠らず、また、一方には、實地練習をよくつとめ以て、子女教育に、職をづくすべく、はた忍耐と勉強とをもて、波風あらき社會の海を渡らんと期せり。さては、世の人をして、いよいよ女子教育の必用なることをしらしむを得て、本校の吾等家事專修科生を設けれし御趣意にもそふべくやあらむ。よりては鴻恩を報ゆる一端ともなりぬべくやと、こゝに、聊思へるこころを述べて謝辭となし、家事專修科生の一同に代りて、謹みて申す

明治三十二年七月十一日　　鈴木きく

●名古屋高等女學株月蝕觀測の景況

六月廿三日の月蝕は、皆既蝕なれど、全校にては、職員一同、數日前より觀測準備などせられ、又、其の前々日、學校長は、生徒一同を講堂に集め、月蝕に關したる圖を示して、委しく説明せられ、又同校生徒は、必、各自の宅に於て、詳細なる觀測をなし、觀測圖、及び、觀測錄を出すべきことを命ぜられたり。而して、其の當日は卒業生の研究生として在學するもの、及び、本科四年級三十餘名は、同校職員と共に觀測に從事したり。今、其の概略を記さん、職員生徒、共に運動場に、適宜の場所を撰び、机、椅子等を配置し、其の他時計、寒暖計、双眼鏡等を用意して、之を觀測所とせり。蝕するに先ち、學校長より、觀測に關して、注意すべき諸件を告示せられ待つこと暫時にして(九時三十一分)月はかけ初めぬ。當夜は、職員に向て、校長より、分擔を命じ、其の分擔は觀測係、記錄係、圖書係、時計係、寒暖計係、器械係、庶務係等にして、生徒も、之に倣ひて、各自の分擔を定めたり。當夜、天の模樣は、梅

雨中なるにも係らず、前日來の密雲、漸く散じ、清澄鏡の如く、生徒も、凡て、靜粛にして、最もよく、觀測するを得たり。かくして仝く、蝕し終りたるは十時三十二分にして、再び、光り表れ初めたるは、十一時三十二分、仝く、復圓したるは翌日、午前一時五分なりき。其の後皆家にかへりしは一時半頃なりしと云ふ。

●名古屋高等女學校卒業生仝窓會常集會　六月廿五日午前九時より、卒業生仝窓會常集會を、高等女學校内に於て開きしに、來會者は、市守校長を始め、肢吉教諭、外數名の職員、及び、卒業生にして、今、其の概略を記さんに、仝日は、同校講堂を會場に充て、豫定の如く、唱歌、千里の道を唱へ、會務の報告、及び、議事(議案は客員會員の中にて、吉凶ありし時は、如何に處すべきかと云ふ件にして、會員の結婚の時は、三十錢乃至五十錢の物をなして、祝詞を添へ、出産の時は、二十錢乃至三十錢の送り物に、祝詞を添ふることなり。死亡の節は會葬をなし、靈前にて吊詞をよむことに定まり、其の他の細事は、委員に一任し、客員も、之に準じて、臨時に定むることに議決したり)等あり、次に、市守校長より、禮式に關する講話、及び、會員數名の談話等あり。終りに、仝校長たる仝窓會總裁より。卒業生の心得に關し、一場の談話あり、後一仝、唱歌、夏の風を唱へ、會を終りしは正午なりしかば、一仝、休憩室に入り、暫時、休憩午飯を喫し、余興として、客員會員一仝打交り、代言遊び、四人遊び、坐とり等の遊戯をなし、一仝愉快に散會せしは四時すぎなりき。

愛知縣名古屋高等女學校卒業生同窓會々則

第一條　本會は愛知縣名古屋高等女學校卒業生を以て組織し同校教養の恩と同窓の交誼とを永遠に記し併せて互に智識を交換し休戚相助くるを以て目的とす

第二條　本會は愛知縣名古屋高等女學校卒業生同窓會と名づく

第三條　本會の事務所及び會場は愛知縣名古屋高等女學校内に置く

第四條　會員は愛知縣名古屋市高等女學校卒業生に限る

第五條　本會は前任現任を論せず愛知縣名古屋高等女學校に關係ある職員を聘して客員とす

第六條　本會は客員の中より總裁一名を推戴して指揮を仰くものとす

第七條　本會に委員六名を置く

第八條　委員は總裁の命により本會の事務を分擔するものとす

第九條　委員は總集會に於て在名古屋會員より十名の候補者を互撰して總裁に推薦し其候補者中より定員の撰任を請ひ其任期は一ヶ年とす

但し前任の者を再撰するを得當撰者は正當の理由なくして之を辭することを得す

第十條　會員は本會の規則を恪守すべきものとす

第十一條　會員身上の異動は直に之を委員に報告し委員は之を總裁に申告し緊急を要する事項は各會員に報告すべきものとす

第十二條　本會々員にして本會の名譽を汚すものあるときは忠告し

猶從はざるときは衆議の上退會せしむることあるべし

第十三條　集會を分ちて總集會常集會及び臨時會とす

第十四條　總集會は毎年春秋二期に之を開き客員を聘して有益なる演說講話を請ひ併せて規則の修正及び本會に關する重大なる事項を議し親睦會を開きて互に懇親を篤くし歡樂を盡すものとす

第十五條　常集會は毎月一回第四日曜日午前九時より開き客員に有益なる講話を請ひ學術研究をなすものとす

第十六條　臨時會は右の集會の外緊急を要する事項あるときは之を開くものとす

第十七條　本會々費は半ヶ年五十錢とし總集會毎に前納するものとす

但し臨時費を要するときは之を徴集することあるへし

第十八條　本會々員たらんとする人は基本金として金壹圓を本會に納むるものとす

但し基本金は銀行に預け之を保存す

第十九條　本會の委員は毎年一回以上の報告書を調製し本會に關する凡ての事項を記載し會員に配布するものとす

第二十條　本會へ金圓物品を寄附する者あるときは謝狀を送り其姓名を本會の報告書に登載し會員一同に告げ永く高義を存すべし

第二十一條　本會の規則は總集會の決議により之を變更することあるべし

●名古屋高等女學校第四回創立紀念式　六月十六日、愛知縣名古屋高等女學校の創立第四回の紀念日に當るを以て、紀念式を擧行せられしに、同校商議員を初め、卒業生數十名の來賓ありたり。今、其の概況を記さんに、仝日は、仝校講堂に嚴肅なる式場を設け、午前八時より式を始むるや、一仝唱歌君が代を奏し、次に首席教諭より同校沿革文の朗讀あり、之より學校長の式辭あり、次に職員總代の祝詞あり、卒業生總代の祝詞、及び、在校生總代の祝詞あり、次に一仝校歌（仝校は、北一面に練兵場を見、景色絕佳にして、常盤木の間より、遙に金城を望めり、此の光りは生徒の心をして、高尚優美ならしめ、金城と、共に、益々學校の名譽を世界に輝かさんことを誓ふに至らんめしなり。是を以て、特に式日等には職員生徒、一同校歌を唱へ、益々、其の心を強くせんことを務め居れりと云ふ。其の歌は終りに揭ぐ）を唱へて、式を終りしは九時過ぎなりき。それより余興あり、最、初に、一同開校式の歌（下に揭げあり）を唱へ、第一に三年生の、毬投げ遊び、及び、進めの遊戯をなし、二年生のかへ〳〵手毬、一年生呈茶遊び、技藝專修科一年生の坐取りあり。本科四年、及び、卒業生の研究生として、在學するものとにて花資、及び、「グランドチエーン」遊戯をなし、終りて學校長より、本日より、一仝袴を穿ちたることにつき、責任の重大となりしことの告示あり。後、一仝、運動場に出て、蓮花の遊びをなし、歡を盡して退散せしは正午過なりき。

因に云ふ、仝校は、平素質素を旨とし、服裝は、絹布を用ひず、式日と雖も木綿の紋付を着用することに定めありしが、今回、創立紀念日をトし、更に、職員生徒、一仝木綿の袴、（職員は黑、或は茶色、生徒は海老茶色）穿つこととなり、式日ても紋付の上に着用することに定められ、頭髮は、別に裝飾を用ひず、銀杏、髷、又は束髮に期

せずして、一定せりと云ふ。

＊　＊　＊

校　歌

こがれの鯱はあめつゆに　ぬれていよ／＼かゞやけり
操のまつはしもゆきに　あひてます／＼いろふかし
年つきかさねまなびにむ　のち世におのがたゝん身の
ひかりは鯱にきほふべし　みさをはまつにならふべし

＊　＊　＊

開校式の歌

一、この名古屋市の人々の　深きこゝろを根ざしにて
つくれる女のまなびやは　千代も動かじかたむかじ
二、千とせの松の木の間には　こがれの光りかゞやきて
名さへめでたき久屋町　ひさしき世々に傳ふべし

●名古屋高等女學校卒業生同窓會發會式兼第一回總集會　五月廿一日午前十一時より、卒業生全窓會發會式を高等女學校内に於て、開きしに、來會者は甫守校長を始め、全校職員一同、及び、卒業生なり。今其の概畧を記さんに、全日は、全校假講堂に、最も嚴肅なる式場を設け、別紙順序書の如く、假委員より、總裁推擧の報告、及び、全總會組織成立の申告あり、次に、一全唱歌君が代を奏し、次に、教育に關する勅語の捧讀、次に、唱歌校歌を唱へ、次に總裁甫守校長は、式辭に代ふるに卒業生の、社界に於て身を處する心得につき、懇篤なる訓戒ありまた、戸野首席教諭、枝吉教諭、關川教諭、村瀬囑托教員、吉田囑托教員、松尾囑托教員の祝詞、祝詠、卒業生總代の答辭あり。此の時時計十二時を報するを以て、客員會員、一同休憩室に入り、暫時休憩、一同午飯を契し、談話、及び、電信遊び等ありて、一全歡を盡せり午後二時より、一同、再び、前の式場に入り、第一回總集會を擧行せしに、唱歌、金剛石を以て式を初め、別紙の順序を以て、假委員より會務の報告、及び、卒業生の學校より教育されし主旨に基き、實行の注意に關する注告、議事委員撰擧（高取せき子、八田孝子、服部ゆき子、吉田たゞ子、小島しう子、川口あい子當撰せられたり）あり、次ぎに同窓會員荒川のぶ子、安藤みつせ子、横山くに子、の祝祠次ぎに會員總代、八田孝子の祝祠あり、次ぎに全窓會員林たつ子辻あづ子、兩氏の卒業生は、卒業後と雖とも、在學中教訓されたる主旨を、かたく服膺實行すべきことに決心を述べ、次ぎに客員戸野教諭は演説に代ふるに、奈良縣高等女學校生徒より送りたる、奈良縣高等女學校紀念會の發況を、詳細に記載せる報告を朗讀して、會員に示し、次ぎに總裁甫守校長は卒業生全窓會の、將來に於ける責任の重大なること、及び、卒業生の心得等につき、詳細なる訓示的演説をなし、次ぎに客員會員、一同共に學びしなる唱歌を唱へ、午後五時閉會をつげ、別室に於て、茶菓を喫し、一二の余興をなし、同じく六時頃、一同、愉快に退散したり。全日は、全校卒業生同窓會を組織せし以來、初めの會合なれば、將來の爲め、眞摸を示さんとて、同窓會員一同は、凡てにつきて、在校中と同一に質素を守り、服裝の如きも在校中に規定せられたる木綿の紋付を着したりしが、校長始め、職員一同も、この有樣を實見して、頗る滿足の意を表し、將來も、今回の卒業生示導者となり、全會に於ける着實質素の眞模範を示さんことを反覆訓示せしが卒業生一同も、

大に感動する所あり、躬行實踐、以て、世の成年女子の模範となり、世の女風を矯正せんことを期せりと云ふ、要するに仝會は、其の名の如く、愛知縣名古屋高等女學校卒業生を以て、組織し、仝校教養の恩と、仝窓の交誼とを、永遠に記し、合せて、互に智識を交換し、休戚、相助くるを以て、目的となし、且つ仝校に關係ある職員は、前任現任を論ぜず、乞ふて客員となせりと言ふ、左に祝詠を掲ぐ。

岡助教諭祝詠

　さ月の末つかた名古屋高等女學校同窓會の發會式にのぞみてうれしさのあまりに
きのふけふ青葉にしけるわかへて
　　やかてにしきの色やそむらむ

村瀨囑托教員祝詠

　仝窓會の組織をことほきて
撫子のつゆわすられぬ友かきを
　　うれしや千代に結びそめたる

吉田囑托教員祝詠

　名古屋高等女學校卒業生仝窓會發會式をことほきて
この園に植かへられし姫百合の
　　花さきそむふるいろを見るかな

松尾囑托教員祝詠

　名古屋高等女學校卒業生仝窓會發會式祝辭に代へて
うごきなくつたへ榮ゆくためしさて
　　根さしもふかき千世のいしずゑ

● 女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは、一音の漢字にて認むし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにひとにても隨意に投稿することを得



敎の庭

八月十日兼題　泉聲秋近

天

岩しみつおとをきくたに涼しさは
そこにやあきのまたきかよへる
芝山內十八號　隈本千枝

地

おのつから秋の近さもしられけり
いづみのこゑのすゞしまされば
日本橋區濱町一丁目廿四番地　諸井久良子

人

やまかけはわきて泉のおとすゞし
ちかづくあきやそこにこもれる
三河國寶飯郡牛久保町　伊東いさ子

秀逸（十首）

岩はしるみづの音すみて聞ゆなり
あきちかつきししるしなるらん
肥後　溝口貞子

わき出る清水のおとのすゞしさに
あきもまちかくやどりきぬらん
肥後　黒田明子

秋風のそこにやまたきたちにけん
おともすゞしきまつのしたみつ
三河　永井さい子

わきかへる岩まのしみづ音すみて
あきかせかよふまつのしたつゆ
下谷　椎野ぬき子

山かげにわきていづみの音きけば
あきのとなりのこゝちこそすれ
肥後　德永萬壽子

ほどもなく秋やたつらんわき出る
いはまのしみづおとのすずしさ
肥後　德永廣子

わき出るしみづに秋やすみぬらん
いはましただるこゑぞすずしき
肥後　澤田恭子

こけ清水岩ねをあらふこゑすみて
あきのちかさもしられぬるかな
淺草　吾妻ちか子

みやまよりながれ泉のおとすゞし
みづのそこにはあきやすむらん
四谷　牧瀬かう子

わき出づる清水に秋やすみぬらん
おときくたにもすゞしかりけり
伊豫　森琴子

（以下原稿到着順）

秋ちかくなるとしられてやまの井の
くむみつおともまれになりけり
河田ふく子

とふ人もあきちかけれはまれにして
いはこすみつのおとのみぞする
河田いし子

わきいづるしみずの聲のすずしきは
いつしかあきもちかくなるらん
石井豊子

岩むせふみづの音さへてきこゆなり
やかてそあきのたゝんとすらん
中津千野子

たへかれし夏もなこりとなりぬらん
　いはもるみづのおとのすゝしさ　中山富子

岩間よりわきていつみのおときけは
　あきもちかよるこゝちこそすれ　山田稻子

わが庭のみぎりのいづみおとすみて
　あきかぜちかくなりにけるかな　村上昌子

むすふ手にあきもしられて岩しみづ
　おとにもなつはなかれけるがな　淵本家壽子

手にむすふいつみの音にしられけり
　そこひにあきのすむこゝちして　木庄志雅子

音すみてねやにきこゆるいはしみづ
　ちかづくあきをつけんとすらん　友永章子

わきいづる清水のしつくおとほそし
　いはこすなみもあきやちかつく　那須昌子

よにしらぬ秋やかよふとおもふまで
　おともすずしきにはのましみづ　虎口賞子

風のおとはまだかはられどまし水の
　こゑにあきこそちかつきにけり　佐々小琴子

桐の葉はおちそめねどもましみづの
　おとこそかはれあきやちかつく　佐々布鄰子

むすはても岩間つたひのおとすゝし
　いつみかもとはあきやすむらん　林瑟子

あきかぜのこゑをあはせて岩つたふ
　しみづにあきはちかつきにけり　齋藤せん子

立よりしいは根の清みづいはねとも
　おのつからなるあきそこもれる　泉久眞子

さらぬたに夏をわするゝいはかけに
　あき知りそむるみつのおとかな　竹村竹里子

立よりてあつさわするゝましみづは
　いはまつたひてあきやせくらん　村崎包子

くみなれし庭のいづみのすゝしさも
　あきにちかきをおとにこそしれ　中村彩枝子

もれいづるいづみの音のすゝしきは
　あきやひと夜をこめてきぬらん　福原萬子

秋ちかくなりにけらしなつれよりも
　いはもるみづのおとのことなる　河口文子

さらぬたに音のすゝしきいはかけに
　あきをしらせてゆくしみつかな　石川類子

秋ちかくなるやいつみのおときゝて
　むすはぬそてもすゝしかりけり　石川樂子

いつしかも清水のおとの身にしみて
　あきかぜさそふこゝちこそすれ　石川久子

あき來とは岩井のみつのおとはかり
　またなかすへきおちはなけれは　石川南江子

湧き出るいつみのこゑのすゝしきは
　あきちかゝらむしるしなるらん　新井蝶子

いはまもる谷のましみずこゑすみて
　あきのちかさも知られぬるかな　田中陸子

山かけのいはもるしみつおときけは
　あきのちかつくこゝちこそすれ　矢島すみ子

いつしかとおもひし秋はいは間もる
　清みづかもとにかよひきにけり　山田峰子

秋やきぬあきやちかつくわきいつる
　いつみのこゑのいとゞすゝしき　駒澤まつ子

かぜわたるまつの木陰のみづの音に
　かれしも來らんと思はれにけり　畑野利卿子

立ちよれはおとも涼しきいはしみづ
　むすふたもとにかよふあきかせ　山田婦美子

夏としもおもはぬはかりましみつの
おともすゝしくかよふあきかせ　山田靜子

秋もはやあすかきぬらんいはしみづ
いはもるおとも身にそしみぬる　岩瀬香世子

めにみえぬあきかよふらん岩根うつ
こゑだにすゞしたにのましみづ　新藤雪子

音きくもすゞしかりけるいはしみづ
いつしかあきのちかくなるらん　小森田輝子

なつあきをへだつる水のおときけば
ぬらさぬたもとすゞしかりけり　澤田十萬里子

夏あきのなかをながるゝいはしみづ
身にもすずしくおぼえけるかな　澤田靜穩子

岩間もるいつみのおとのすゝしさに
あきもまちかきこゝちこそすれ　山根久子

岩しみついはねとおとにしられけり
あきやとなりにちかく來ぬると　笹子茂子

岩間もるすみつのおとのすゝしきは
ひそめるあきをさそひ初めけん　敷島花子

いはし水ながるゝおとのすゝしさに
あきとほからぬこゝちこそすれ　濱田なほ子

山の井のいはもるしみつおとかれて
あきかぜかよふこゝちこそすれ　高やす子

まつかげの岩まのしみづおとさえて
ほのかにあきをしらせがほなる　小林やす子

さや／＼とまたきに秋をやどするか
わきいづるみづの音のすゞしき　綿野りき子

秋ちかくなりにけらしないはばしる
たに間のいつみおとさゆるなり　白岩艷子

秋ちかくなりぬることはいはしみつ　名取よし子

うへふくかせのおとにこそしれ

岩しみつわきいづるおとの涼しさに
あきはちかくもなりにけるかな　坂田きみ子

わきいづるしみつの音もつきかけも
そこまてすみてあきちかからし　服部かつみ子

岩まよりなかれいつみのおとつれも
またきあきなるやまのおくかな　賀茂笹子

秋ちかくなかれいつみのおときけは
なつとしもなきやまのしたいほ　河合ぬひ子

岩まよりながれいつみをせきおとす
あきもとなりのおとのすゝしさ　服部萬子

山みつのおとはかすかになりにけり
みなみおろしやにしにかはれる　加藤數子

なつもはや秋をかけひのみつふれに
なかれいつみのおとのすゝしさ　伊東千代子

たちよれは昨日にかはりおのつから
あきのこゑあるやまの井のみづ　青木たま子

わきかへるいつみの聲のすゞしさに
あきのゆふへのこゝちこそすれ　萩原章子

夏やまのいつみのこゑのすゝしさに
あきはちかしとおもひけるかな　小曾根しう子

まつかげの岩間をせはみわくみづの
おとにちかつくあきそ知らるゝ　片山あや子

岩間よりもるゝいつみのこゑきけは
あきもちかつくこゝちこそすれ　新海わか子

月さえていつみのこゑもすみぬれば
あきのちかきもしられぬるかな　村瀬菊枝子

秋ちかみいはまをもるゝましみつも
おりゐてむすふひさなかりけり　野中靜子

ましみつの岩まにかよふこゑきけは
こなりにあきはちかつきにけり　中村きよ子

水の音はあきかとそ思ふやまかはに
みそきする日もちかつきぬらん　田中房子

湧きかへるたにの清水のおともはや
みにしむあきにちかつきにけり　高橋頼子

山かけのいは井の水をむすひあけて
わか身はかりのあきやしめてむ　濱さみ子

やかて來ん秋をしりてやいはまもる
みつの音わきてすゝしかるらむ　新泉翠子

しけりあふあを葉の下にたちよれは
あきのこゑある山みつのおと　立田原富子

涼しさをこめてなかるゝいつみかは
おち葉うかへてあきをみせけり　小笠原寛子

あきつ飛ふほそたにかはの水おとに
あはれなつはもくれんとすらん　小笠原元子

いはまよりもるゝ清水のおときけば
あきかせかよふこゝちこそすれ　寺田みち子

夜もすがらまくらにひゞく山かけの
かけひのしみづあきのこゑして　目黒佐喜子

すゞしやなのきばの谷のいは間せく
みづのこゑにはあきぞこもれる　都水春子

岩間よりわきいづる水のおとすみて
またるゝあきもちかくなりけり　大谷津峰子

岩がねをくゞりくゞりて湧くみづの
おとさへすみてなつはてんとす　尾崎嘉子

わきいづるいつみの流れきゝぬれば
あきやちかきとおもほゆるかな　川田八重子

ま清水のながるゝおとのすゝしさに
あきのきぬらんこゝちこそすれ　池澤天與子

秋近かくなりにけらしなゆうなきに
いはこすみつのおとすみまさる　吉崎慈根子

水かみにあきや來ぬらんたにかはの
なかるゝおとはなつとしもなし　日高かず子

岩かねをはしる清みづのさら〱と
身にしむまでになれるなつかな　北島功子

よひの間にあきたちけるか眞清水の
おとのさびしく今朝きこゆなり　北島松子

秋ちかみいはまのみづのおとすみて
ゆふべすゞしくおぼゆるかな　服部倫子

秋ちかくなれるしるしかいはしみづ
いよよすゞしきこゑをたてけり　小森田初子

いはしみつわきて流るゝかたははや
あきもちかよるこゝちこそすれ　田代綾子

聲すみていは間もりくるなつやまの
しみつやあきのよるべなるらん　戸塚てつ子

なつやまのあつさを流すいは清みづ
すゝしきこゑにあきかよふらん　舘脇ます子

眞清水のながるゝこゑもすみ〱て
ちかしさあきをおもひけるかな　杉浦いさ子

我かいほののきばすゝしく音すみて
あきをことわるはしり井のみつ　泉川うた子

秋ちかくなりにけらしもやまの井乃
わきいつる聲のすみまさりつゝ　相澤さた子

さよふけて清水なかるゝおときけは
もの思ふあきもまちかゝるらん　菅原松子

八月十日兼題

天　故鄕

奈良市鍋屋町　小林やす子

故鄕こそなつかしきものなれ、わが身の生ひ立ちしは質にこの故鄕なり、こひしき父母のおはするところ、愛らしきはらからの遊べる處、したはしきもとの教のおやもいますべく、なつかしき友も學ぶべし、春は野邊に蕨を折り、秋は山路に紅葉をかざしてあそびし故鄕、いまは海山とほくへだてゝ、おのれひとり東路にあり、思はでやは此故鄕、戀ひでやはわが故鄕、せまき庭なれども、櫻も咲き柳もなびく我家は、上野の山よりもゆかしきを、雨の夕ぐれのさびしさは、わがふるさとにまさるものなし、父母いかゞいぶせくれはすらむ、夜更けしづまりて犬のなく聲きけば、我家に今なほいにたらむ心地す、何につけても靜かなるふる里のけしき、目に耳にさやかにのこりて、なづかしともなつかし、かの忍向法師は「志を立てゝ鄕關をいづ効もしならずんど死すともかへらず」とかいはれつれど死なむ故鄕の土となりてこそうれしけれ、いさゝかにても、父母の御もとにありての後にこそ死なめ、しすともかへらずとはなさけなき事よと思はるゝは、心よわければにや、そもわが故鄕をいでたちて、こゝにきたりしは、一ッには君と國との御恩の萬一にむくい、二ッには故鄕に、三ッには父母に、それぞれ受けし恩のいさゝかをむくえむとてなり、されども心よわく効なくしてかへりなば、かならず恩しらずとそしられ、めゝしと笑はるべし、あわれ學びの道につとめはげまむより外に、再び故鄕にかへるべき道はなく、わが父母にまみえんすべもなし、さらば舊ひて學びの業をつとめ、正しき行をし、わが志の成就せんとき、なつかしきこの故鄕のために身をつくしてつとむべくなむ、わづま路の富士の高ねのたかくきよきを慕へばとて、我ふるさとの三笠の山のけしきをいかでわすれむ、事なりてかへらんとき、あはれこちたく家づとを身にそなへて、故鄕の人に受けし恩のいさゝかをむくい得たらむには、いかばかり心地よからむ、わが願ふところは、たゞこひしき故鄕のよきところとなり、したはしき故鄕の人の世によき人といはれむ事のみにあるなり、故鄕につくすはやがて國のためにつくすにひとしけれどなり、かく思ひもてゆけど、今かなしく故鄕にはなれ居るも、故鄕のためにする事なりとうれしくて、思はずいさみたちぬるは、我身に似ずいといぶかし、

地

四谷區南つか町　四拾番地　牧瀨かう子

よに故鄕ばかり戀しく慕はしきものはあらじ、春のあしたにうらくと匂ひ出でたる花、秋の夕に光さやけく澄みわたれる月を見ては、わが故鄕の月花もかくやあらむ、同じあはれに人も見るらむとなつかしく、は

たる雨そぼふりてものさびしき夕まぐれに、いづこともなく遠山寺のかねの聲のたえ〴〵にきこゆる等、いづれ戀しきたねならぬかは、むかし何がしの朝臣の、よせてはかへる白浪を見て、うらやましくもよみ給ひけんも、げにうべとやそ覺ゆれ、かもかくも、たとしへなく戀しく慕はしきものは故郷になむ、

花見ても月影見ても戀しきは
わが故郷のそらにぞありける

人

三重縣度會郡宇治中之切町　河原芳子

「住めぞ都」とは、よくも言ひたりや、いかに賑はしくをかしき花の都にありても、寂しき山里のみる影もなきあばらやながら、もと生れたる故郷の、戀しくなつかしきは、なべて人の情ならむ、海山萬里、家を離れて、遠く他鄉にすまへる身の、賑はしくうるはしき花を見ては、いかで故郷の春を思はざらむ、さわやかなる月にむかひては、いかで故郷の秋を思はざらむ、夏の夜のすゞみ、冬の朝の雪見、いかで故郷にありし時のことを思はざらむ、花はいかにうるはしきも、月はいかにさわやかなるも、いかで故郷にてのたのしさに及ぶべきや、夏のすゞみ、冬の雪見、いかで故郷にてのうれしさに及ぶべきや、げに戀しくなつかしきは故郷なりけり、

（以下原稿到着順）

友永翠子

今はにぎはしき都に住みぬれど、さすが生れし故郷のなつかしく、井に車にたすけられて、きてみれば、むぐらよもぎ生ひしげりて、なにさなくものすごし、門もくづれ軒の瓦も落ちて、朝な夕なはらひきよめしさころさもみえず、庭の池も、かはらのわれかべのくづれなどうづみて皆むせり、鼈がいたづらにはなちし魚も、水草しげりてひれふるおさもきこえず、おほかたいたちなどのくひつくしたるならん、たゞかはらぬものは松風のおさばかりなりき、

ふるさゝの庭は畠さなりぬれさ
かはらぬすがた松にみえけり

佐々宥鄰子

ひさしくかうの殿の御もとに仕へ奉りて、東京のやかたに住みしが、今年は、姫君の、故郷なる海山へだてし産土の神詣なしたまふ御供にめされて、出立ちぬ、そもそも遠津御祖のかみのきづきて守りたまひし大城の趾に立よらせたまへば、むかしながらに城上の松は枝高くみどりこぶかくさかえぬれど、城門はくづれてうごかぬものは礎のみ、天守臺は石垣殘りぬれど、高櫓は侘もなし、御前の池かさみれば、草のみ生ひしげり、水はかれはてゝ、むしのすだくこゑしきりなり、島山はきりひらき粟蒔つけて、皆樂ゆたかにみえぬ、やり水は當時のすがたにすみわたり、賤の男が小田にひきかけて千町の稻をそやしなへる、うつりかはる維新の御代の御掟のほど、かたじけなくあはれなれば、今日のありさまをかくなん、

新井蝶子

如何に物憂しと思ひし故郷も、別れとなれば中々に戀しからまし、まして父あり母あり兄弟あり姉妹ある者に於てをや、すぎつる年の春なりき、妾も物學ひの爲めとて、東の都へ旅立ちしより、只管故郷の忍ばれて、山や何處、空や何處と、朝な夕な同じ思にかきくれて、獨眺め侘びしも屢なりき、實に戀しき故郷なる哉、實に懷しきは故郷なる哉、

畑野利舞子

いにしへの人の、「郷を出でざれば其如何に戀しくなつかしきかを知らず」といはれしは、實に宜なる哉、あしかきのふりふるさとを出で來しは、去りぬる彌生の廿五日なりけり、たらちねの母君、小垣なす友どち諸共、茶臼山の緑ふかき間をほとばしる八幡瀧のほとりに、なかしうならべる岩の上を座とし、あるは若葉がくれに鳴きかはす時鳥の聲を聞き、あるは燃とふく風に早苗とる田子を遙に眺めつゝ、歌合せなどを試み、腰なる團扇をも打忘れて興じたりしも、思へば去年の事にてありき、

今は、たゞ憂き世の空を仰ぎつゝ、都路にさまよへれば、かゝる事は夢にだに見んすべもあらず、嗚呼旅寐の床にありて思はるゝはふるさと、故郷の思はるゝにつれて待たるゝは夏期のやすみになむ、

一すぢにまなばでやとはしりながら
なほふるさとのおもはるゝかな

新藤雪子

世には、故郷ほどなつかしきものはあるまじ、妾はこぞの末つかた、父母に乞ひて學びの道を辿らんと、家を出で、文の林に入りしより、日々に怠りなう女子の業勵みぬれど、いとゞ古郷のなつかしう思はれて、父君母君には如何におはすらん、幼き妹などはいかになし居るらんと、雨の夕風のあしたに忍ばれ、又夜に入りて、ひとり机に向ひ文の紐ときぬれば、窓もる月の影清く、照さぬ隈はなきものを、我ふる郷の人々は、さやかにすめる月影をいかにめでゝあるらんと、そのすかたのまのあたりにある心地して、いとなつかしうなん、うきまよふ雲なくて袖の淚の落ちくることもありけり、かくては學びの道の妨げと、吾と我身を勵まし、女々しき心うち捨てゝ、机に向ひぬ、折しもねぐらをいそぐかりがねの聲聞にければ、

かりがねの雲井すぎゆくこゑをだに
我ふるさとのたよりとぞ思ふ

中村さく子

あゝ思へばなつかしふるさと、十五年あまり慈愛暖かき父母の惠みの許におひ立ち、やう〳〵人となりたるに、御恩も報いで今ははるかなる旅の空、まして起臥も自由ならざる病にかゝり、如何にすべからんと思ふもいみじう、うきをかたらむ友もなく、時なくに看護婦の訪つるゝ外は、ひねもすかしましきせみの聲のみなれば、考ふるともなくふるさとの心にうかび、あひ見まほしき人も多く、妹もまなびのこけんいかなりしか、ふるさとに居たらむには、かくも心を碎くべからざるに、今より歸郷せんか、如何にせん、病もいゑざるにと、心を痛むるも甲斐なしと我とわが心をなぐさむるも、ふるさとのしたはしき一筋なるべし、あゝ人織るが如き賑はしき都より、田舍の賤が家なる我ふるさとのいく倍まじと思ふも、なつかしのあまりなるべし、

名取正代子

故郷ばかり戀しうなつかしきはあらじ、住みすてたらんにも、昔ながらの香に匂へる花、さては手植の松の木ども、今なほのこりて立ちさかえたらんには、いかにあはれになつかしくおぼゆらんかし、まして父母はらからなどをおきて出立ちたらん旅の、三とせ五とせ過ぎぬる程こそ、なが〳〵に戀しさなつかしさも一しほなるべけれ、さるは親はらからに逢ひ見まほしきは、いふも更なれど、親しき友にも、語らはんと思ふ事もあるべく、將此世に生れ出つるより、見なれ聞きなれつる山川草木のけしきをはじめ、其外、何くれと、年久しう、我がめではやしつるものゝ、なつかしきが多ければなるべし、されば、いかに賑はふ都にものせんにも、我故郷の片田家の、なかなかにわすれがたきはことわりなりかし、古き諺にも「すめば都」といふこともあり、これおのも〳〵生れにし故郷の、よきにまれあしきにまれ、戀しうなつかしき心をいひしものならんかし、

坂田きみ子

何がしの山は、打むれて花見し山、くれがしの野は、ふりはへて雪まの若菜つみし野邊、かしこはわが祖だちのおくつき所など、くさ〳〵おもひ出つるにつけても、忘れがたきは故郷になんある、されば、また錦を

衣でとにはあられど、久しく住みすてし里のなつかしさに、かへり見ばやと、三伏の暑さもあつしと思はず、こゞしき山路も苦しともせで、出で立ちくれば、道々の山川も、何となく昔ゆかしく、われを迎へたらんやうにおぼゆ、物うしといふなる旅ぢも、いつしかはかどりて、わが里近くなりぬ、されば、おのづから心もいさみにいさみて、おのが家居にと急ぎゆきぬ、やがて到りて見れば、心あてにと植ゑ置きし門の柳は、昔のまゝながらに打ちなびき、分け入らむかたもなき迄八重むぐら茂りぬ、軒さへかたぶきあれて、月かげももらんばかりにぞなりぬる、中にも、誰がなしへにか、色香なつかしく、撫子の一もと二もと、露おもげに咲きたるは、あはれいはんかたなし、移ろひゆくは世の常なめれど、親しき友垣の、あるは遠方に嫁がせられ、あるは此世の人の数にもあらずなりぬるなど、聞けば旅の衣の露けさも、いとゞぬれまさりてなん、四とせ五とせが間だにかゝり、まいて、行く末いかになど、そゞろに思ひ出づれば、みじか夜の夢もむすびあへず、ふけゆく空を鳴きわたる時鳥のこゑさへ、いとあはれを催すよすがとぞなりぬる、

高橋頼子

旅にある身の、折にふれてあはれしのばるゝは、古さとの事のみにぞありける、庭に出つれば、木立寂びかゝれる池に、金魚共の一むれ浮つ沈みつたのしげにあそぶを、學びのひまの友として、さくまなびの業を終へて、かへりなばともせむかくもくらさんと、そをたのしみに勤みぬるに、なぞや今日は見るさへもうしく、目に見耳にふるゝ物もあはれなるは、故郷事おもひ出つればなりけり、柳島根の月を仰ぐまで、唯一すぢに久方の文の林を分けなんと、老いにし父母につげ、おなし心の友に誓ひし言の葉を、反古にはなさじとおもふにも、いと〳〵たへがたき身のうへになむ、

綿野りき子

故郷と云へは、いとなつかしき心地するを、捨て行きて見れは、涙さしくまるゝ事のみ多かり、おのれ古里なる加州を出でしより、十あまり二とせ、其間に火あり暴風あり、まぬかれがたき出水のわざはひなどありて、里のあれたる様は云ふまでもなけれど、昔を語る友だになく、問ひゆかば先づ誰よりさきに走り出づらんなど思ひ居りし人の、かげもかたちも見えざるこそ、いと〳〵かなしけれ、せめてもとたどりし野邊、土橋くづれて、木橋と變り、木橋は落ちてあとかたもなし、蝶を追ひし方は何處ぞ、平々たる野邊はすかれて田となり畑となりぬ、哀れ、此上は何をかたのまむなど思ひあまりて、みあげたる空に、ふと目に入りたるは、高くそびゆる白山のかげ、あなめでた、あなゆかしも、之のみは昔のまゝのすがたにてありけるよ、

うつりゆく世にもかはらぬ白山の
かげやみ國のすがたなるらむ

都水蓉子

あはれ故郷、故郷ときけば只戀しやな、朝な〳〵の寐覺にも夜毎に結ぶ夢路にも、忘れぬものは故郷ぞかし、其故郷を出つる時よ、住み馴れし里の景色を後に見て、心細くも遠ざかれば、目馴れたる山の姿は、見返る度に小さくなりて、果はいつしか狭霧にうもれて、忽ち見えずなりぬるなんと、あはれに悲し、まいておのれは、孤兒の寄る邊もあらぬ身にしあれば、いとゞ戀しさぞまさりける、花を眺めては、そゞろに故郷の庭を思ひ、月を仰ぎては親はらからと倶に悶たりし昔を偲び、雪を見ては又た故郷の景色を思ふ、斯くばかり戀しと思ふ故郷に、吾身はも、いつ歸り行くらむ、祖父祖母と、親はらからと、一つに居ますおくつきも掃はで年を経るなれば、いかに荒れにけむとぞ思ひやらるゝ、されど、おのれは業成しはてゝ、身に錦着て歸り得ずば、ちかひてみ墓にま見えまじ、

大谷津蜂子

あはれ、世の中に、故郷ばかり戀しく、かつ懐しきものはあらじかし、古人の、故郷忘れがたしと言はれたりしも、實にうべなりけり、思ひかへせば、五年の昔、ふたりの親達、又妹弟等は更にもいはず、いと親しかる數多の友だちと袂をわかちて、東の都に上り、某學校に入りつゝ、月日は恰も矢の如く過ぎて、今年またく業を卒へぬ、よろこび歸りて、常に

懷しとしたひ、戀しと語り、しばしのまも忘れがたかりし故鄕にぞ歸りける、實にその嬉しさは何にかたとへん、又何にかくらべん、いと懷しくかつ戀しきふたりの親達、いとけなき妹弟等は、共に妾の歸りきぬるを、指をりかぞへて待ちわびたるにやあらん、嬉しげに妾の傍に寄りつどへるぞ、いとも〳〵なつかしき、その夜は、それとなく、互に問ひもし問はれもし、種々の物語りに、いつしか時うつりて、久方の月影も山の端にかたふきぬ、あはれにも慈愛いとふかき親達は、妾をいたはり給ひて、旅のつかれもあるべければ、とくいねよかしと、懇切にのたまへり、其御言のまに〳〵、伏所に入りつれど、あまりの嬉しさに、束の間も眠りもやらず、明日よりはかしこき親達に、かくして仕へまつらばや、又はしき妹弟等に、かくして庭の敎を導かばやなど、おもひつゞける、折しも、塒をやはなれけん、或は西に、あるは東に、おのがじゝ啼きわたるからすの聲ぞ聞ゆなる、さばかりにおどろき、門戶の窓おしひらき見れば、うば玉の夜は、ほの〳〵とあけはなれて、うら〳〵と登る日影の、山々に匂へるけしきは、一入珍らし、いざゆきて、戀しくかつ懷しき友だちの家などおどろかさばやと、朝まだきより家を出て、うち見渡せば昔あれはてたりし田畑も、今は軒を列べ、へいをきそひ、いと賑かなる街となり、又賑しかりし所は、いよ〳〵賑ひにぎはひて、夜晝のけぢめなきまで、車馬の往きかひいとしげき市とはなりぬ、しかはかり、そこかしこのいたくかはりにかはりたるは、これ日にひらけ月に進みゆく大御代の大御惠ならずして何かあらん、あはれ故鄕の、かく長久に、いと榮ゆに榮ゆ行くあり樣を見るは、實にいとも〳〵歎ばしく、かつたのもしきかぎりにこそ

瀧島功子

めぐる月日に關守なしとかや、おのれ學の道をこゝろざし、草枕都の空に、結びしより、指折かぞふれば、はや二年あまりとはなりぬ、あるは臨講の朝、復讀の夕、さては雨の日めもす、風の夜もすがら、あはれたのしきにつれ、うきにつれ、おもひいづるゝのは、げになつかしき故鄕の地になんありける、氣澄み水淸き故里の地には、最親最愛なるたらちねの君をはじめ、はらからの君々にもみ恙なくていますらんこと、なりなりに洩らし給ふ消息うれしさもうれし、あはれこの文の便りなくは、夜每の夢の其外には、故鄕の樣見んすべもなかるべく、花さく春のあした、月匂ふ秋のゆふべ、あだし里に唯一人端居の席の、いと寂やかなるを覺につゝ、そゞろにしのばるゝは、親しき花の友垣の上ぞいかし、今日此頃、起臥いかにくらすらむなど、おもひ去りおもひ來り、己れに問ひおのれに答へては、なか〳〵に、限りもなし、故鄕の地の今更のごとこひしう戀はしくてなん、

小森田輝子

ものおもひは秋こそまされと、昔の人のことの葉、げにしみじみとおぼゆ侍りぬ、ひるは學のわざにいとまなく、いろいろにまぎれしも、夜はものしづかになりて、秋風に庭のすゝきのそよぐおとのきこゆるころになりては、なにとなう父母のことのみおもひいで、すこやかにましますや、いかにくらしたまふらん、またしたしき友どちうちつどひ、何事をかなしたまふらんなど、むねにうかぶこと、みな故鄕のみこひしく、一日もはやく學のわざをへて、こひしきたらちねのもとに仕へまつり、心をやすめまつり、したしき友どちと、何事もいましめられつゝいましめつなしたらんには、こゝなふたのしからんと、夜もすがら故鄕こひしく思ひしが、今日立ちかへりみれば、ものがはり星うつりて、たのしみしごとにはあらざりき、

島津日新公の母

はや人のさつまのそらにいやたかく
千代にかゞやくひめかゞみかな

佐々豊水

みがきあげし女鑑こそ子孫の
こゝろをうつすたからなりけり

佐々木昭元

つたへ來し筆の林のおくふかき

こゝろのはなぞゆかしかりける

若かりしころ漢學をも武術をも共にせし安場男爵の逝去をかなしみて　佐々豊水

五月雨にうみはてたりしこゝろをば
ひさしぼくだく今日のかなしさ

竹馬にのりてきそひしそのかみを
おもひいづるもなみだなりけり

もろともにたのしくわけしこゝしげき
またのはやしもさびしかりけり

初めて子産せられたるよろこびに　稲原菫子

千代八千代よろづ代かけてさかゆらん
いまおひそめしまつのみどり子

たちはな姫

たちはなのゆかしき香をはさめおきて
さかみのうみにきはしきみかな

螢似玉　稲原菫子

夜をてらす玉かとぞ見ろうはたまの
をくらき庭におくほたるかな

小學校　田中睹

竹馬をよそに見棄てゝうなゐ子も
學びにきそふ世となりにけり

夕立　山田ふみ子

茶のらへにつゆをのこして夕立の
涼しく晴るゝむさし野のはら

朝顔

明日もまたさく起出てゝ詠めはや
つゆみはわたるあさ顔のはな

野田とせ女　佐々豊水

みなし兒を守たてし名は百千萬
黄金よりなほたふとかりける

人の兒のひめかみさぞなりにける
野田のをさめがたてしまこゝろ

門人松田菊子が布哇國にゆくをおくる歌　佐々豊水

けふりふき浪をけたてゝゆくふねの
ちふりのかみに手むけよくせよ

布哇國の粟をはむとも天皇の
つゆのめぐみをゆめなわすれそ

道　八重秀雄

いにしへの文をしみすはたまほこの
みちのちまたをいかでわくべき

しつかすむ片やまさとのはてまでも
かみながらなるみちはありけり

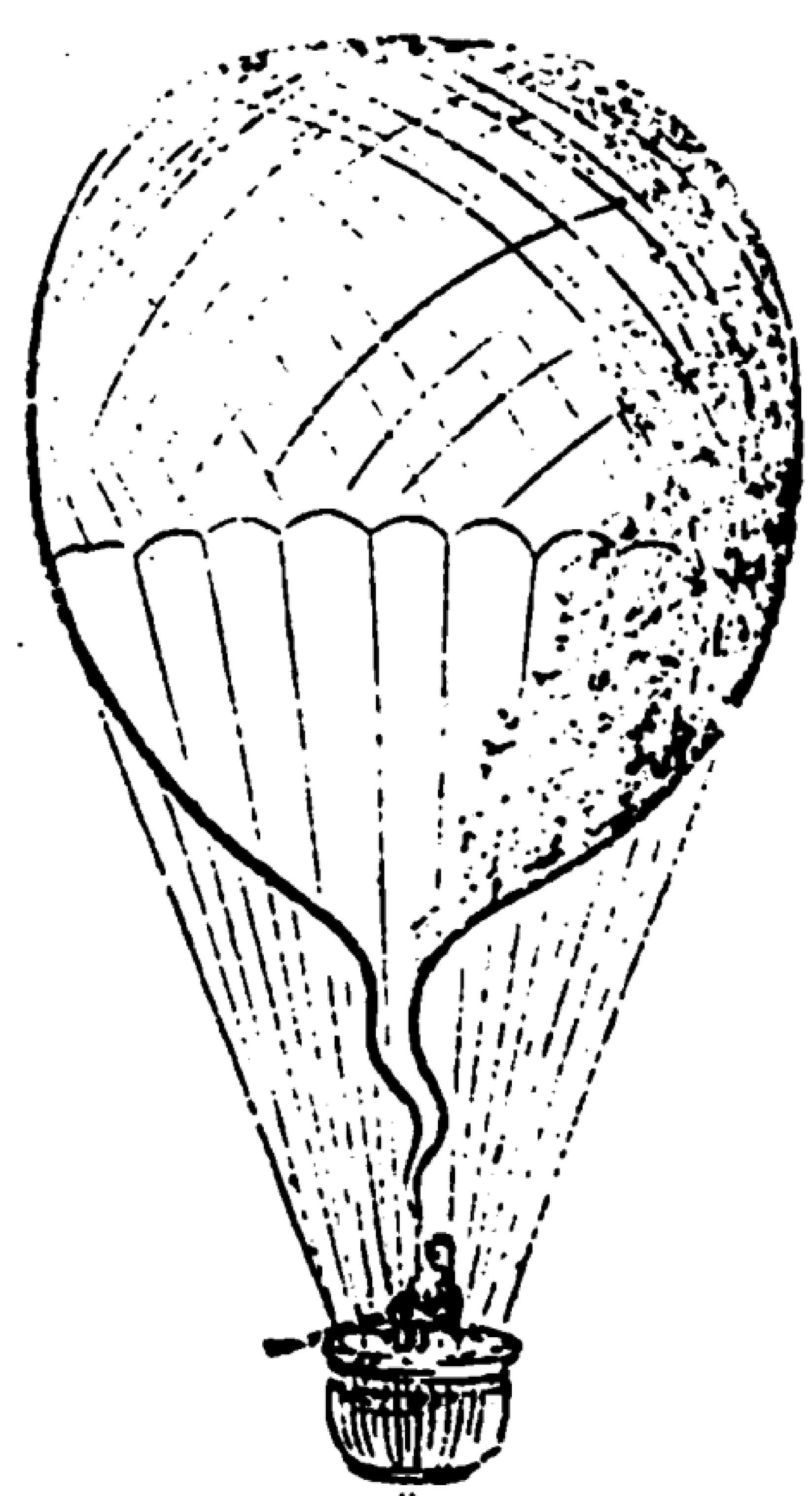
寄名所祝

君が代のめぐみも今はなとり川
おかれて末のふかくもあるかな



明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

八月廿日	歌	羇中虫	八月十日〆切
	文	舟遊	
九月五日	歌	閑居月	八月廿五日〆切
	文	水害を見舞ふ文	
九月廿日	歌	海邊霧	九月十日〆切
	文	暴風	
十月五日	歌	擣衣所々	九月廿五日〆切
	文	菊の花につけて友におくる文	
十月廿日	歌	野逕菊	十月十日〆切
	文	紅葉見に出てゝ雨に逢ふ	
十一月五日	歌	行路時雨	十月廿五日〆切
	文	案山子	
十一月廿日	歌	仙人	十一月十日〆切
	文	新嘗祭に客を招く文	
十二月五日	歌	社頭落葉	十一月廿日〆切
	文	勤儉	
十二月廿日	歌	煤拂	十二月十日〆切
	文	埋火	



品川彌二郎
平田東助　合著

信用組合提要

全一册

一部定價金五錢
郵送費金貳錢
郵劵代用は一割
增申受候

商業家の道德を進むるは商業の發達を計る所以の基本なり信用組合は今後殖產興業の上に於いて大に普及せしめざるべからず信用薄弱なる商工業は完全なる結果を收むること甚難し是兩氏が此の書を著されたる主旨なり我が社曩に本書を刊行して同志間に頒ちたりしも部數に限ありしを以て悉希望を滿すこと能はざりき爾來我が社に向ひて之が發行を望まるゝ諸彥日として踵を躡せざるなし今回我が社は大に之が普及を計り同志の希望に應ぜんために更に刊行することゝなせり冀はくは是より四方同志諸彥にまた遺憾なからしむることを得んか

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

妙技一等賞牌



金製寶石入指環

- 第一號　ケンドルビー入價四圓半ゟ拾五圓迄
- 第二號　アレキサンドル入價拾圓ゟ二拾圓迄
- 第三號　エメラルド入價八圓ヨリ二拾五圓迄
- 第四號　眞珠入リ價二拾五圓ゟ百二拾五圓迄
- 第五號　キヤツアイ入價拾五圓ゟ參拾五圓迄
- 第六號　眞珠入リ價七圓五拾錢ゟ二拾五圓迄
- 第七號　エメラルド入價拾二圓ゟ參拾參圓迄
- 第八號　オパール入價拾圓半ヨリ參拾五圓迄
- 第九號　色サフヤル入リ價八圓半ゟ二拾五圓迄
- 第十號　色サフヤ及眞珠入價拾圓ゟ二拾圓迄
- 第十一號　ルビー入價拾五圓半ゟ四拾五圓半迄
- 第十二號　眞珠及サフヤ入價拾圓ゟ參拾五圓迄
- 第十三號　色サフヤ及白サフヤ價拾圓ゟ卅圓迄
- 第十四號　色サフヤルビー價拾五圓ゟ四拾圓迄
- 第十五號　ダイヤモンド眞珠價卅圓ゟ二百圓迄
- 第十六號　ダイヤモンド色サフヤ卅圓ゟ二百圓迄
- 第十七號　ダイヤモンド價百五拾圓ゟ五百圓迄
- 第十八號　ダイヤモンド入價百廿圓ゟ參百圓迄
- 第十九號　ダイヤモンドルビー五拾圓ゟ二百圓迄
- 第二十號　ダイヤモンド入價四拾圓ゟ二百圓迄
- 第廿一號　ダイヤモンド入價八拾圓ゟ六百圓迄
- 第廿二號　ダイヤモンド入價六拾圓ゟ壹千圓迄
- 第廿三號　ダイヤモンド入價四拾圓ゟ四百圓迄
- 第廿四號　ダイヤモンド入價五拾圓ゟ五百圓迄

天賞堂

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地
（電話新橋三百三十三）

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第五版

女子處世論 全

菊判美本

定價二十錢　郵税四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徴し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虚構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女徳を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれは雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさは益を得ること必大なるべし。

發行所　國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

文科大學教授兼陸軍教授從六位內藤耻叟先生序
文科大學教授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全壹册

定價金三拾五錢
郵税四錢

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て嘗て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇內無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國に至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戸の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ぶ所を知らめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

杉谷正隆編

修身百首

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

發行所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
國光社

題辭樞密院副議長從二位東久世通禧伯 ◎仝樞密院顧問官從二位勝安房伯 ◎序文從二位松方正義伯 ◎仝從二位品川彌二郎子 ◎仝內務大臣從二位野村靖子 ◎仝大藏大臣從二位渡邊國武子 ◎仝貴族院議員正四位富田鐵之助君 ◎仝農商務次官從四位金子堅太郎君 ◎仝樞密院書記官長正五位平田東助君 ◎仝日本銀行總裁從四位川田小一郎男 ◎獨逸國大博士ウヰルヘルム、ロッシエル氏著 ◎子爵品川彌二郎君校閲 ◎平田東助君 ◎平塚定次郎君 ◎武內常太郎君 ◎湯川寬吉君共譯

商工經濟論

三版

上編 代價壹圓四十錢
下編 同 壹圓二十錢
二冊 郵稅金三十八錢

ロッシエル先生の經濟學に於ける固より天下の定評あり本社敢て一言を贅せず先きに全國實業家並に學者の渴望ょ副ひ全部出版の成を告ぐるや直ちに初版を賣盡し今や再版發賣するに至れり本書上下二編二千頁に及ぶ大部のものにして其全文飜譯の精到なる一字を漏省せし處なし戰後の經濟に處して大に商工業發達進步の點に心を致し力を盡くさんとするの君子此書を讀まずして何の書をか讀まむ

商工經濟論上編目次

同下編目次

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地 國光社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年八月四日印刷
明治三十二年八月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號新橋八八)　國光社

新刊

家庭の鑑

菊版美本

全一冊

定價金拾八錢

郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小說を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）　國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷部）